

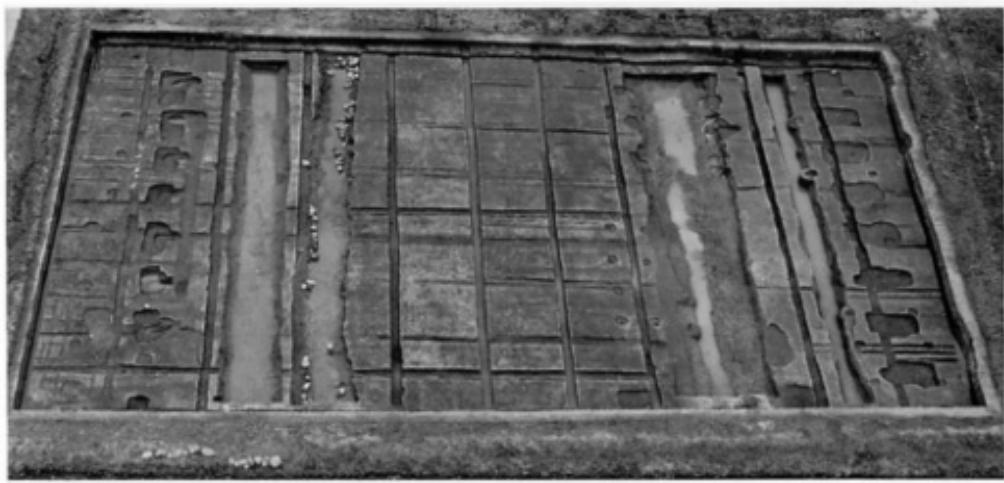
奈良国立文化財研究所年報

1991



奈良国立文化財研究所

1 上 山田寺第8次調査出土品銅板五尊像(×2) 撮影 井上直夫
下 藤ノ木古墳出土品 金銅製鞍金具 後輪 さび取り処理後 撮影 牛嶋 茂



上 山田寺第8次調査出土品 左 六弁蓮華文飾金具(×0.8) 右 珪出伝(×0.8)
2 中 山田寺第8次調査東区全景(北から)
下 鷹原宮跡第61次調査区全景(北から)

撮影 井上直夫

3 上 坂田寺第6次調査 南北回廊（東から）
下 坂田寺第6次調査 仏堂（東南から） 撮影 井上直夫



4 上 平城宮跡第216次調査区全景（北から）撮影 牛嶋 元
下 平城宮跡第214次調査区全景（東から）撮影 佃 哲雄

上 薬師寺北面東回廊（東から） 撮影 佃 勝雄
下 西隆寺跡（東北から） 撮影 牛嶋 茂

上 兵部省復原整備地区全景（東から）
6 中 同西第二堂（北から）
下 同西門（北西から） 撮影 但 神雄

目 次

口絵 1 山田寺第8次調査出土品	4 平城宮跡第216次調査区
藤ノ木古墳出土品	平城宮跡第214次調査区
2 山田寺第8次調査出土品	5 薬師寺
山田寺第8次調査区	西隆寺
藤原宮跡第61次調査区	6 兵部省復原整備地区
3 坂田寺第6次調査区	

はじめに.....	1
飛鳥地域の発掘調査.....	2
藤原宮跡・藤原京跡の発掘調査.....	11
山田寺跡出土の木簡.....	18
発掘現場における出土石材の応急保存処理.....	20
飛鳥藤原宮跡発掘調査部の保存科学処理施設・設備.....	21
平城宮跡・平城京跡の発掘調査.....	22
奈良時代の漆器の復元.....	40
法隆寺古瓦の調査(2).....	42
薬師寺出土の二彩陶塔.....	44
平城京左京一条三坊出土のガラス小玉鋳型.....	45
石山寺深藏聖教の紙背文書.....	46
平城京内における住宅の復原.....	50
神戸市の歴史的建造物調査.....	52
石田城五島氏庭園の実測調査と修理.....	54
大覚寺・大沢池(旧慈眼院)の調査(7).....	56
飛鳥資料館の特別展示.....	58
動物遺存体の調査(7).....	59
金銅製鞍金具のさび取り技法.....	60
木器集成図録の作成.....	61
地中レーダーによる遺跡探査.....	62
仏像のデジタルマッピング.....	64
平城宮跡の整備.....	66
海外活動報告.....	69
公開講演会発表要旨.....	73
調査研究彙報.....	74
奈良国立文化財研究所要綱.....	76

奈良国立文化財研究所年報 1991

発行日 1992年3月31日 編集発行 奈良国立文化財研究所 負担 本金敬藏 立本 修 印刷 日本写真印刷

表紙カット 平城宮朱雀門復原図

は じ め に

この年報は1990年度に当研究所が実施した発掘調査をはじめとするさまざまな研究活動と宮跡整備、資料展示、広報普及などの諸事業のうち主要なもの概要を簡単にとりまとめると共に事務的な報告事項を付して、当該年度における研究所のあゆみを紹介させていただくものである。

飛鳥地域の発掘では山田寺（第8次）と坂田寺（第6次）が小範囲ながら期待以上の成果を収め、前者では宝蔵、後者では仏堂と回廊を建築遺材や内部遺品まで伴なって検出した。石碑遺跡では主要建物区画の北に特異な平面の建築が発見され、複雑さを一層加えた感がある。

藤原宮、平城宮の発掘は官衙地区が主要な対象となり、平城宮では兵部省の全貌と相対する式部省間の広場の儀式的性格が明らかにされた。そのほか薬師寺講堂・北面回廊、西隆寺境内など発掘調査は両調査部あわせて53次、27800m²に及んだ。専門分野別の研究成果は各項目ごとに御覧願うとして、1991年2月から5月にかけて奈良、福山、横浜の3都市で長屋王展を開催し、本筋から復原される古代貴族の生活をわかり易く展示して好評を得たのも、当研究所の大切な社会的責務の一端であることを報告したい。

あいかわらず予算・定員など研究環境に対する制約はきびしい一方、文化財保護にかかわる国際的な支援協力の要請が格段に増加するなど、当研究所に荷せられる責務は一層強まっていることを痛感する昨今である。今後とも多くの方々に暖い御指導、御後援を賜ることをお願い致したい。

1992年2月

奈良国立文化財研究所長

鈴木嘉吉

飛鳥地域の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

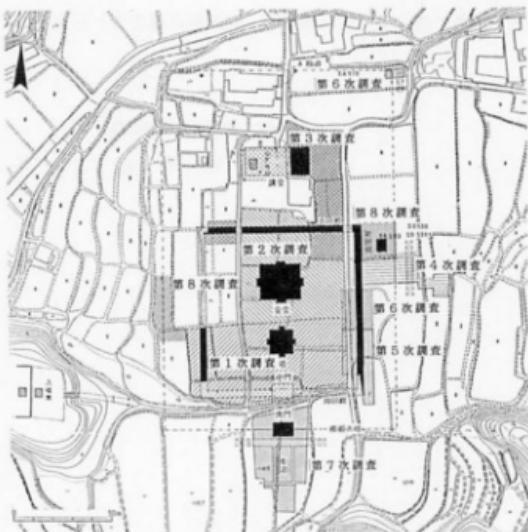
1990年度、飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、飛鳥地域において石神遺跡・推定山田道・山田寺・坂田寺など6件の調査を実施した（17頁参照）。以下、主要な調査の概要を報告する。

1. 山田寺第8次調査

1976年以来、山田寺の伽藍主要部の調査を行ってきた。今回はこれまで未確認の回廊の東北隅と寺域西限の2ヶ所に調査区を設け、東回廊と回廊東側の区画の状況、西門の有無などを解明するために調査を行った。

東調査区の遺構 東回廊SC060は北端部5間分を検出した。単廊で、柱間寸法は桁行・梁行共3.8m、外側（東側）の柱筋のみ壁・連子で閉じている。基壇は幅6.4mで、柱心からの基壇の出は1.3m弱である。

北回廊の東端間には扉口SX666があって、ここには通常より大きい地覆石を並べる。東端のものには扉の軸摺穴が穿たれていた。扉は内開きである。西側の軸摺穴の位置を柱との位置関係が東側と同じと仮定して推定すれば、東西の軸摺穴間心心が2.2mとなり、東回廊の北から12間目で確認されている扉口と比べ約20cm広い。扉口を出た北側は基壇化粧の崩壊が著しいが、階段が設けられていた形跡はない。



山田寺調査位置図 (1 : 3000)

東回廊の基壇縁から0.5m外側に東雨落溝SD552がある。北回廊には北雨落溝はない。東回廊の北から2間目に椿原石の板石や瓦で組んだ暗渠SX760がある。この暗渠は北回廊の南雨落溝の延長部にあたり、東方への排水の施設と考えられる。暗渠の内径は幅18cm・深さ20cmとなる。西端の蓋には長さ101.5cmの巨大な四重弧文軒平瓦を用いていた。この暗渠は回廊造営当初に作られたものと思われる。

今回の調査区では回廊の建築部材は少なく、地覆3本、大斗・肘木・垂木各1のみで

ある。ただし、垂木は反り増しがある。当初材とすれば飛鳥時代の垂木に反り増しがあることになり、取り替え材とすれば大がかりな修理があつたことになる。

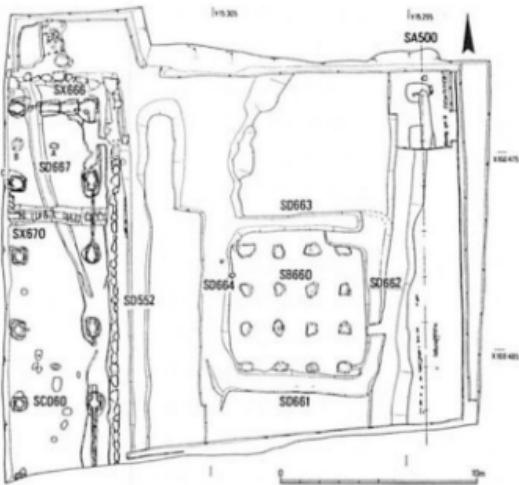
東回廊の東約6mに宝蔵SB660を検出した。3間×3間の総柱建物で、柱間は東西1.7m(5.5尺)、南北2m(6.5尺)の等間である。礎石は自然石で多くは上端を平坦にして使っている。この内4個の礎石上面には径が30cmの柱のあたりがある。四周に雨落溝がめぐって基壇状をなすが、実際には周囲の地盤面と基壇面の高さの差はほとんどなく、礎石上面で約25cm高いにすぎない。礎石は地山上に乳白色粘質土を積みながら据えているが、地山面を掘り込んだ古い礎石据え付け穴が存在することから、ある時期に地上げされたらしい。基壇出土土器からその時期は9世紀末から10世紀初頭と思われる。基壇周囲には雨落溝がめぐる。

幅は1~1.5m・深さ20cmで、護岸施設はない。柱心から溝心まで、桁行・梁行共約1.5mである。埋土中から大量の木簡・木製品・建築部材や金属製品が出土し、これらの遺物には経軸・仏具・経帙の題籠などが含まれる。建築部材には茅負がある。隅の留めに切った部分もあり、宝蔵が入母屋造か寄棟造であったことを示す。

回廊基壇の東から約14mに南北方向の基壇状の高まりがある。奈良・平安時代の整地土を除去すると掘立柱の南北隣SA500が検出される。今回は北端一間分のみを検出した。柱間寸法は4次調査検出分も含めて約2.3mとみなすことができる。

西調査区の遺構 発掘区のはば中央を南北に掘立柱の柱穴が一列に並ぶ。これが寺域西限の隣(SA680)となり、東限の隣(SA500)とは伽藍中軸線を介して対称の位置にある。柱掘形は一辺1.5~1.8mのほぼ方形で、深さは2mに達する。柱間寸法は2.25mである。ただし発掘区南端から3~5間目は柱間寸法が広いため、門(SB685)と考えられ、これが西門となる。西門及び西門より北の掘立柱隣は原則として隣あう2本の柱を一体の抜取り穴を掘って抜き取り、その後抜取り穴を掘形として再度柱を立てている。

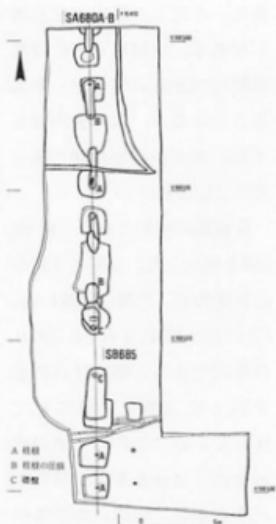
遺物 おもに東調査区から多量の遺物が出土した。このうち木器には、漆塗及び素木の経軸・漆塗函・漆塗の脚・漆塗厨子の扉・漆塗の茄子形仏具・漆塗の宝相華葉形仏具・八角台座・漆



山田寺第8次調査東区遺構配置図(1:300)

塗の蓋の軸部等がある。台の足には奈良時代のものと平安時代のものがある。金属器には銅板五尊像・押出仏・唐草文透彫金具（木枠付）・六弁蓮華文飾金具・厨子扉の座金具と蝶番・釘等がある。銅板五尊像は、縦4.5cm・横3.7cm・厚さ0.25cmで、唐代の作品と考えられる。また、宝蔵基壇上面から1点、同雨落溝から6点の木簡が出土した。宝蔵での経典の出納に関する木簡があり、奈良時代後半から平安時代初期の山田寺の組織や活動の一端が窺える貴重な資料である。

まとめ 回廊については北端に扉口の付くこと、垂木に反り増しのあることが新たな見知として加わった。宝蔵の発見も、山田寺の僧侶の生活に関係する施設を見出した点で重要なものであった。宝蔵はその所用瓦から7世紀後半の創建で、回廊等と同様10世紀末には廃絶していたと考えられる。西限の堀の検出により、伽藍を囲う区画の規模は東西118m・南北187mとほぼ確定した。西門は3間の規模ではあるが棟門程度の簡略なものであった。



山田寺第8次調査西区造構配置図(1:400)

2. 坂田寺第6次調査

この調査は広場・園路工事のための事前調査として行った。第3次調査でみつかっていた仏堂SB150の規模・構造の確定、これに取り付く施設の検出を目的とした。

仏堂 SB150 長軸方向が北で西に約15°振れる南北棟で、西を正面とする。桁行5間・梁行2間の身舎の四面に庇がつく礎石建ちの基壇建物である。

基壇は二重基壇で、下成基壇の規模が29.5m (100尺)×17.9m (61尺)・高さ0.6m・礎石心から基壇の出が2.4m (8尺)、上成基壇が28.3m (95尺)×16.7m (56尺)・高さ0.4m・基壇の出が1.8m (6尺)である。基壇総高は1mであるが、これは雨落溝の底からの高さであり、基壇の上面と基壇の南外・西外との高さの差はほとんど無い。基壇化粧は上成・下成とともに方形の花崗岩自然石（一辺50cm前後）を一

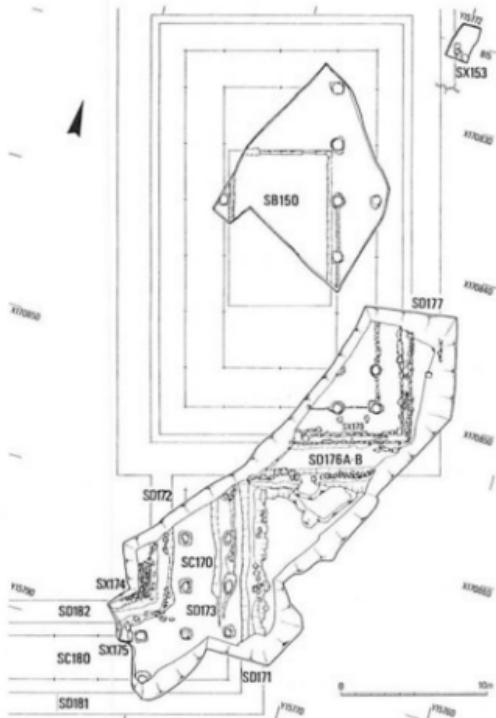


坂田寺調査位置図 (1:2000)

段並べるのを基本とし、東面の下成基壇のみ方形の石の上に小さい石を積んで二段とする。下成基壇の上面には拳大から人頭大の石を敷き詰めている。上成基壇上面は黄褐色の粘質土で堅く固められており土間床であったらしい。

建物の柱間寸法は身舎が3.86m（13尺）等間・庇の出が2.68m（9尺）であり、桁行総長24.7m（83尺）・梁行全長13.1m（44尺）となる。礎石は径2m前後・深さ0.7m前後の据え付け掘形の中に置かれ、礎石と穴の隙間には多量の礫が詰め込まれている。礎石は花崗岩を加工し円形柱座を造り出したもので、柱座径は62~68cmである。礎石3個の上には腐蝕した柱の根元部分が残り、柱の径は約55cmである。側柱・妻柱の礎石には、検出したすべての柱について壁受けの地覆材と壁の根元部分が残っていた。地覆材は、礎石据え付け掘形を埋め戻した跡に礎石と礎石をつなぐように掘られた据え付け掘形（幅30cm・深さ30cm）の中に、自然石や方形磚・平瓦を並べた上に置かれている。地覆材は現状では上に乗る壁の重さでつぶれているが、一辺20cm前後の角材と復原できる。壁は厚さ15cmで木舞を壁下地とし、それに黄灰色の壁土をつけて、表面には白土の仕上げを施している。東壁の南から2間目には柱間を三等分するように配された腰壁東の痕跡が残っていた。東は一辺16cmの角材である。基壇上および周辺から8世紀後半代の軒瓦がまったく出土しないことから、桧皮葺の可能性が大きい。

今回の調査でSB150の周辺の状況が判明した。当初、SB150の南面には幅3.5m・深さ1mの素掘り雨落溝SD176Aが設けられ、回廊はなかった。後に回廊SC170の建設に際し溝の南岸が石で護岸される（SD176B）。護岸を行う以前SD176Aの底には厚さ30cmほど砂が堆積しており、護岸はこの砂層の上に径20~60cmの自然石を一段並べ、裏込め土で固定することによって行われた。SC170基壇と重複する部分の裏込め土から平城宮土器IIの土師器が出土している。護岸石列が



坂田寺第6次調査遺構配置図（1:400）

SC170の基壇部分まで及んでいることから、SC170はSB150には直接には取り付かない可能性が大きい。SB150の東面には雨落溝SD177がめぐる。

回廊 SC170・180 南北回廊 SC170の基壇は化粧をしておらず、幅は東西両雨落溝の肩間で4.7～4.9mである。礎石は花崗岩自然石で、地山を浅く掘りくぼめて据え付けられる。柱間寸法は桁行3.3m（11尺）・梁行3m（10尺）である。東西回廊SC180の柱間寸法は桁行・梁行とともに3m（10尺）である。調査区西端の礎石の西側に石組施設SX175がある。回廊の内側は拳大の礎を敷きつめて舗装しているが、この石敷SX174と回廊上面とは殆ど同じ高さである。

遺物 SB150、SC170・180にともなうもので、種別が判明する建築部材は、連子窓（連子子・框）、地覆、柱、頭貫・大斗・卷斗・幕股などである。地点別では、SB150で柱・地覆、SC170・180基壇上で連子窓・柱、SD182で柱・頭貫・大斗・卷斗・幕股が出土した。建物の基壇上およびSD171で検出した物の多くは腐触が進行しているが、SD182でまとまって出土した物は比較的残りがよい。軒瓦は35点で、しかも8世紀前半以前ないし平安時代に属し、仏堂や回廊に伴うものではない。SB150建立以前の谷の自然堆積層から7世紀前半、SB150基壇土から7世紀後半の瓦が出土している。埴仏はSD176Bの埋土から1点出土した。方形三尊埴仏の右脇侍菩薩の首から下を残す破片である。墨書土器には、SD171から「中」（土師器皿底部外面）、SD176Bから「廣万口」（土師器杯皿底部外面）を記すものがある。三彩陶器はSD176BやSD171を埋め尽くした堆積層から出土した。SD171から儀鏡化した海獸葡萄鏡が1点、SB150基壇上の堆積土から金銅製蝶番が1点出土。このほか鉄釘がある。仏堂上の焼土層から木心乾漆仏断片多数が出土した。金箔が貼られているが、尊名は不明である。

まとめ 奈良時代の伽藍中枢の建物と考えられるSB150の規模・構造が確定し、SB150の造営年代についても、今回基壇版築土から7世紀後半の瓦が出土したので、7世紀前半まで遡ることは確定した。また、仏堂は立ち腐れで倒壊し、廃材の焼却が10世紀後半に行われたことがわかった。回廊の存在が判明し、位置・規模・構造についての手がかりが得られ、その建設がSB150より遅れることが判明した。しかも、回廊造営の上限年代は奈良時代前半である。

3. 石神遺跡第9次調査

遺構 第9次調査は第8次調査区の北に接する水田を対象とした。検出した主な遺構は、7世紀中頃から8世紀にわたり、大きくA期（7世紀中頃：齊明朝）、B期（7世紀後半：天武朝）、C期（7世紀末～8世紀初頭：藤原宮期）、D期（8世紀前半：奈良時代）にわけられる。

< A期 > 飛鳥寺・水落遺跡の北に東西大垣SA600ができ、石神遺跡の形成された時期である。従来、井戸SE800から発する石組溝と建物の変遷から3小間に細分している。

(A-1期) 調査区中央を走る南北石組溝SD1210は、最下段の石しか残っていない。内法20cm。南北石組溝SD1345は、内法1.5mで、側石は東は20～25cm大の1段分、西は10～20cm大の石が2～3段残っていた。SB1550は東側柱列5間分を検出した。南北塀SA1524は4間分を検出。これと逆L字状に接続する東西塀SA1525は2間である。SB1550の南側柱はSA1525とほほ揃う。

(A-2期) 井戸 SE800から発する南北石組溝 SD900は総延長120mをこえる。溝掘形の幅約2m、石組の内法幅65~85cmで、側石はほとんど最下段しか残っていない。SD900の東側約4.5mに南北棟建物 SB1485とSB1325とが東側柱筋を揃えて南北に並ぶ。SB1485は桁行9間・梁行3間で、東側柱から約60cm東側に、建物基壇縁石(SX1486)が一部残る。SB1325は第8次調査で2間分を検出し、今回の北側柱列の検出で、桁行4間・梁行2間の南北棟建物となった。石組溝 SD900の西約13.5mには、建物 SB1530とSB1540とが東側柱列をほぼ揃えて南北に並ぶ。両者とも3間×3間の総柱建物である。南北石組溝 SD1520は幅約30cmで、20cm大の側石が1段残る。底に小礫を敷く。SB1530・SB1540の東側柱列から約1.5mで、両建物の雨落溝と考えられる。

(A-3期) 南北石組溝 SD900は存続するが、他の建物はすべてこわされる。石組溝 SD900の東側には特異な平面形態のSB1480が建つ。全体の規模・形状は明らかではないが、現状では、2間×2間の空間が四方に突出した十字形の建物の可能性がある。建物内部には柱がない。柱間は2.5m等間で、建物の南北長は15mである。石組溝の西方には総柱建物を中心とした建物群がある。SD900の西約1.5mにSB1500とSB1510が西側柱列をほぼ揃え、南北に並ぶ。SB1500は3間×3間の総柱建物で、SB1510は梁行2間の南北棟建物である。これらの建物の西11.5~12.5mには総柱建物 SB1535・1545が南北に並ぶ。両者とも3間×3間と考えられる。

<B期> A期の造構がすべてこわされ、新たに整地して前代とは全く造構の配置が異なる時期である。SB1515は桁行12間以上・梁行3間の長大な南北棟建物である。この建物の東には布掘りの柱掘形をもつ南北棟建物 SB1505がある。桁行4間・梁行3間の総柱建物である。布掘りは東西方向に幅約1m、長さ5.7mの規模で、全体を一段掘り下げ、柱位置だけを約50cm深く掘る。北側柱・南側柱列はSB1515の柱位置とほぼ揃う。SB1505の東約3mには南北塀 SA1490がある。柱位置はSB1515の柱間のほぼ中央になる。調査区東端には南北塀 SA1475がある。

<C期> B期の造構がすべてこわされる。南北溝2条がある。SD1347はSD900の東の素掘溝で、南から続く南北道路の西側溝 SD640が第8次調査区で折れ曲がり、約14mほど西に流路を変えたものである。当初は幅約2.5mの素掘り溝で(SD1347A)、後に西岸に50cm大の石を雜



石神遺跡周辺調査位置図(1:8000)

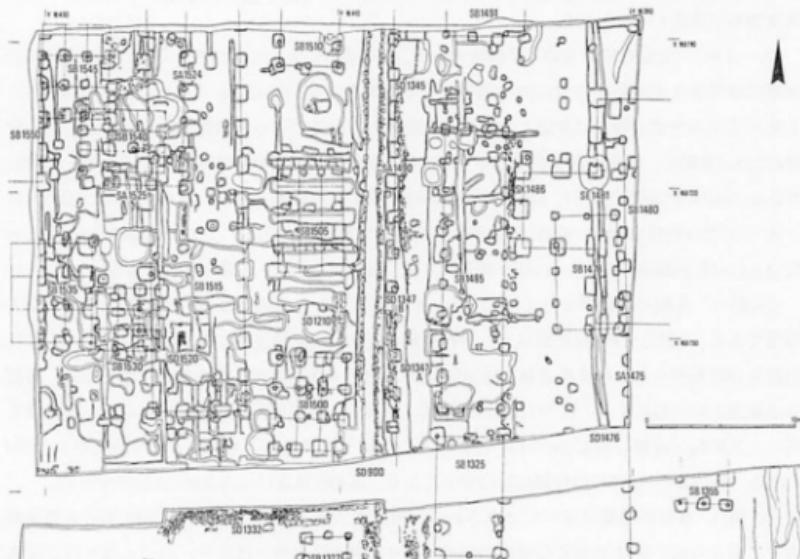
に並べて護岸する（SD1347B）。SD1476は幅0.7~1.2mの素掘溝で、西半が1段深くなる。

<D期> SB1478は桁行4間・梁行2間の南北棟建物である。SB1491は南側柱3間を検出した。井戸SE1481は、径約2mの円形掘形の中央南寄りに石組の井戸枠がある。石組は最下段が残るのみで、20~30cm大の石を内法一辺約70cmの方形に据えている。底面は小砾を敷く。

出土遺物 土器類は、7世紀後半から8世紀前半の土師器・須恵器が主である。土製品には、土馬・硯・フイゴ羽口などがある。墨書き土器にはSE1481から「上」(土師器皿口縁部外面)・「来田口司」(土師器甕体部外面)を記す2点がある。瓦の出土量はごくわずかである。金属製品では鉄製の釘・鐵・刀子・斧・紡錘車・カスガイなどがあるが、全体の量は少ない。木製品ではA-2期の整地以前の、木屑を多く含む砂質土中から斎串が出土した。

まとめ 前回の調査では、各時期の主要遺構がまとまりをみせた。特にA-3期では、長大な建物で形成する狹長な東区画と長廊状建物で囲む西区画の両者について、その北を画する建物を検出した。こうした状況から、今回の遺構のあり方が注目されたが、石神遺跡の北を限る施設は検出されず、各時期とともに遺構がさらに北に続くことが明らかとなった。

A期では、A-2期について、北方にまとまった建物群があることが明らかとなった。第8次調査で検出した東西棟SB1320と逆L字状に2棟の南北棟建物が東側柱列を揃えて建ち、西南には東西棟SB1340がある。西北方には倉庫と思われる総柱建物2棟が南北に東側柱列を揃えて並ぶ。A-3期では東区画の北方に約30mの間をおいて、特異な平面形の建物の存在が明らかとなる。



石神遺跡第9次調査遺構配置図（1:400）

り、特殊な建物配置をもつ空間がさらに北へのびていることが想定される。一方、西区画の北方には総柱建物を中心とした建物が並んでおり、東西両区画の倉庫群がこの位置にあったことが判った。B期は南北塀と南北棟建物を検出し、これまでと同様の状況がさらに北に続くこととなった。ただ、今回検出した南北棟建物は桁行12間以上という大型建物であり、この時期の中心的な建物の一つと思われる。C期の遺構は、前回調査区から希薄となってきており、南北溝の他には遺構は検出できなかった。今回の調査で、新たに奈良時代初期の遺構を検出した。石組の井戸SE1481とその周辺に小規模な建物がある。井戸からは墨書き土器も出土しており、奈良時代の遺構がこのあたりから北方に存在することをうかがわせる。

4. 山田道第3次調査

1988年度から始まった県道「樅原神宮東口停車場飛鳥線」の拡幅工事に伴う事前調査で、今回は7世紀代を中心とする遺構群の広がりと「山田道」関連遺構の解明を目的として実施した。第3次調査は第2次調査区の西延長66.5m分について行ったが、他に第1次調査区の東で小面積の調査も行った。検出した主な遺構は古墳時代・7世紀・7世紀末~8世紀のものである。古墳時代の遺構 調査区西部にある南北溝SD2634は北々西に流れる溝で、出土遺物から5世紀後半のものである。

7世紀代の遺構 第2次調査で明らかになったように、調査地は西に緩く傾斜し、雷丘との間が谷状地形となっており、これを7世紀前半から中頃にかけて埋めたてている。今回、この整地土の西端を検出し(SX2630)、東西幅が110mに達することがわかった。西端部はほぼ方眼方位にそって直に立ち上がっており、落込みにそって堆積した黒褐色土から6世紀末に位置づけられる「飛鳥寺下層」式の土器類が出土した。この整地と一連の工程で作られた東西方向の石



石神遺跡主要遺構変遷図（1：3000）

詰暗渠 SX2601は第2次調査区からのびて総長約80mとなり、南北暗渠 SX2622に接続する。SX2601は幅0.8~1m、東でわずかに北に振れる。石積は粗雑で、さまざまな大きさの石を一定幅に積み上げただけである。SX2622と第2次調査区の南北石組暗渠 SX2600とは、SX2601が受けた水を北へ排出するものであろう。掘立柱建物 SB2631は東西4間（柱間2.4m）・南北2間以上（柱間2.1m）で、7世紀後半に位置づけられる。

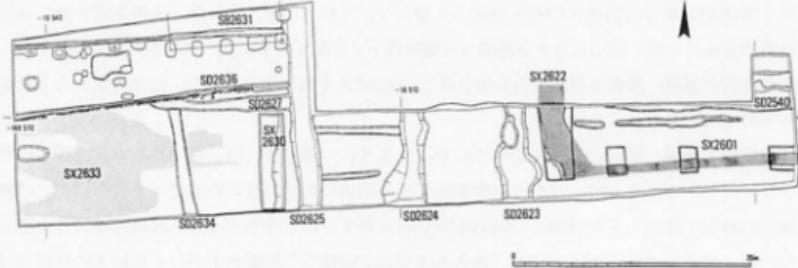
7世紀末～8世紀の遺構 3条の南北溝 SD2623・2624・2625が等間隔で並ぶ。いずれも土掘りの浅いU字溝で、北流する。堆積土は粗砂で多量の土器類の他、SD2623から木簡が4点、SD2624・SD2625から金銅製鈴・鉄製鎖状金具・黒漆塗帯金具、および隸書の和同開珎が出土した。東西溝 SD2540は第2次調査区から続く東西道路 SF2607の北側溝とも考えられるもので、SD2625と合流する。石敷 SX2633は調査区の西部南半に広がる礫層で、人工的に敷いた可能性が強い。北端は中世の溝 SD2636で切られているが、東西溝 SD2627を北側溝とする路面敷きの可能性もあり、東のSF2607に対応するかもしれない。

まとめ 3次にわたる調査により、この地域の利用状況の一旦を窺うことができた。東半部の微高地は弥生時代から古墳時代にかけて継続的な土地利用が想定できる。

古代においては、第2次調査東区西部から第3次調査区の東3分の2にわたる、東西幅110mに達する沼状地形の存在が明らかになった。この沼状地形は、塊石を詰めた暗渠を伴う大規模な整地によって埋め立てられており、さらに北方へ広がっていると思われる。整地土は現状でも厚さ0.6mあって、しかも北へゆくほど厚くなるので、きわめて大規模な土木工事であったと思われる。飛鳥盆地北部の大官大寺周辺の黄褐色の山土を含むもう一つ別の整地土の広がりが確認されており、7世紀前半における飛鳥地域の大開発を物語るものである。

第3次調査区の西方一体に「雷丘東方遺跡」が広がる。「小治田宮」墨書き土器の出土によって奈良時代の小治田宮がこの地域に存在した可能性が強まつたが、第3次調査区西部から11点の奈良時代軒瓦とそれに伴う丸・平瓦がかなりの量出土したことによって、その蓋然性はますます高まつた。特に難波宮と同范の軒瓦の出土が注目され、今後行う周辺の調査にますます期待がかかるのである。

(安田龍太郎・深沢芳樹)



山田道第3次調査遺構配置図（1:500）

藤原宮跡・藤原京跡の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

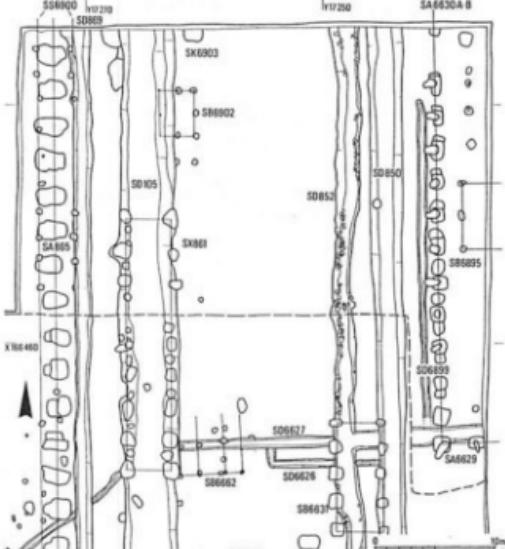
1990年度、飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、藤原宮跡については内裏東外郭・東方官衙地区、西方官衙地区を中心に6件、藤原京跡では右京一条一坊・二坊、右京七条一坊、左京四条三坊、本薬師寺などで12件の調査を実施した（17頁参照）。以下、主要な調査の概要を報告する。

1. 藤原宮跡の調査

内裏東外郭・東方官衙地区の調査（第61次）

この調査は藤原宮の大極殿院・内裏の東外郭と、東方官衙地区の様相を明らかにするため、第58次調査に引き続いて行ったものである。検出遺構は弥生時代から中世にいたるが、藤原宮期と平安時代が主なものである。

藤原宮期の遺構　調査区の西端の南北堀 SA865は大極殿院・内裏の外郭の東を限る堀である。このSA865の東西両側には、3m間隔で対応する2条の柱列がある。外郭堀 SA865に伴う足場穴とみることができる。柱間寸法は約2.25mで、柱掘形は一辺約0.4mである。SA865の東約3mの溝 SD869は、堀 SA865の雨落溝の可能性もある。南北溝 SD105は最大幅5m・深さ0.7m、藤原宮東半地域の基幹排水路。橋脚状遺構 SX861は SD105の南半の両岸にある柱穴で、規模からみても橋とは考え難い。SD850は南北溝で、東方官衙地区の西を限る溝である。SD105と同様に最上層は埋め立てられている。西側のSD105との間は約17mの宮内道路と考えられる。調査区の東端の南北堀 SA6630Bは南北に3個並ぶ官衙ブロックのうちの中央の区画の西を限る堀である。柱間寸法は約2.75m等間で、北端では柱間が1つとんで広くなる。柱掘形は一辺1mをこえる。中央の官衙ブロックが東西66m・南北72mの規模であることは第58次調査などで確認されていたが、柱間の広くなつた場所はSA6630Bの南北のはば真中にあたつており官衙の西の出入口の可能性が高い。堀の西1.2mにある幅0.8mの南北溝 SD6899はこの堀の西側の雨落溝と



第61次調査遺構配置図（1：500）

考えられる。また、南北塀 SA6630A は SA6630B と重複し、先行する塀で、柱痕跡がない。SA6630A は柱掘形は掘ったものの、計画変更により、柱を建てる前に埋め戻されたものか。建物 SB6895 は SA6630 の東 2 m にある梁行 2 間の東西棟で、今回その西妻柱筋を検出しただけであるが、SA6630B と柱筋を揃えるため、官衙ブロック内の建物と考えられる。

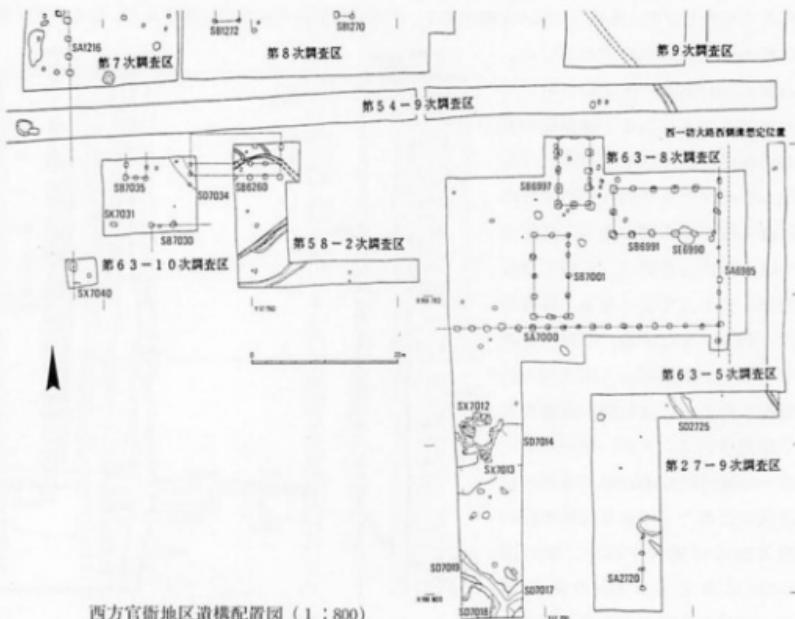
平安時代の遺構 溝 SD852 は幅約 2 m・深さ 0.5 m の南北溝で、その両岸は人頭大の自然石で粗く護岸している。SD105 の東岸の南北棟建物 SB6902 は 2 間 × 2 間の小規模な建物である。

遺物 瓦・土器・木器・木簡・金属製品・石製品があるが少量である。土製品には圓面鏡・土馬がある。金属製品には金銅製の鎧がある。木簡は溝 SD105 から 24 点、SD850 から 32 点出土。

まとめ 今回の調査の結果、内裏東外郭の東で南北に 3 個並ぶ官衙ブロックのうち、中央ブロックでは西を限る塀には立て替え、もしくは計画変更があることが重複関係から確認することができた。この塀の南北のほぼ中央には、柱間が広く、出入口と想定できる場所が確認できたことも大きな成果とすることができるよう。

西方官衙地区（第63-2・5・8・10次）

第63-5・8・10次調査 鴨公小学校の南に接した地域の調査である。東西塀 SA7000 は、第 5 ~ 7 次調査で検出した宮内先行条坊に伴う東西塀 SA1215 と、59 m (200 尺) を隔てる。これに接続する南北塀 SA6985 は SA1215 の西端に接続する南北塀 SA1216 と 97.5 m (330 尺) を隔て、今



回検出した10間分の内、北6間の柱間2.25m(7.5尺)は、SA1215のそれと同じである。SA6985とSA7000は、SA1215・1216と一連の遺構であり、藤原宮直前の先行条坊と関連した区画施設と推測できる。SA6985の東約2mには、先行条坊の西一坊大路西側溝の存在が推定されるから、この区画は北を先行条坊五条条間路、東を西一坊大路に接した、東西330尺×南北200尺の区画に復元できる。この時期の他の遺構としては、区画内に東西棟建物SB6260、南北棟建物SB6997・SB7035、井戸SE6990がある。

藤原宮西方官衙の遺構にはSB6991、SB7001、SB7030がある。東西棟建物SB6991と南北棟建物SB7001は、柱筋を描え、両者の間隔が20尺という完数で割り付けられている。これらの建物はSB7030が柱間10尺とする以外は小規模なものであり、西方官衙地区には長大な建物のほかにこのような小規模建物も付随していたことが明らかにできた。

弥生時代の遺構は、四分遺跡の一部をなすものと推定されるが、溝SD7017~7019は、この遺跡の集落地区の北限を画す環濠の可能性がある。

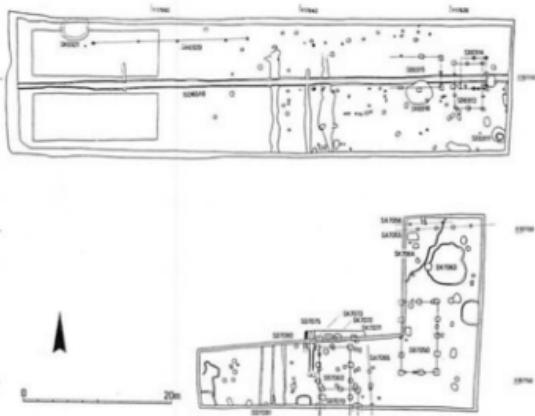
第63-2次調査 調査地は藤原宮の西北部にあたるが、藤原宮期の遺構は削平されており検出されなかった。一方、14世紀の溝SD6880が、60m西北の第27-6次調査で検出した14世紀後半の溝や通路と共に、一つの集落を構成する可能性があり注目される。中世集落の環濠は淨御原宮推定地(概報11)・第41-15(概報16)・47(概報17)・60-8次調査(概報20)でも検出しておらず、廃都後の土地利用の重要な資料である。

2. 藤原京跡の調査

右京七条一坊(第63・63-4・6・12次)

第63・63-12次調査 七条一坊西北坪にあたる。第63次調査は第62次調査地の西北で行い、六条大路南側溝の可能性があるとされた東西溝SD6510の西延長部を確認するのが主な目的である。

東西溝SD6510は、幅約1m・深さ約0.3mで、第62次調査区から総延長120mを検出した。溝は六条大路南側溝の想定位置の約5m南に位置し、また、振れは西で南へ約1°という調査地周辺の条坊の振れと比較すると大きい数値を示す。それらの点から六条大路の南側溝とするには若干の疑問がある。なお、この溝をは



第63-63-12次調査遺構配置図(1:800)

さんで小規模建物3棟(SB6913・6914・6915)、その東南に井戸1基(SE6911)がある。

第63-12次調査は第63次調査区の南、第62次調査区の西で行い、藤原宮期前後の小規模な南北棟建物(SB7050・7060・7070)、溝(SD7080・7081)や土坑(SK7071・7072・7073等)などを検出した。南北溝SD7080は第62・63次で検出した東西溝SD6510より新しい溝で、この西には藤原宮期の遺構はない。この溝は坪内を東西に3ないし4つに区分する溝の一つであって、西一坊大路に面した区画は空閑地であったと考えられる。また、建物周辺の土坑群から出土した多量の木簡の削り屑には歴名が多くみられ、この坪が通常の宅地でない可能性を示唆する。

西北坪は、六条大路に近い部分及び西一坊大路に接する部分を除いては、溝や堀で3ないし4つに区切られ、その中は小規模な建物や土坑・井戸などで構成される。これは大規模な建物を坪の中央部に整然と配置した西南坪が一坪全体を占める邸宅と考えられているのとは異なる利用形態である。宮に直接接する地域での土地利用の一つのあり方を示すものかも知れない。宮に接する地域の東辺と西辺では大規模な宅地の存在が知られるが、北辺は空閑地に近い状況であり、南辺も同様の状況なのであろうか。坪中央部が未調査であり、その利用形態やその性格については、なお不明な点も多い。今後の調査の進展を待つ。

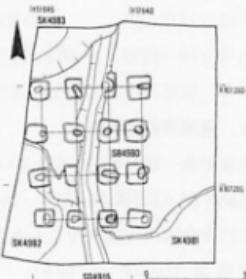
第63-4・6次調査 右京七条一坊西南坪にある。この坪では、第19(概報7)・49(概報17)次調査の結果、坪内全体を占める大規模な邸宅遺構の存在が明らかとなっている。

第63-4次調査地は邸宅内を内部・外郭に区画する南北塙SA1997の東側で、幅3m以上の南北大溝SD6890を検出し、藤原宮期および若干遡る土器が出土した。この溝は、これまでの北方の調査区では検出しておらず、今後の調査が必要である。

第63-6次調査地は、第19次調査区の西南、第49次調査区の西北に接し、後殿SB4930の西側にあたる。3間×3間の南北棟総柱建物SB4980を検出した。柱間寸法は南北約2.2m・東西約1.7m等間である。柱掘形は一辺1mの方形で、西側柱北第2柱穴には径約30cmの柱根が、人頭大の礎盤の石上に残る。他の柱穴にも同様な石が確認できた。SB4980は、後殿SB4930の西約12.5m、西脇殿SB4920の北約8mの位置にあり、SB4930とSB4920に柱筋を揃えており、後殿の脇殿風に倉庫が建てられたものと考えられる。

右京一条一坊・二坊(第64次・65次)

第64次調査 檜原市醍醐町における土地区画整理



第63-6次調査遺構図(1:300)



右京七条一坊西南坪遺構配置図

事業に伴う事前調査である。調査地は右京一条二坊で、西南・東北坪の大半と、西北・東南坪の一部に及ぶ。このため、条坊道路と坪内の状況把握のため10ヶ所の調査区を設定した。

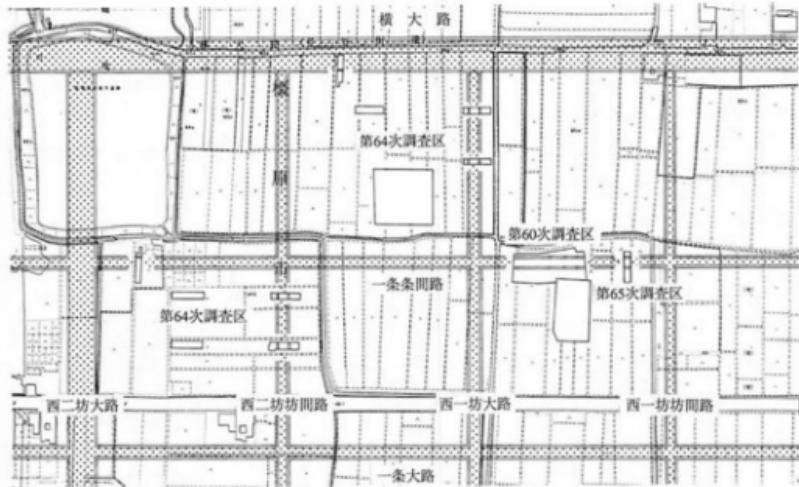
条坊遺構 横大路・西一坊大路・西一坊坊間路・一条条間路を検出した。横大路は南側溝幅1.1m、深さ0.35mである。西一坊大路は路面幅6.5m、両側溝の幅は0.9mである。一条条間路は幅1mの北側溝を検出した。西二坊坊間路は両側溝を検出し、路面幅6m、東側溝は幅1.5m、西側溝は幅0.5~1.1mである。

坪内の遺構 西南・西北・東南坪では、井戸・土坑を検出し、東北坪の南半中央部では、小規模な掘立柱建物27棟・塀3条・井戸2基・土坑を検出した。建物は3時期以上あり、藤原京の北辺地域でも小規模な建物が藤原宮期前後にわたって建てかえられていることがわかった。

第65次調査 店舗建設に伴う事前調査で、右京一条一坊西南坪にあたる。調査は第60次調査区の東方約30mに



第64次調査遺構配置図（1：600）



第64・65次調査位置図（1：4000）

東区、東南に接して西区を設定した。第60次調査では一条条間路を50mにわたって検出してお
り、今回の西区でも両側溝を検出した。路面幅5.3m、北側溝幅1.6m、南側溝幅1.3m、深さは
いずれも約0.3mである。東区では建物5棟・東西塀1条・井戸3基・土坑などを検出した。建
物は4間×2間が最も大きく、いずれも小規模なものである。建物の数が多く、小規模であるが井戸は3基あり、いずれも改修が認められ、奈良時代前半（平城宮土器Ⅱ）までの土器が
出土している。宅地班給面積との関連も考えられる資料である。

左京四条三坊（第63—7次）調査地は東北・西北の坪にまたがっており、三坊坊間路とその東西の宅地利用状況を明らかにすることを主たる調査目的とした。藤原宮期の遺構は重複関係によってA期、B期に分けることができる。

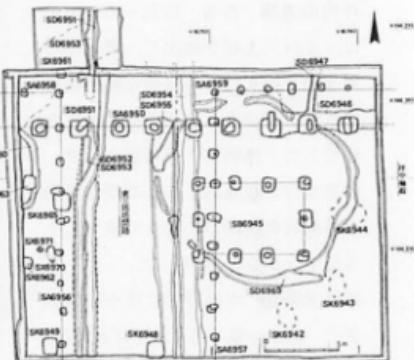
A期 東三坊坊間路 SF4300と、掘立柱塀 SA6956・6957・6958・6959がある。坊間路の側溝は何度か掘り直されており、西側溝が3本、東側溝が2本ある。SA6956とSD6951、SA6957とSD6954の心心距離がそれぞれ等しく、これらの南北塀と溝が組み合うようである。東三坊坊間路の路面幅は約5.6~5.8m、側溝間の心心距離は約7.0~7.1m。東西塀 SA6958・SA6959は柱であろう。

B期 A期の坊間路および区画塀を廃して、東北・西北の坪の両方をひとつにした宅地割へと変化した。SA6950は柱間2.6mの東西塀で南北二等分線近くに位置する。SB6945は3間×2間の東西棟で、柱間は桁行・梁行とも約2.4m等間である。

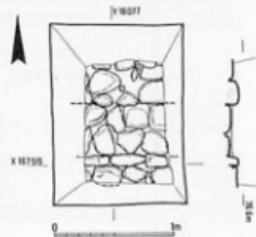
今回の調査では、特に A 期の 1 坪を田の字形に四等分する従来の土地利用から、B 期の東西 2 坪にまたがる宅地利用へと変化するという 1 例を得た。

本薦師寺（1990—1次）

調査地は、金堂跡基壇上に建つ庫裏北側、基壇の北辺中央付近である。小面積の調査ながら、基壇周囲の玉石組雨落溝と石敷を検出した。東西方向の雨落溝は人頭大の石を両側に立て並べ、底にも同様の石を敷く。内法で幅0.5m、深さは約0.1m、石敷と溝の底石の比高差は約5cmである。溝の中には瓦を含む砂層が薄く堆積していた。石敷はこの溝の北と南に広がるものであり、やはり人頭大の石を敷き並べ、隙間に小さな石をはめ込む。出土遺物には創建～奈良時代末の軒瓦13点、駁斗瓦3点、鬼瓦1点があり、



第63-7次調査構造配置図(1:400)

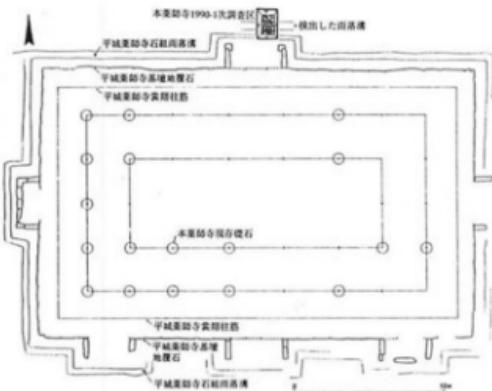


本薬師寺調査遺構図（1：50）

金堂裏階に葺いたと考えられる小型軒瓦もある。奈良時代の軒瓦は平城薬師寺・平城宮と同范品であるため、奈良時代も依然官寺として維持管理されていた可能性もある。

今回検出した雨落溝は階段の北を巡る位置と思われるが、平城薬師寺と比較すると北肩で約1m北、つまり外側にある。さらに、平城薬師寺では、雨落溝の幅が基壇周囲では約0.5mあるのに対し階段位置では約0.3mと狭くなるが、今回検出したものは約0.5mと広い。など違いもある。このように、本薬師寺金堂は平城薬師寺と同じく基壇周囲に石敷と石組の雨落溝が巡っていることが明らかとなったが、その雨落溝の位置は平城薬師寺のそれよりさらに外側に位置して今後に検討課題を残すこととなった。

(安田龍太郎・深沢芳樹)



本薬師寺1990-1次調査位置図(1:400)

調査地区	遺跡・調査次数	調査期間	面積	備考
6AJF-C・D	藤原宮 61次	90.4.25~90.8.29	1100m ²	宮内裏東外郭・東方官衙
6AJH-R	藤原京 63次	90.3.27~90.5.16	1270m ²	右京七条一坊西北坪
6AJQ-A・B	藤原京 64次	90.11.27~91.4.4	2600m ²	右京一条二坊
6AJS-S・T・U	藤原京 65次	91.2.12~91.3.28	1126m ²	右京一条一坊西南坪
6AJP-P・Q	藤原京 63~1次	90.4.3~90.4.9	60m ²	二条大路
6AJJ-B	藤原宮 63~2次	90.4.9~90.4.11	36m ²	宮西方官衙
6AJF-Q	藤原宮 63~3次	90.4.23~90.5.31	547m ²	右京九条三坊東南坪・二条大路
6AJQ-E	藤原京 63~4次	90.5.21	12m ²	右京七条一坊西南坪
6AJH-U	藤原宮 63~5次	90.5.21~90.5.24	152m ²	宮西方官衙
6AJG-R・S・T	藤原宮 63~6次	90.7.13~90.7.25	120m ²	右京七条一坊西南坪
6AWH-P	藤原京 63~7次	90.7.13~90.9.1	500m ²	左京四条三坊東北・西北坪, 東三坊間路
6AJB-J	藤原京 63~8次	90.8.10~90.10.22	1262m ²	宮西方官衙
6AJP-M	藤原京 63~9次	90.11.26~90.11.29	48m ²	二条三条間路
6AJG-R	藤原宮 63~10次	90.12.11~90.12.21	146m ²	宮西方官衙
6AJJ-B	藤原宮 63~11次	91.1.10~91.1.16	82m ²	宮西北隅
6AJH-S	藤原京 63~12次	90.12.25~91.2.22	580m ²	右京七条一坊西北坪
6AJB-B	藤原京 63~13次	91.3.18~91.4.3	135m ²	左京四条四坊東北坪
6AMC-N	山田道 第3次	90.10.1~90.11.27	820m ²	山田道推定地
6AMH-F	山田道周辺	1990-1次	7m ²	山田道推定地
6AMD-H	石神遺跡 第9次	90.4.12~90.4.13	1200m ²	飛鳥淨御原推定地
6AMD-R	石神遺跡 第9次	90.7.16~91.4.8	60m ²	飛鳥淨御原推定地
6AMD-T	石神遺跡 1990-1次	91.1.28~91.2.15	275m ²	仏堂・回廊
5BST-A	板田寺第6次	90.5.28~90.8.9	3m ²	金堂北辺
6BMY-C	本薬師寺 1990-1次	90.8.8~90.8.9	800m ²	回廊東北隅・宝藏・西門
5BYD-L	山田寺第8次	90.8.27~90.12.19		

1990年度 飛鳥藤原宮跡発掘調査部調査地一覧

山田寺跡出土の木簡

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

山田寺跡ではこれまで第4・7次調査において木簡が出土したが、第4次調査の木簡は断片的で点数も2点にすぎず、また第7次調査のものは点数が49点と多いが、全て山田寺造営以前の時期に属し、いずれも古代における山田寺の内部の様子を伝えてくれる内容をもつ木簡ではなかった。これに対して今回第8次調査で出土した木簡は、いずれも奈良時代中頃から平安時代初め頃のもので、しかもそこに書かれた内容から当時における山田寺の内部状況がある程度明らかになるものと注目される。

木簡は、回廊東北隅の東で新たに検出した宝蔵の基壇面および宝蔵の西南落溝から、合計8点が出土した。そのうち主なものの訣文を次頁に掲げ、これらの木簡から知られる古代の山田寺の状況について概略を述べる。

1. 奈良時代中頃における山田寺の三綱の僧名が判明した(1・3)。その上奈良時代から平安時代初め頃に山田寺にいた多くの僧の存在も確認された(1・2・3)。

2. 経典の出納に規定されるが、山田寺の組織・機構の一部が判明した(2)。経典の収納されていた「倉」には倉人なる僧人が置かれ、僧とともに經典の出納に関与し、その実務に当たっていたと推定される。また貸出中の經典の検定には寺の三綱が直接関わっていたと見られ(1・3)。これらの經典を納めていた「倉」(今回検出した宝蔵が「倉」に相当する可能性も高い)が三綱の手によって封ぜられる、いわゆる綱封の倉であった可能性を示唆している。さらに彼らのほかに目代あるいは□^(主目)などの職も見え、山田寺の經典管理の組織が整然とし、予想以上に大きな規模のもので、しかも僧俗複数の人々がその運営に関わっていたことも推定されるに至った(2)。

3. 正倉院には經典出納のために用いた代本板の役割を果たしたと推定される木簡が伝存している。しかしそれは1回限りの經典の出納に関わるものであった。それに対して、今回出土した木簡のうち所謂横材の木簡(1・3)の中には、複数の年紀が書かれ、多くの削り跡と削り残しが存在する。そこに書かれた文字には異筆・追筆と思われる複数の筆跡がみられることから、これらの木簡は複数回、しかもある程度時間を隔てて使用されたものであったことが判る。また木簡の再利用と伝存を考える上でも重要な史料である。

4. 木簡に書かれた經典名によって山田寺における僧たちの教学の様子の一端が判明した(1・2・3)。奈良時代や平安時代初期の寺院における教学の具体相を示す史料には正倉院文書があるが、山田寺の場合貸出された經典や検定された經典から法相宗の經典が多く借り出されていることが判明する。周知のように奈良時代を通じて大きな勢力を有し、互いに競い・対立しあったのは法相宗と三論宗であった。山田寺もそのような時の大勢の中にあって、法相宗が優勢な寺院であったことを示唆している。

(橋本義則)

(1)



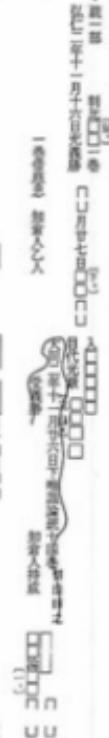
(107) × (135) × 3 081

(4)



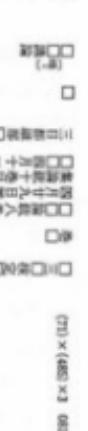
四月廿二日午前一時半□
□四〇□ (221) × 45 × 9 019

(5)



(60) × 35 × 2 019

(3)



(33) × 35 × 2 019

(5) 雜物(三) 019



□1600#

発掘現場における出土石材の応急保存処理

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

発掘調査により出土する礎石等の石材は、風化が進み劣化しているものが少なくない。飛鳥地方では、石材として花崗閃緑岩や石英閃緑岩が大量に使用されている。これらの岩石は風化が進むにつれて雲母類、長石類が変質して結晶間の結合力が低下して、塊片状に崩壊して形状の維持ができなくなる。このため出土直後においては早急な応急処理が必要となる。

当研究所ではこれまで岩石造構の露出保存のための保存材料や含浸工法について研究を進め、実用化した。しかし、この方法は現場での設備が必要となり応急的処理に適したものではない。今回は発掘中の現場において、応急処理を実施するための保存材料と処理方法について検討し、実際の処理を実施した。応急処理の条件は、①処理対象物に多少の水分が含有していても保存薬剤が使用でき、かつ浸透性が優れること。②処理前後における色調の変化が少なく、写真撮影の妨害にならないこと。③時間的制約を伴う現場作業では大がかりな装置を使用せず軽装備で処理可能であること。④薬剤の耐候性が優れること、特に凍結-融解による損傷がないことなどである。従来から、保存薬剤としてアルキルシリケート系およびイソシアネート系材料等が使用されてきた。しかし、従来の製品では水分を含む岩石に使用した場合、薬剤の浸透が悪く、表面硬化のみに終わってしまい、応急処理としての効果は充分なものではなかった。今回数社の製品をテストした結果、ワッカー社の製品【WSS-OH】（アルキルシリケートを主成分とし、混合溶剤の少なくとも1成分は親水性であり、触媒は予め混合している）は数%の含水比をもつ岩石でも充分浸透する。出土する花崗閃緑岩の場合、風化層はせいぜい1~3cm程度であり、含水比が5%程度では充分な効果が得られた。含浸方法としては、発掘作業中の造構を損傷させないように、連続スプレー法を採択した。この連続スプレー法は、3回処理を1サイクルとして、1日間隔で3サイクルの処理を実施する。強度が要求される場合、薬剤が硬化後、さらに処理を繰り返す必要がある。含浸効果を調べるため凍結-融解による劣化促進テストを実施したが、岩石が崩壊することはなかった。また、3サイクル処理後における全岩石中に占める固形分(SiO_2)增加量を測定した（下表参照）。花崗岩類は凝灰岩のように空隙をつくらず、結晶粒の間隙に薬剤が含浸するのみで固形分の増加量は小さいが、粒子間の接着効果は大きい。凝灰岩のように空隙率が10%におよぶ岩石の場合、3サイクルの含浸処理で深度約5cm程度は浸透することも判明した。

(肥塚隆保)

岩石の種類	最大含水比	処理後 SiO_2 増加率 (Wt%)
花崗閃緑岩	0.4~2.0%	0.2~0.9% (新鮮な部分も含む)
硬砂岩	0.9~3.0%	0.4~1.0% (鮮な部分も含む)
凝灰角巖岩	22.0~25.0%	14.0% (全体がやや劣化)
溶結凝灰岩	9.0%	6.0% (全体がやや劣化)

飛鳥藤原宮跡発掘調査部の保存科学処理施設・設備

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

遺構・遺物の保存処理および保存科学的研究のための実験・処理棟が完成し、設備を設置したので、その概要を紹介する。

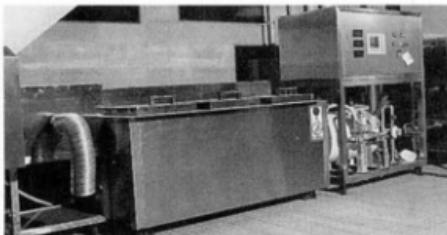
実験・処理棟は1階と2階から成り、それぞれ220m²と73m²である。このうち1階は保存処理室(147m²)と処理に関する実験室(73m²)で、2階は材質調査に関する実験室である。各実験室は、温湿度条件を整えるためパッケージ形ヒートポンプエアコンを単独設置した。また、1階保存処理室には大型遺物を搬入するため、東側に開口部4.4m、高さ3.7mの電動シャッターを2基と2tクレーン(X-Y移動型)を設置した。

飛鳥藤原宮跡の発掘調査で出土した遺物のなかには、有機質遺物(木材など)が多数あり、これらは水漬け状態のままで劣化が進むため、早急な処理を要する。このため、有機質遺物処理設備としてPEG含浸処理装置3基(5m長1基、3m長2基)と高級アルコール含浸処理装置、シリコーン樹脂含浸処理装置を設置した。このなかで高級アルコールおよびシリコーン樹脂含浸処理装置は、複合材遺物(金属と木材など無機材と有機材が使用されているもの)や布などの繊維製品、小形の木製品などの処理のため新しく開発した多機能型含浸処理装置で、処理期間の短縮化と処理後の安定性を目的としたものである。

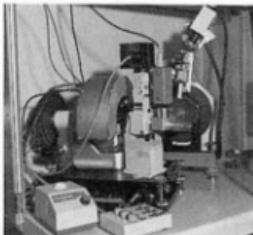
また、無機質遺物のなかでも金属製遺物は自然状態では劣化が促進するため、樹脂処理等が必要である。このための設備として、樹脂処理のための減圧含浸装置、鋸等のクリーニングのため精密噴射加工器・超音波研磨装置・超音波洗浄器・グライダーを、乾燥処理のために熱風循環式乾燥器を設置した。

飛鳥地域は石造物、石組の遺構が多く、発掘調査中に応急の保存処理が必要である。このため遺構保存処理の基礎的研究用として、劣化判定のため赤外線画像解析装置(サーモグラフィー)などを導入した。

出土遺物の材質・構造調査のため、X線回析装置、ED蛍光X線分布測定装置、万能顕微鏡、偏光顕微鏡、X線透過撮影装置などの測定装置の導入をおこなった。(肥塚隆保)



高级アルコール含浸処理装置



微小点X線回析装置

平城宮跡・平城京跡の発掘調査

平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部が、1990年度に実施した発掘調査は、平城宮跡内では、兵部省、壬生門北方、式部省、第一次大極殿地区、宮北面大垣、東院地区東辺の6件、平城京城では、17件であった。以下、主要な調査の概要を報告する。

1. 平城宮跡の調査

兵部省の調査（第205次、第214次）

兵部省については、これまで第167・175・206次の3次にわたる調査が行われ、全体の構造・変遷が明らかになってきている。第205次調査は、兵部省西第二堂を中心とする兵部省南西部から基幹排水路SD3715にわたる地域を調査し、第214次調査は、兵部省の南北規模確定を目的として、その北東隅から北側を調査した。

第205次調査 調査区内には奈良時代の整地層が、概ね三層認められる。第一次整地は兵部省区画内の旧低湿地を埋める整地、第二次整地はほぼ調査区全域に及ぶ整地、第三次整地は兵部省区画内の改作に伴う整地である。なお、第一次整地と第二次整地が一連のものか否かについては、今回の調査では明確にできなかった。検出した遺構は、兵部省建設以前と兵部省の時期に大きく分けられる。

奈良時代前期（兵部省建設以前） 南面大垣に先行する掘立柱東西塀 SA1765とその北・南雨落溝 SD13940・13945、南面大垣に先行し SA1765より新しい南北廊 SC11700とその東雨落溝 SD13985、そして南北溝 SD12998・13900などがある。SA1765は第16・122・157・167・206次調査により、朱雀門の東から壬生門の西まで続くことが明らかになっている塀で、今回は兵部省区域外で、第二次整地土下の古墳時代の遺物包含層上面で7間分検出した。南面大垣の北約

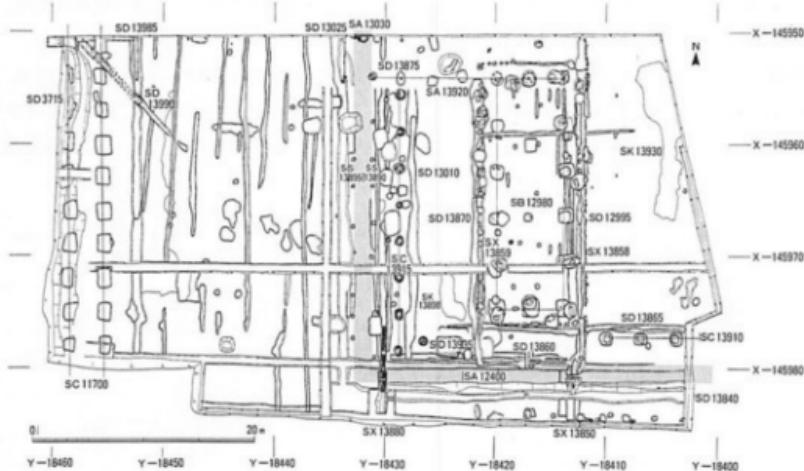


1990年度平城宮内発掘調査位置図

16mにあり、柱間は9.5~10尺。SC11700は、第157次調査でその西側柱を検出し南北塀 SA11700としていたが、今回その東10尺の位置に東側柱を新たに検出し、廊であることが判明した。桁行柱間は10尺等間。SD12998・13900は、それぞれ後の兵部省西第二堂の西・東側柱筋にほぼ相当する位置にあり、兵部省の区画を越えて南流する。第一次整地層の上面から掘り込んでいる。このほか、建物としてまとまらないが、10尺の間隔で南北に並ぶ柱穴 SX13937を第一次整地層上面で検出した。

奈良時代後期（兵部省の時期）前・後期に分け

られる。前期の遺構には、兵部省南・西面築地 SA12400・13030とそれに伴う雨落溝 SD13840・13855・13860・13875・13025、兵部省西第二堂 SB12980とその雨落溝 SD12995・13870、掘立柱東西塀 SA13920、暗渠 SX13850・13880がある。後期は、兵部省の基本的な建物の構成に変化はないが、南面・西面築地に片廊廊 SC13910・13915を付け加え、築地雨落溝を SD13865・13010などに付け替える。SA12400は残存基底幅が2.4m、堰板抜取痕跡から築地本体の幅は1.5mに復原できる。後に SC13910が付設される。SC13910は、兵部省南門以西に設けられる片廊廊。当初の雨落溝 SD13855を第三次整地で埋めて基壇を造成し、礎石を据える。第206次調査の所見からみて、柱間は4間と考えられる。柱間寸法は10尺等間、築地心からの出は3.2m。SD13855はSA12400の北雨落溝で、後に SC13910付設に伴い埋め立てられ（第三次整地）、SD13865に付け替えられる。SA13030は、東・西に添柱列 SS13890・13895が並び、築地本体の幅は1.5mである。後に SC13915が付設される。SC13915は西門以南に設けられる片廊廊。当初の雨落溝 SD13875を第三次整地で埋めて基壇を造成し、礎石を据える。7間あり、柱間は11尺等間、築地心からの出も11尺である。SB12980は南北棟礎石建物で、周囲に溝が巡る。東第二堂と同規模で、桁行5間、梁間2間、柱間寸法は桁行が14尺等間、梁間が10尺等間。基壇の規模は、南北23.1m、東西9mで、高さ50~80cm程度の玉石積み基壇である。軒の出は、東・西が1.5m、南・北が1.2m。なお、礎石据付掘形のひとつから、平城宮式鬼瓦ⅡA₂が出土した。第二堂東雨落溝 SD12995は西第一堂東雨落溝から連続し、暗渠 SX13850へと流れる幅50cmの石組溝。SX13850は、下層南北溝 SD13900の流路をそのまま利用している。木樁の痕跡を残す。SA13920は、西第二堂北妻と西面築地を結ぶ掘立柱東西塀で、東第二堂のそれと左右対称の位置関係にある。4間分



第205次調査遺構図（兵部省）

確認し、柱間寸法は2.55~3m。

出土した軒瓦の傾向を見ると、6282G-6721Fと6225C-6663Cのセットが多く、これまでの調査で確認された傾向とはほぼ一致している。

まとめ 今回の調査では、南面大垣に先行するSA1765など、平城宮造営当初に遡る下層の遺構を確認したが、上層の兵部省西第二堂に対応するような明確な下層遺構は確認できず、奈良時代前半の兵部省がこの地になかった可能性が高い。また、兵部省西側のSD3715までの地域は、奈良時代を通じて役所の区画としては利用されていない。

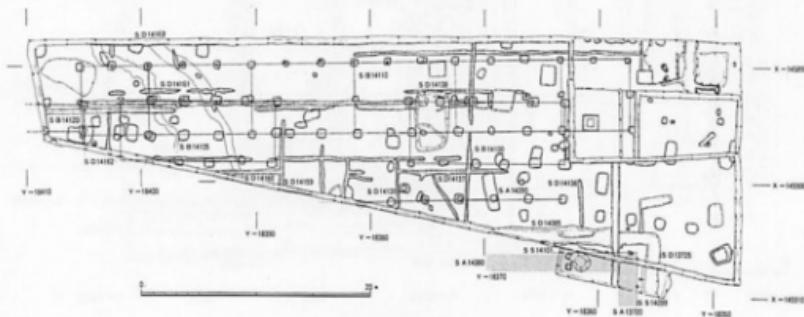
第214次調査

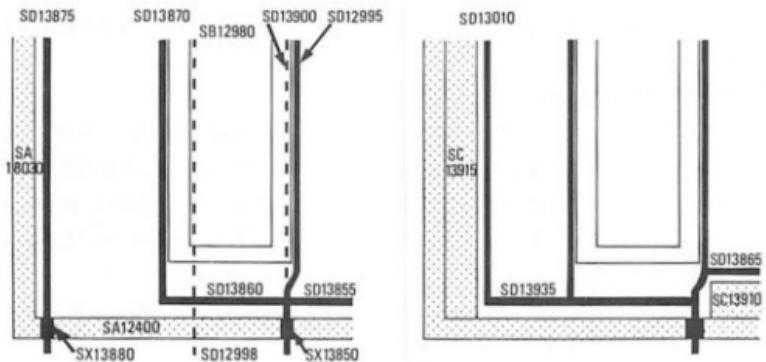
兵部省の区画塀北東隅を検出し、兵部省の南北規模を確定した。また、兵部省と朝集殿院の間にある、通路状の地域で建物の存在を確認した。調査区の土層は、古墳時代の遺物包含層の上に2層の奈良時代の整地層が認められ、それぞれの整地層は第205次調査の第一・第二次整地層に相当する。ほとんどの遺構は第二次整地層の上面から掘り込んでいる。主な遺構には、兵部省北・東面築地とそれらの北・東雨落溝、築地添柱列があり、また兵部省の区画外では4棟の掘立柱東西棟建物がある。このほかに溝15条、自然流路2条、塀2条、土坑などがある。これらはA~D期の4時期に分けられる。

A期（古墳時代） SD14163の下層で確認した自然流路SD14165は、2時期以上にわたる流路で、このうち最古のSD14165Aは古墳時代の遺物包含層の面から削り込んでおり、古墳時代の自然流路と考えられる。

B期（奈良時代初期） 掘立柱建物SB14120がこの期に属する。第一次整地層の上面で検出しておらず、C期の遺構より古い。建物の北東隅の4本の柱穴を確認したのみで、全体の構造は不明。東西方向の柱間は11尺、南北方向の柱間は8尺である。

C期（奈良時代前期） 兵部省区画外において、同規模の掘立柱東西棟建物SB14100・14105が、柱筋を揃えて東西に並ぶ。建物の規模は桁行5間、梁間2間、桁行・梁間方向とも9尺等間である。周囲には雨落溝が巡る。後に、SB14105が火災に会い、ともに撤去される。SB14105の柱



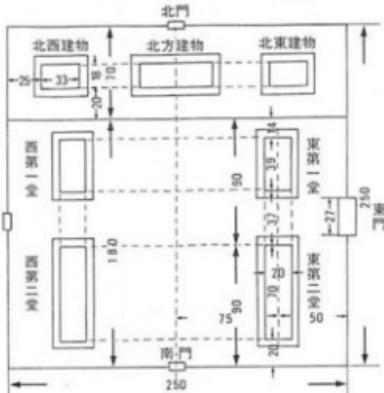


兵部省南西隅の溝の変遷

抜取穴から軒平瓦6721C（Ⅱ期後半）と平城宮土器Ⅲ期後半の土師器杯Aなどが出土しており、兵部省造営以前に遡る可能性がある。しかし、両者とも第二次整地土の上に建てられていること、SB14100の東妻が兵部省東面築地から20尺、SB14105の西妻が朝集殿院西面築地から20尺の距離にあり、兵部省と関連して計画的に建物を配置していることなどからすると、兵部省との並存もありうる。

D期（奈良時代後期） 兵部省の時期。兵部省にともなう遺構には、北・東面築地SA14080・13720、それらの北・東雨落溝SD14805・13725、及び築地外側の添柱列SS14101・14099がある。兵部省の南北規模は約73.8mとなり、東西規模と同様に250小尺で計画されている。兵部省の区画外では、長大な掘立柱東西棟建物SB14110と東西廻りSA14090がある。SB14110は桁行16間(48m)、梁間2間(6m)、桁行・梁行とも柱間が10尺等間で、間仕切りがある（東西両端のみ2間、中央は3間ごと）。東妻は兵部省東面築地心の位置、西妻は朝集殿院西面築地心から10尺の位置にあり、東で北に約1度振れる。儀式等に伴う仮設的な建物か。SA14090は、SB14110の南側柱筋から20尺南の位置にあり、SB14110と柱筋を揃え、振れも一致する。

今回の調査をもって、兵部省の調査は終了した。現市道や近鉄線路下など発掘不可能な部分が未調査のまま残っているが、省クラスの役所としては初めてその全体像が判明した。兵部省の全体的な造営計画、変遷など判明した事柄は多いが、明らかになった遺構は奈良時代後半のものである。兵部省区画内では奈良時代前半に



兵部省の建物配置図（単位は尺）

遡る兵部省の遺構は確認できず、奈良時代前半の兵部省の所在については今後さらに検討する必要がある。

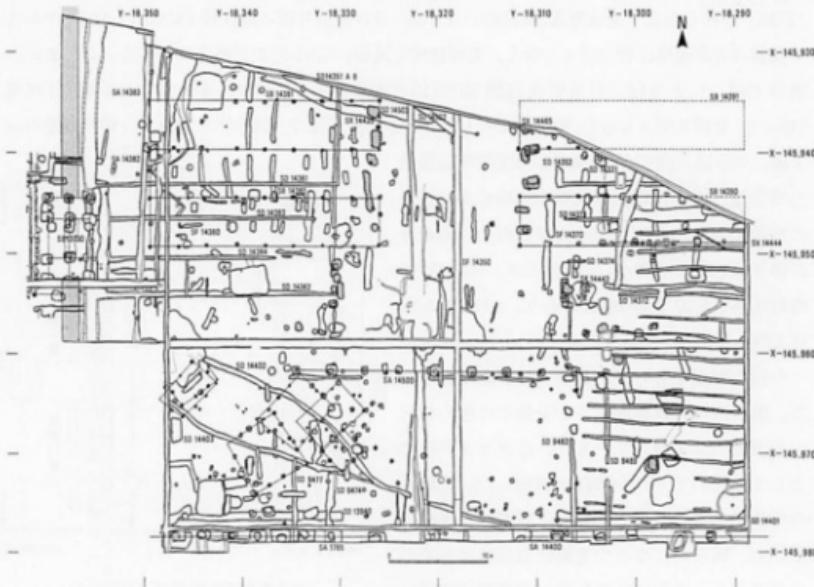
壬生門北方の調査（第216次）

壬生門とその近辺については第122次調査がなされている。今回はその北方で、兵部省東門と後述する式部省西門にはさまれた地域を中心とする。調査区内には、奈良時代の整地層、古墳・弥生時代の遺物包含層が認められ、遺構は両層の上面で検出した。遺構には、掘立柱建物10棟以上、掘立柱塀3条、凝灰岩切石列1条、宮内道路3条、儀式の旗竿用のものと見られる柱穴、多数の溝、土坑などがある。遺構は、A-D期の4時期に分けられる。

A期 平城宮造営以前。斜行溝 SD14402・14403・14502・14503、古墳時代の掘立柱建物SB14384-14389などがある。

B期 平城宮造営時。南面大垣に先行する東西塀 SA1765・14400により平城宮の南縁を閉塞する。壬生門の北にあたる部分は通路としてあいており、東西塀 SA14500が目隠し塀となる。SA1765は、東端が壬生門東西中軸線の約8m西方に位置し、柱間寸法は2.85m、SD13940・9470が南・北雨落溝となる。SA14400は壬生門東西中軸線に対して、SA1765と対称の位置にあり、柱間寸法は2.7m、SD9480・14401を南・北雨落溝とする。さらに東方に続く。

C期 奈良時代前半。SA1765・14400・14500を撤去し、壬生門から朝集殿院に宮内道路SF14350を通す。掘立柱東西棟建物SB14380・14381・14390・14391は、この時期の仮設建物で



第216次調査遺構図（壬生門北方）

であろう。宮内道路 SF14350は SD9482・14352, SD9474・14351を東・西側溝とし、幅は側溝心々で約25m。SB14380・14381・14390・14391は同規模の建物であり、SF14350の中軸線に対して左右対称に2棟ずつ南北に並ぶと考えられる。規模の分かる西側のSB14380・14381では、両棟の間隔が16尺、柱間は桁行が8間、梁間は東妻が3間、西妻が2間、柱間寸法は桁行が10尺、梁間が西妻で8尺である。2棟の建物の西妻を SA14382がつなぐが、さらに SB14381の北へ SA14383が延びており、北方調査区外にもう一棟存在する可能性がある。

D期 奈良時代後半。宮内道路 SF14350の側溝を SD9477・9485に替え、道路幅を広げる。また、兵部省の東門に通じる宮内道路 SF14360、式部省へ通じる宮内道路 SF14370をつくる。SF14350は、調査区南半では幅が約3.3mに広がるが、SF14360・14370の北ではC期の道路幅と変わらない。SF14360・14370はA・Bの二時期があり、幅がA期では約4m、B期には約11mに広がる。SF14360Aは兵部省東門 SB13730A（棟門）に伴う道路で、SF14360Bは同じくSB13730B（八脚門）の時期のものである。SF14370A・BはそれぞれSD14373・14374、SD14371・14372を南・北側溝とする。このほか平城宮の時期の遺構として、儀式の旗竿用の柱穴と見られる SX14420～14435・14450～14465がある。これらは、SF14350の中軸線に対して東西対称に並ぶ。柱穴相互の切り合いから見て、数回の儀式があったとみられる。

まとめ 今回の調査では、平城宮造営以前の遺跡、平城宮造営時遺構の壬生門北方の変遷、利用状況が明らかとなった。仮設建物、旗竿用の柱穴などが見つかったことは、ここがなんらかの儀式に利用されたことを示し、朱雀門北方の広場とは若干異なる利用形態をもっていたといえる。なお、今回の調査では弥生時代の遺物として、サスカイト製の石鎌、石包丁（片岩製）、磨製石剣などが出土した。また、調査区北壁の土層について、宮崎大学農学部、藤原宏志氏に依頼してプラント・オパール分析を行った結果、周辺での水田稲作が推定されている。

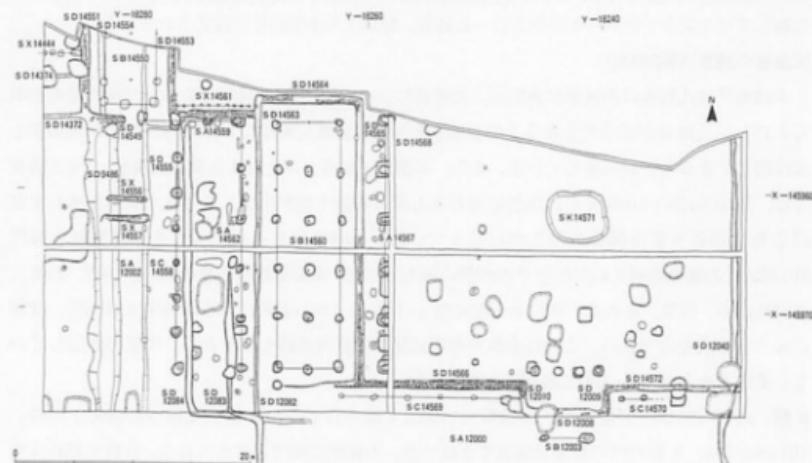
式部省の調査（第220次）

本調査区は式部省の西南部にある。式部省については、第165次調査において南面築地を明らかにし、式部省が壬生門をはさんで兵部省と対称の位置にあること、東西の規模が兵部省とほぼ同じであることが判明している。また、本調査区東南方に近接する第32次補足・155次調査では、溝 SD4100・11640から式部省に関わる大量の考課木簡が出土しており、本調査地および周辺を式部省とする根拠のひとつになっている。今回検出した式部省の主な遺構は、西門 SB14550、西面築地塀 SA12002とその内側の廊 SC14558、南面築地塀内側の廊 SC14569、西第二堂 SB14560、西第二堂の東・西にある南北塀 SA14562・14567と西にある東西塀 SA14559、建物に伴う雨落溝などである。このほか西門の西に延びる宮内道路などがある。時期の確定していない遺構もあるが、A・Bの二時期に大別できる。

A期 西門 SB14550が棟門で、築地塀 SA12002も廊を伴わない。礎石建物 SB14560が建つ。SB14550では、A期の門の痕跡は確認できないが、小規模な棟門が考えられる。B期に埋め立てられる南北溝 SD14554が、この門の西雨落溝であろう。SA12002は、その東・西雨落溝

SD9486・14555からみて幅が1.8m（6尺）と推定できる。SD9486・14555は、暗渠 SX14556・14557で結ぶ。SX14556には磚が用いられ、SX14557は平瓦の凹面を組み合わせている。SB14560は南北棟礎石建物である。桁行5間、柱間4.2m（14尺）、梁間2間、柱間2.7m（9尺）、東・西の軒の出は1.8m（6尺）で、床張りである。建物心はSA12002の心から15m（50尺）東にある。基壇は東西8m、南北23m。

B期 西門は礎石建ちの八脚門となる。西面築地の内側に片廂廊SC14558を、南面築地内側に片廂廊SC14569・14570を設ける。SB14560は存続し、門の周囲、礎石建物の周囲などを石組の排水溝が巡る。西門はSD14554を埋め立てて門の基壇を作り、周囲に石組溝（SD14551・14549・14553）が巡る。東・西の石組溝の心々間は7.2m（24尺）。対称の位置にある兵部省東門と同規模とみれば、門は桁行3間、中央間3.9m（13尺）、両脇間2.1m（7尺）、梁間2間、柱間2.1m（7尺）。SB14560の基壇周囲をめぐる溝は、北と東は人頭大の自然石を使って底石・側石を組む。西のSD12082は現状では素掘溝であるが、2箇所に丸瓦が凹面を上にして据えてあるので、もとは丸瓦を利用した溝かもしれない。SD14553とSD12082は、石組溝SD14563がつなぐ。廊SC14558は、築地心からの出が3.6m、柱間は10尺。7間分検出したが、南は削平されており、あるいはもう1間南に延びるか。築地東雨落溝はSD12084に付け替える。SC14569・14570は南門の両わきにある廊で桁行5間、柱間は3m（10尺）。SC14570は、削平が著しい。SD14566・14572はSC14569・14570の北雨落溝。石組で、SD14565と連続する。SD14566の西端はSC14569の西端と揃う。SD14372は、八脚門の西に延びる宮内道路SF14370の南側溝であろう。出土遺物は、軒瓦では6282G-6721Fのセットがやや多く、これは兵部省でも見られる組み合わせである。このほか、硯が比較的多く出土し、また墨書き器の中に「式」と記すものが1点ある。



第220次調査遺構図（式部省）

まとめ 調査の結果、式部省と兵部省の共通点が多く明らかになった。兵部省東門と式部省西門は同規模で、壬生門をはさんで対称の位置にある。また、式部省西第二堂は西面築地から14.8m東に建物の南北中軸が、南面築地から26.6m北に北側柱がきており、兵部省東第二堂と同一の配置計画をしている。さらに、造構変遷の上でも、西門が棟門から八脚門へ、築地塀から片庇廊付の築地塀へというように、兵部省との共通性が強くうかがえる。

第一次大極殿地区の調査（217次）

第一次大極殿地区の整備のため、大極殿前面を東西に走る旧構内道路を撤去することになり、道路敷部分を中心に幅8~41m、東西171mにわたって調査を行った。調査地は、同地区の東西両面の築地回廊部、大極殿両翼の斜道、および斜道に挟まれた広場にあたる。第一次大極殿地区については、既に第27・41・69・72・75・77・87・117次調査が行われ、その成果は『平城宮発掘調査報告 XI』にまとめられている。さらに、西面築地回廊部分について、第192次調査を実施している。これらの調査によって、本地区は大きく3時期（第I~III期）の変遷が確認され、I期はさらに4小時期に、III期は2小時期に分けられている。今回の調査では、これまでの調査により明らかにされた造構配置・変遷を再確認した。また、調査区西端部では地山上に1m以上に及ぶ整地を行っていることが確かめられるなど、これまでの調査成果を補足する資料が得られた。さらに、平安時代末~鎌倉時代の鋳銅工房や近世墓など、本地域の後世の状況を部分的ながら明らかにすることができた。今回検出した主な遺構は、第一次大極殿地区の東・西面築地回廊、門2棟、塀4条、掘立柱建物5棟、溝8条、土壙12基、それに鋳造炉跡群などである。

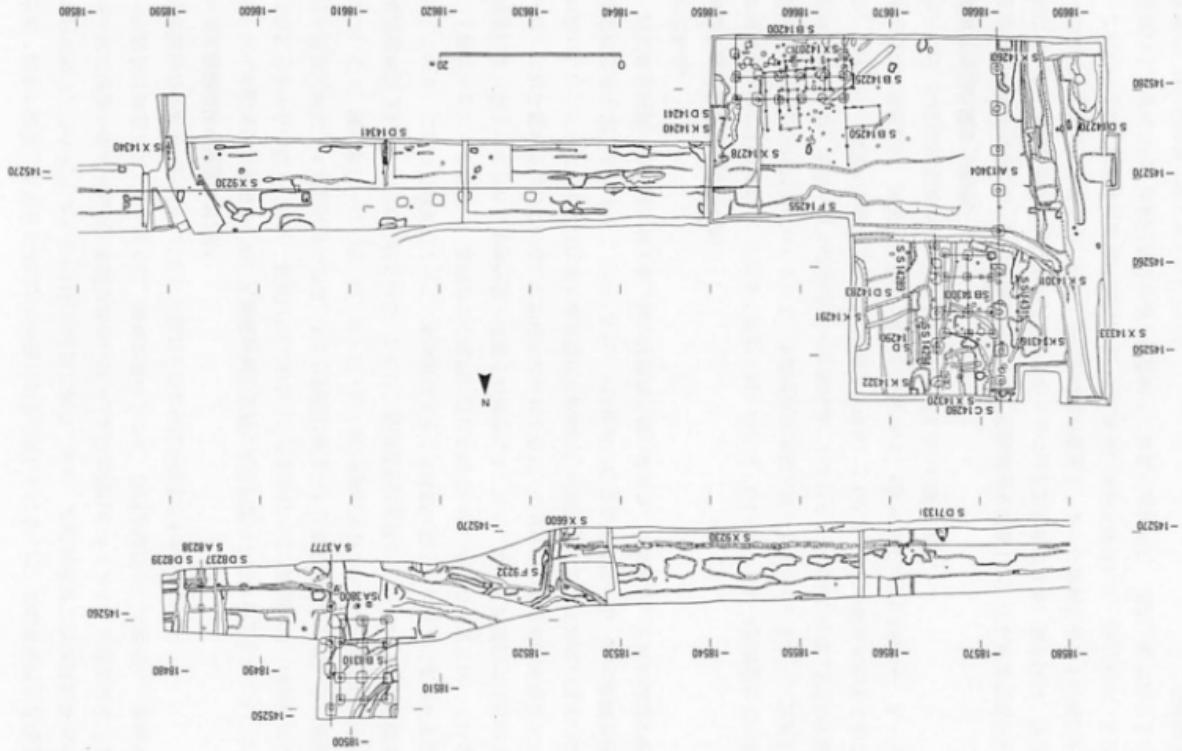
宮北面大垣の調査（第215~6次）

平城宮の北面大垣の調査は、これまで第23・34・161~1・174~16・191~4次調査などがあり、築地塀や前身の掘立柱塀を検出している。本調査区は北面大垣の西端近くにあたり、近世以降の破壊が著しいが、北面大垣 SA2300とその北雨落溝、およびその前身掘立柱塀 SA2330を確認した。SA2300は、版築の築地積土が厚さ0.4mほど残り、うち0.2mほどが掘込み地業である。築地の南端は調査区外。雨落溝は築地の北約1.0mにある。幅約1.1m、深さ約0.4m。丸・平瓦が出土した。SA2330は柱掘形を2個検出したにとどまる。柱間は10尺。

東院地区東辺の調査（第215~7次）

法華寺町の集落西辺でA・Bの2調査区を設けて発掘調査を実施した。平城宮東院地区の東端部にあたる。平城宮東面大垣は本調査区の東約8mの位置に想定できる。調査区は、厚さ約10~15cmの表土の直下が暗黄褐色粘質土の奈良時代の整地土、および黄褐色砂質土の地山となり、これらの上面で南北棟建物SB13620A・B、南北塀SA13630を検出した。SB13620A・Bは桁行3間以上、梁間3間、西廂付掘立柱南北棟建物で、柱間寸法は桁行、梁間、廂の出ともに10尺等間で、ほぼ同位置で建て替えられている。

（小池伸彦）



第217次調查地質圖（第1次大編號地區）

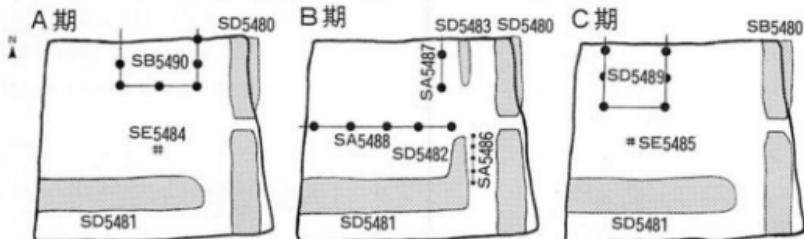
平城京の調査

左京二条三坊六坪の調査（215-1次） 国道24号線に南面する事務所建設に先立って実施した発掘調査である。六坪の東南隅にあたり、東三坊坊間路、二条条間南小路の側溝をはじめ、掘立柱建物2棟、掘立柱塀3条、井戸2基などの奈良時代の3時期にわたる遺構を検出した。

A期は奈良時代初期、B期は奈良時代前半～中頃、C期は奈良時代後半に属する。東三坊坊間路西側溝（SD5480）は3時期ともに基本的に北から南に流れ、六坪東南隅部付近に木製の橋を掛けて坪内と東三坊坊間路との往来を可能とする。二条条間南小路北側溝（SD5481）は3時期ともSD5480とは合流せず、B期のSD5483のみSD5480の西方約2.5mで北に折れ曲がる。

A期とC期は坪の東南隅にそれぞれ南北棟SB5490、SB5489を建て、南妻のさらに南に井戸SE5484、5485を1基づつ配置する。A期の井戸SE5484は井戸枠が抜き取られて残らないが、C期の井戸SE5485にはスギの板材を二重に回した縦板組円筒形の井戸枠が遺存し、上端を大きな自然石が取り囲む。SE5484からは自然釉のかかった美濃古窯群の製品と目される土器をはじめとして平城宮土器編年Ⅰ期の土器が多量に出土し、SE5485の底部からは和同開珎、萬年通宝、神功開宝などの銅鏡15枚、埋土上層から10世紀初頭の土師器片が、それぞれ出土した。それ故、SE5484は平城遷都後の短期間にのみ存在し、SE5485は奈良時代後半から10世紀以降に至る比較的長期間にわたって存続したことが明らかである。

これに対してB期は東三坊坊間路と連絡する端の部分を開口部として、敷地外周を囲む掘立柱塀が道路側溝と平行して建つ。SA5488はSD5481との間に約4.2m幅の空閑地を設けて建ち、この塁地ともいべき空間の東を閉塞する施設としてSA5486が建つ。



第215-1次遺構変遷図

左京三条二坊四坪の調査（215-16次） 四坪の中央やや東南部における店舗付共同住宅新築工事に先立つ発掘調査である。厚さ約1.0mの現代の盛土の下に厚さ約40cmの旧水田耕作土とその基盤土があり、奈良時代の遺構はその直下の地山上面で検出した。検出遺構は奈良時代の掘立柱建物6棟、掘立柱塀3条と、それ以後の水田耕作に伴う素掘溝、粘土採掘土壙などである。

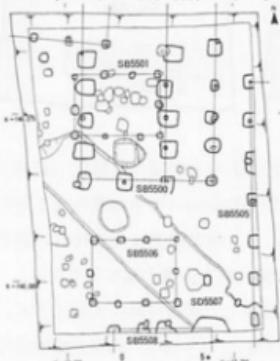
遺構はL字形の塀SA5545、5546の存在する時期と、これを廃絶した後の時期に大別できる。SA5545、5546に伴ってSB5542からSB5541に建て代わる2小時期と、SA5545、5546の廃絶後にSB5540からSB5550に建て代わる2小時期を各々想定することができる。SA5545が四坪四周の

道路側溝心を基準として坪を南から1/4に分割する線上に位置するため、この東西堀は四坪を小規模な宅地に細分するための分割施設と考えることも可能である。しかし一方ではDA5546が同様の手法で算出される坪中軸線から東へ80小尺の位置に存在することから、L字形の堀が四坪全体を1宅地として占有する1町班給宅地の中核部を囲む堀とも考えられる。

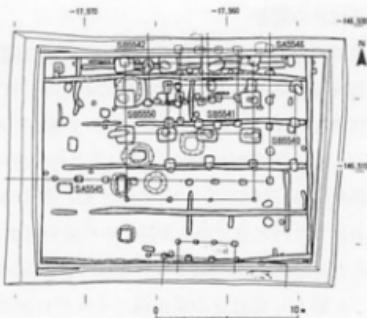
左京三条二坊九坪の調査（215-3次） 九坪の北西部における調査である。検出遺構は奈良時代

の掘立柱建物6棟、井戸1基、古墳時代の溝1条などで、一部奈良時代の土器片を多く含む整地土（「美濃国」の刻印のある須恵器杯B出土）上面で検出したものもあるが、大部分は地山上面で検出した。古墳時代の溝SD5507（深さ40cm）は西北から東南に流れ、布留式土器を多量に出土。奈良時代の遺構は重複関係、出土遺物がともに無いため遺構変遷は明確でない。

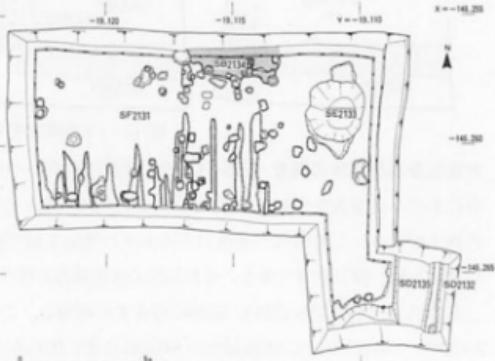
西一坊大路の調査（215-4次） 阪奈道路と県道奈良大和郡山斑鳩線との交差点に面する店舗建設に伴う調査である。現代の盛土の下に旧水田耕作土とその基盤土があり、さらに下に12世紀遺構の耕作基盤土・整地土が2層あって、現地表下1mで地山に達する。奈良時代の遺構として西一坊大路東側溝SD2132の西肩を調査区東端で検出した。この上層に12~13世紀の瓦器を埋土中に含む井戸SE2133や南北に走る旧水田耕作溝13条などがある。さらに上層整地土上面にて14世紀以降の小鋳冶工房に関連する遺構を検出した。竪穴状建物のSB2134は円形または方形に竪穴を掘り、周囲に柱を10本前後めぐらせる簡単な差しかけ程度の工房跡である。SB2134内部から出土した炭、鉄滓、西一坊大路東側溝SD2132に重複するSD2135から多量に出土した鉄滓などは、いずれも鍛冶津である。



第215-3次調査遺構図



第215-16次調査遺構図



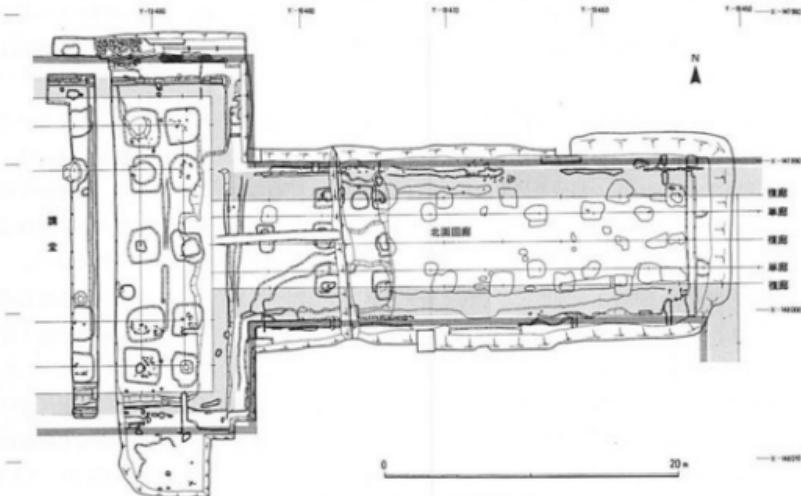
第215-4次調査遺構図

薬師寺講堂・北面回廊の調査（218次） 薬師寺の伽藍復興計画に伴う発掘調査である。調査の結果、現講堂基壇は創建当初の講堂基壇の東端を削って残土を中央に盛り上げて築成していることが判明し、創建当初の講堂の造構は現講堂基壇土下層部で最も残りがよく、東に向かうに従って遺存状況が不良となる。特に北面東回廊中央から東方の削平が著しく、回廊礎石据付穴の底部を辛うじて検出したにすぎない。

創建当初の講堂は、桁行1間以上（柱間寸法15尺）、梁間2間（柱間寸法17尺等間）の身舎の四面に出が10尺の庇が付き、さらにその外側に出が6.25尺の裳階がめぐる。梁間の柱間寸法に比べて庇の出が極端に短い、やや特異な平面形を有する。伽藍推定中軸線で折り返すなら、講堂の全容は外周に裳階がめぐる七間四面の建物に復原できる。

講堂の身舎・庇の礎石据付穴は基壇築成の途中段階で掘削し、礎石の大きさに合わせて底部に再び土を埋め戻すなどの養生を行ったのち根石で礎石を安定させ、さらに基壇土を積み足して基壇を完成させている。「薬師寺縁起」によれば、創建講堂は天祐4（973）年の火災焼失後再建されたことが知られるが、今回の調査所見では各柱位置に礎石抜取穴はそれぞれ1つしかなく、羅災後の再建講堂は当初の礎石を踏襲したものとみられる。また裳階の礎石据付穴および抜取穴は1箇所で検出したのみで、他は削平されて残らない。

講堂の基壇外装は壇上積である。南北両面に凝灰岩製地覆石列を検出し、特に北面の地覆石上面には羽目石を受ける仕口が部分的に遺存する。これによって講堂基壇の南北長は22.5m（76尺）、平側における庇側柱心からの基壇の出は11尺となる。基壇東端の外装石材はすべて抜き取られており、講堂基壇土の下がりを検出したのみである。この基壇土の下がりの中央下端



薬師寺講堂・北面東回廊遺構図

部に、凝灰岩製切石1石が後世の攪乱を受けずに据え付け当初の位置を保持して遺存していた。この切石は講堂妻側柱心からほぼ11尺東に位置しているため、講堂の基壇の出を平側・妻側とも同値と考えるなら、基壇東端の外装石材が遺存したものと考えることができる。しかし、後述するように北面東回廊の複廊に伴う基壇は上り勾配で講堂基壇に取り付くことが想定されるから、この切石は講堂・回廊の完成後には両基壇土内に埋まることになる。ひとつの解釈の方法として、回廊基壇の建設は講堂基壇完成後に実施され、その際に講堂基壇東端の外装石材が回廊基壇土内に埋まったものと見ることができる。もう一つは回廊が天録年間の火災で消失した後に、基壇上面の削平に伴って旧講堂基壇東端を押さえる縁石として設置されたとする見方である。現状では両者のいずれとも決し難く、回廊の建設計画が単廊から複廊に改められているという既往の調査成果ともからめて、今後検討していく必要があろう。

講堂外周の雨落溝は、講堂北面と北面東回廊が講堂に取り付く南入隅部の2箇所において検出した。前者は小礫を幅約60cmの帯状に敷き詰めたもので、後者は幅約60cmの素掘溝の西肩に側石の一部とみられる凝灰岩の破片が遺存する。

講堂身舎端間に対応する基壇南北両面に石階の痕跡を検出した。いずれも凝灰岩製の第1段目踏石が部分的に遺存する。出は北面が0.7m、南面が1.1mである。両者ともに講堂の地覆石が背面を貫通するため、講堂基壇外装工事完了後に石階を付加したことが明らかである。1969年の調査では北面中央にも石階の痕跡を検出しており、石階は南北両面の身舎中央間および両端間に設けられたものとみられる。北面東の石階のさらに北には食堂方面に連絡する玉石敷の通路がある。上面を10世紀以降の土器片を含む整地土や天録年間の火災を示す焼土層が覆い、この通路が天禄4(973)年の講堂焼失以前のものであることを示す。同様の通路は1969年の調査時に北面中央間の石階の北側においても検出している。また、石階地覆石と雨落溝との関係は攪乱が著しく明らかにできなかった。

北面東回廊は複廊と単廊の遺構を検出し、回廊建設計画が単廊から複廊に変更されたとするこれまでの調査成果を再確認した。後世の削平を免れた西半部における単廊の礎石据付穴は、複廊建設時に積み足した基壇土に覆われている。削平されている東半部では6対、5間分の単廊の礎石据付穴を複廊礎石据付穴と同一面で検出した。柱間寸法は桁行12.5尺等間、梁間12.5尺で、北面東回廊（単廊）東北入隅から講堂裳階妻に取り付くまでの絶柱間数を10間とする。

複廊の礎石据付穴は東面回廊と取り付く東北入隅部から西へ7間目までを検出し、基壇土の残りのよい6・7間目には礎石抜取穴も同時に検出した。柱間寸法は桁行13.5尺等間、梁間2間を10尺等間とする。これより以西、講堂裳階妻との取り付き部までの26尺の中間に存在したと思われる礎石据付穴・抜取穴は削平されて残らない。おそらく複廊回廊基壇はこの区間において上り勾配で講堂基壇に取り付いていたものと推定され、回廊基壇の削平にともなって礎石据付・抜取穴が失われたものと考えられる。北面回廊が講堂に取りつく部分は、南面回廊が中門に取り付く部分と同様に、回廊の桁行柱間寸法をやや短くして調整していることがうかがえる。

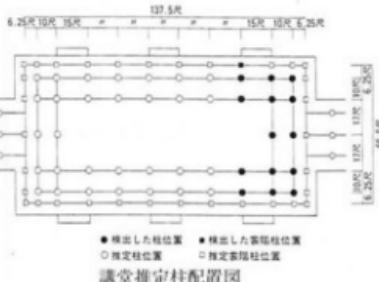
単廊に伴う基壇外装の痕跡はない。複廊の基壇外装は北面の2箇所において地覆石列を検出した。南面では部分的に玉石を用いて改修した痕跡がある。基壇の南北幅は約10m(34尺)で、複廊側柱心からの基壇の出は7尺となる。複廊に伴う雨落溝は擾乱されて遺存状況が不良だが、北面の一部に改修時のものと思われる玉石の底石列と外側石列とを検出した。

講堂の創建年代を示唆する遺物として、講堂礎石据付穴から出土した軒丸瓦6703Cがある。瓦幅年から講堂は天平10年以降に造営を開始したことになり、その完成はさらに遅れることとなる。瓦幅年に従って講堂の完成時期を基仁京遷都以降の時期とするのか、それとも瓦幅年を再考すべきかは、今後の検討課題である。

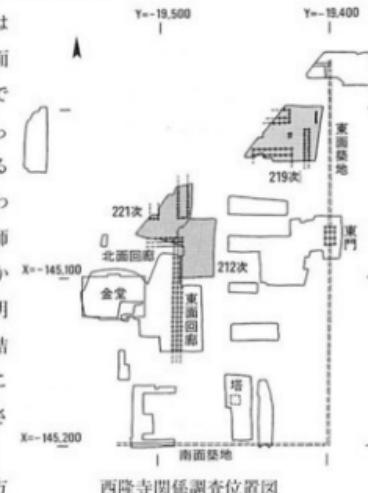
西隆寺旧境内の調査(212・219・221次) 212・219次調査は近鉄百貨店の増床計画、221次調査はその北側を近鉄西大寺駅から東北方向に貫通する都市計画道路用地における調査である。

212次調査区北半部と221次調査区の全域では旧水田耕作土とその基盤土の直下が地山および奈良時代の整地土となり、この上面で西隆寺金堂を囲む回廊の東北隅部と北面回廊の北側柱列、回廊北側に建ち並ぶ掘立柱建物群、井戸などを検出した。212次調査区の南半部の大半は後世の水田耕作に伴って削平されており、奈良時代遺構の遺存状況は良好でない。また212次調査区北端と221次調査区東南付近では縄文時代の流路(SD440)を、212次調査区南辺では古墳時代の掘立柱建物(SB441)と掘立柱塀(SA442)を、それぞれ検出した。

212・221次 SC450は西隆寺北面東回廊、SD445は東面回廊(SC300)の東雨落溝の一部、SX446は東面回廊基壇を横断してSD445に連続する暗渠の一部である。削平が著しいため回廊の基壇外装痕跡はまったく残らず、SC450の各柱位置に薄くレンズ状に残る礎石据付彫形を計11個検出したのみである。とりわけ回廊東北隅中央の礎石据付彫形の底部から、土師器壺Aが正位の状態で出土し、壺内部の充填土壤から和同開珎、萬年通宝、神功開宝各1枚、錢文不明銭2枚が出土した。錢貨周辺土壤の脂肪酸分析の結果から、この土師器壺が臍衣壺として使用されたことが推定できるが、西隆寺回廊建立に伴って埋納された地鎮具である可能性もきわめて高い。また、SC450北側にはSC450廃絶に伴う瓦投棄土壤が東西方



講堂推定柱配置図



西隆寺関係調査位置図

向に点在する。

SD451, 452は素掘東西溝で、西隆寺造営以前の右京一条二坊九・十坪坪境小路の両側溝である。両側溝心々間距離は約6mで、中軸線はSC450棟柱通心にはば合致している。既に1972年の調査でも、西隆寺金堂中軸線が西二坊坊間路心と揃うことを確認しているから、西隆寺の伽藍配置計画が寺院造営以前の条坊道路の位置を基準としていたことがうかがえる。

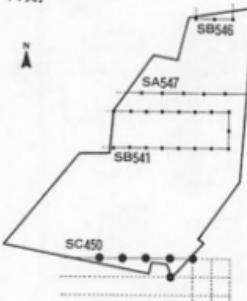
SC300東方の奈良時代の遺構には小規模な井戸SE448や、やや方位の振れる2条の掘立柱塀SA453, 454があるが、西隆寺に伴うものか否かは不明である。

これに対してSC450の北側には、これに伴う遺構として3時期に区分できる掘立柱建物群や掘立柱塀などを検出し、西隆寺主要伽藍北側に接する空間の利用形態の変遷を明らかにするこ

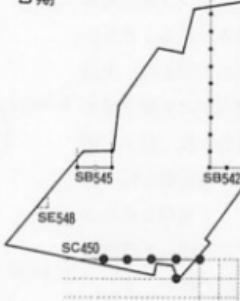
とができた。A期のSB541は長大な東西棟で、柱掘形から平城宮土器編年Ⅲ以前の土師器杯底部、柱抜取痕跡からⅢ・Ⅳの土師器皿、土師器杯がそれぞれ出土したため、奈良時代後半の西隆寺の尼坊にも比定し得る。B期の南北棟からの出土遺物はなく時期比定が困難であるが、C期の縦柱建物SB544の柱掘形からは9~10世紀の土師器杯が出土し、平安時代前半まで存続した主要伽藍の北側が倉庫などの建ち並ぶ空間として利用されていたことを示す。

なお221次調査区西端付近に想定される講堂の遺構はその片鱗すら検出することができず、代わって井戸SE548を検出した。井戸枠据付掘形と枠内埋土から平城Ⅷの土器が出土したため、B

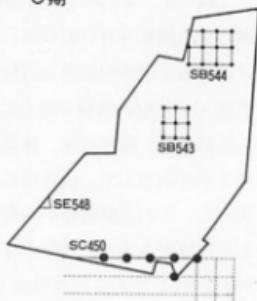
A期



B期



C期



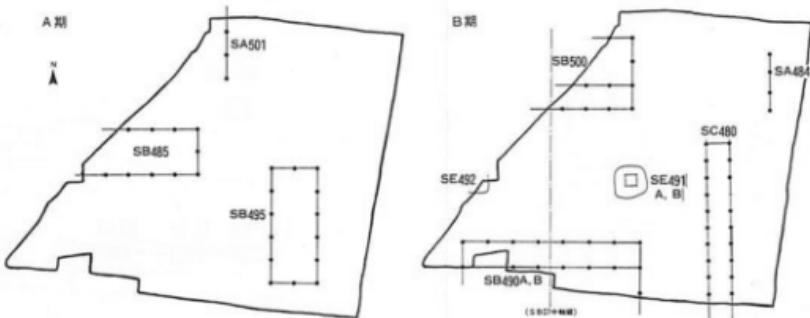
第221次調査遺構変遷模式図

およびC期に属するものとみられる。なおSE548は推定講堂の東北に接して位置し、今後講堂の位置や規模、存続年代を探る上で重要な鍵を握る。

219次 左京一条二坊九坪内で、西隆寺造営以後は寺域の東北隅にあたる。奈良時代の遺構は、主として旧水田耕作土とその基盤土の直下に堆積する古墳時代の遺物包含層および調査区内を北から東南方向に流れる奈良時代以前の斜行大溝（SD493）の砂層上面において検出した。

遺構は奈良時代前半～中頃（A期）と、後半および平安時代（B期）の2時期に大別できる。A期の遺構には、SB485（東西棟、桁行4間以上、9尺等間、梁間2間、9尺等間）、SB495（南北棟、桁行5間、9尺等間、梁間2間、9尺等間）の掘立柱建物2棟と、SA501（2間以上、9尺等間）の掘立柱南北廊がある。いずれも西隆寺造営以前にさかのぼる九坪内の宅地の遺構である。B期は西隆寺主要伽藍とほぼ時期を同じくして成立した建物群で、計画的な配置理念のもとに建設されている。長廊状建物SC480（桁行9間以上、6.5尺等間、梁間1間、9尺等間）は礎石建ちで、9間目以北を検出してないがさらに北へのびる可能性もある。尼僧の住坊のような施設であるか、あるいは寺域西北隅に形成された一院の外郭施設としての単廊となるかはにわかに決し難い。SB490A、Bは桁行7間の北廂付東西棟（桁行10尺等間、廂の出10尺）で、当初掘立柱構造であったもの（SB490A）を後に礎石建ち（SB490B）に改めている。この改築はSB490がかなりの長期間存続したことの証左である。類例手法を法隆寺伝法堂に見ることができることから、SB490Bは一般的な住宅建築というより仏堂的性格の濃いものといえる。SB500（桁行3間以上、9尺等間、梁間3間、9尺等間）は南廂付の東西棟で、桁行を7間と仮定するとSB490と中軸線を揃える。またSB500東妻柱筋南方の井戸SE491と調査区西端の井戸SE492とは広場を挟んでほぼ左右対称形に配置される。SE491の上限は掘形理土から出土した綠釉陶器片から9世紀後半代と考えられ、下限は井戸枠抜取穴および枠内底部から出土した黒色土器などの良好な一括資料が薬師寺西僧房床面土器よりやや新しいことから10世紀末とみられる。これはB期の終末が10世紀末であることを示し、史料に記す西隆寺の存続時期とまさしく一致する。

またSE491の枠板は扉の転用材であることが判明した。材は4枚からなり、上部は腐朽する

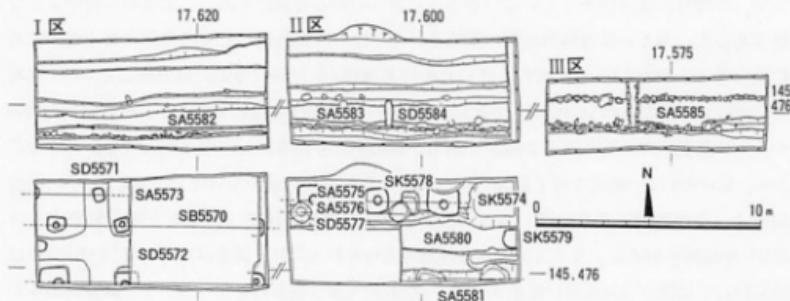


第219次調査遺構変遷模式図

が下半部は幅・厚ともに完存する。うち2枚は同規格の1枚板で、軸部、木口に埋め込みの端喰を持ち、法隆寺五重塔所用の扉と同等の手法を示す。他の2枚は一方が2枚、他方が4枚の板材を本実矧で接合する集成材で、端喰はなく横棟と八双金物の釘跡がある。おそらく西隆寺内の堂宇に用いられていた扉が井戸枠に転用されたものと思われる。

法華寺境内の調査（215-15次） 薬師堂の移転と駐車場を開む築地塀の改築に伴う調査である。前者では現在の薬師堂（1666（寛文6年）年の棟札銘が残る）と同規模の前身建物を検出した。基壇は東西5.4m、南北4.5mの規模で、3層を高さ30cmに築成している。建物は三間堂で向拝はない。基壇土中に混入した瓦片から中世の建立とみられる。後者は3調査区に別れ、いずれにおいても奈良時代の築地塀（SA5580）、掘立柱建物（SB5570）、掘立柱塀（SA5573, 5575, 5576, 5581）、道路側溝（SD5571, 5572）と、室町時代の築地塀跡（SA5582, 5583, 5584, 5585, 5586, 5587）などを検出した。

（本中 真）



第215-15次調査構造図



第215-15次調査位置図

1990年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査一覧

調査地区	遺跡・次数	調査期間	面積	備考
6AAY	平城宮 第205次	90.4.1~90.7.31	1700m ²	兵部省
6ABL				
6AAX	平城宮 第214次	90.4.17~90.7.21	850m ²	兵部省
6AAY				
6AAY	平城宮 第216次	90.10.4~90.2.26	2500m ²	壬生門北方
6ABD	平城宮 第217次	90.7.5~90.12.12	2985m ²	第一次大極殿地区
6ABP				
6ABQ				
6AAY	平城宮 第220次	91.1.8~91.4.4	1500m ²	式部省
6ADA	平城宮 第215~6次	90.8.9~90.8.18	85m ²	平城宮北面大垣
6ALD	平城宮 第215~7次	90.8.21~90.8.25	42m ²	東院地区東辺
6ASB	平城宮 第215~9次	90.9.10~90.9.11	7m ²	平城宮北方遺跡
6ASA	平城宮 第215~10次	90.9.18~90.9.21	12m ²	平城宮北方遺跡
6ASA	平城宮 第215~11次	90.9.25~90.9.26	12m ²	平城宮北方遺跡
6AAO	平城宮 第215~13次	90.10.17~90.1.25	118m ²	内裏北方官衙・大膳職地区
6ABA				
6ABB				
6ABN				
6ABO				
6ACA				
6ASC	平城宮 第215~17次	91.1.9	15m ²	平城宮北方遺跡
6BSR	平城宮 第212次	90.5.7~90.6.19	600m ²	西隆寺旧境内
6BYS	平城京 第218次	90.7.5~90.8.25	700m ²	藥師寺講堂・北面回廊
6BSR	平城京 第219次	90.11.16~90.11.23 91.1.22~91.3.29	1030m ²	西隆寺旧境内
6BSR	平城京 第221次	91.1.22~91.3.14	585m ²	西隆寺旧境内
6AFE	平城京 第215~1次	90.4.3~90.5.11	320m ²	左京二条三坊六坪
6AGA	平城京 第215~2次	90.5.15~90.5.23	200m ²	右京一条二坊四坪
6AFI	平城京 第215~3次	90.6.19~90.7.12	430m ²	左京三条二坊九坪
6AGF	平城京 第215~4次	90.7.7~90.7.13	142m ²	西一坊大路
6AGG				
6AFB	平城京 第215~5次	90.7.26~90.8.8	95m ²	左京一条三坊二坪
6AFA	平城京 第215~8次	90.8.27~90.9.10	250m ²	左京一条四坊三坪
6AGA	平城京 第215~12次	90.10.15~90.10.17	16m ²	右京一条二坊二坪
6AGA	平城京 第215~14次	90.10.22~90.10.25	25m ²	右京一条二坊二坪
6BFO	平城京 第215~15次	90.10.29~90.12.6	205m ²	法華寺境内
6AFI	平城京 第215~16次	90.11.21~90.12.26	400m ²	左京三条二坊四坪
6BFO	平城京 第215~18次	91.1.16~91.1.17	17m ²	法華寺旧境内
6AGA	平城京 第215~19次	91.2.25~91.2.26	10m ²	西一坊大路
6AFC	平城京 第215~20次	91.3.12	18m ²	左京一条二坊十坪

奈良時代の漆器の復元

平城宮跡発掘調査部

身分を示す食器 奈良時代の雰囲気を伝える『日本書紀』には、都に住む貧しい女王が、仏の助けによって親類の皇族たちに立派な食膳を供する話がある。ここでは香りのよい食物は、金属や漆の立派な器によって供されている（中巻第14話、34話）。

今日、天平食の復元は各地で試みがあり、豪華な食膳を復元している。しかし、従来の復元は大きな問題を含んでいる。すなわち、食品自体は豪華でも、これを盛りつける器がすべて土器（須恵器・土師器）であり、さらに、食膳具も粗末な木の箸を使用していること。

身分によって食品の内容に大きな差をつけても、食器・食膳具については変わらないのである。これは、身分秩序が厳しい奈良時代の実態とはかけ離れた復元と言わねばならない。

時代は降るが、10世紀に成立した『延喜式』の「内匠寮」の規定や、「大膳上」にみる宴会雜給の規定などをもとにすると、平安宮の宮廷では銀器（天皇・中宮など）、朱漆器（三位以上）、黒漆器および緑釉陶器（五位以上）、土器（六位以下）という身分に基づく区分が想定できる。朱漆器などがまだない奈良時代にあっては、食器の区分は金属器（天皇など）、黒漆器（五位以上）、土器（六位以下）という三段階だったのであろう。冒頭の説話は、金属器や漆器が上流階級の食器だった奈良時代の実情を端なくも伝えていると思う。

長屋王の食器 本年、研究所は日本経済新聞社、奈良そごう美術館などと共に「長屋王 光と影」展（1991年2月20日～5月6日）を開催するにあたり、その展示の一つとして長屋王の食膳を復元することとした。ここでは、上述の諸点を踏まえて食事内容だけでなく、食器も彼の地位にふさわしいものとした。

長屋王の最高官職は左大臣正二位。しかも、木簡に「長屋親王宮施大賛十編」などとあるように、王家の内部では天皇にも準ずる地位との認識があった。したがって、ここでは金属器と漆器の二組を製作した。

金属食器は、正倉院宝物の佐波理の重輪、水瓶、匙などを参考にした。佐波理は銅と錫の合金であるが、表面は黄白色を呈し、本来は黄金の器に凝せられていたのであろう。司馬遷の『史記』『孝武本記』などには、黄金の器による飲食は永遠の命をもたらすとあり、唐代では黄金の器は皇帝などの食器であった（『唐儀制令』卷18）。

今日伝来する、または出土する佐波理の容器は、鋳造した器を金工用の横軸ロクロにかけて削り仕上げをしたもの。しかし、現在の技術では、銅と錫の合金を切削工程にかけると粘性不足から破損し、製作不能ということで、銅を叩き伸ばして成形しロクロ仕上げの後に、最終的に鍍金する方法で製作した（担当は、京都市永谷醜洋氏の工房）。

漆器の特徴 奈良時代において、漆器は大変な貴重品であり、これを反映して出土量も少なく、たとえば、平城宮跡で出土した漆器は9世紀代に入るものを含めても今まで150点前後にしか

ならない。従って、出土品のみではすべての器種を復元することはむずかしいが、古代の漆器は以下の大きな特徴があり、これを追求することで復元が可能である。

- a 漆器には佐波理の椀など、同時代の金銅器と共通する器種が少なくない。たとえば、円環つまみの蓋がつく稲鏡などはこの典型である。食器だけでなく、食膳具の匙も同じことが指摘できよう。これは、漆器の製作者が金属器の一部を模倣した事を物語る。
- b 漆器には、同時代の奈良三彩と共に共通する器種が少なからず存在する。奈良三彩は、須恵器の工人が中国本土に赴き、彼の地の唐三彩の技術を習得して製作したといい（田中琢1984）、その器種は須恵器のそれを通用したという。これは言い換えると、漆器は須恵器の一部と器種が共通することを意味する。
- c 漆器の一部は、ロクロ挽きの合子など、いわば木器に特有とも言うべき器種を含む。

これらに含まれない器種もあるようだが、奈良時代の漆器は基本的にはこのa~cから成立しており、この中から食器にふさわしい器種を選んだ。

ところで、先に引いた大膳職の宴会雜給（『延喜式』）では、五位以上の貴族に給する食糧の種類が31~30種。これに対し、六位以下は16種と大差がある。この支給食糧の違いは、いわゆる皿数の違いとして表われているのであろう。

長屋王の食膳における器の数は、これをもとに最大30種程度と考え、やや晴れがましい食膳、日常の食膳を想定して匙、箸の食膳具を含めた14器種計32点を製作した（製作は、富山県庄川町小西久夫氏の工房が担当）。

この試みによって、上は天皇・貴族から、下は下級官人・庶民にいたるまで、等しく粗末な食器・食膳具を用いたとする従来の常識を排し、奈良時代像の正しい認識に少しでも近づけたと思う。今後も機会を得て、奈良時代漆器の復元につとめたい。なお、金属器・漆器とともに製作工程のビデオを作成した。

（金子裕之）

法隆寺古瓦の調査（2）

平城宮跡発掘調査部

考古第三調査室では今年度、中・近世の軒平瓦について調査・研究を行なった。

鎌倉時代 1219年に始まる修理用の瓦243（唐草文）が前期の代表。そのほか連巴文、連珠文、剣頭文（204C）がある。平安後期以来の額貼付け式段顎と折曲げ式段顎があり、同一種に共存する場合もある。各部位に離れ砂を付ける点、平瓦部凸面を格子叩きする例が存在する点も特徴。平安時代にない釘穴の出現は、屋根勾配が強くなったことと関連しよう。204Cには額貼付け式段顎と新出の瓦当貼付け式段顎があり、後者の出現が後期（13世紀第3四半紀以降）の大きな等級である。瓦当上縁と顎後縁にけずりをもつ。1318年造立の上御堂所用の274Aのように中心飾りが蓮華文の例も出現する。この頃珠文帯は消失しよう。

室町時代前期 前半の唐草文は各單位同士すなわち茎が連續するが、後半には分離し始める。中心飾りは蓮華文が残るが、宝珠文（267A）、半截花菱文（271F：1383年夢殿修理用）が出現する。圓線は残る。すべて瓦当貼付け式段顎である。離れ砂は瓦当面と平瓦部凸面に付着する。1344年西院鐘楼・經藏造営用の255Aの平瓦部凸面の格子叩き目は最終の例。叩き具はすでに無文のものが主流となっている。瓦当上縁の半数以上にけずりがある。

室町時代中期 応永年間の修理瓦の中心飾りは半截菊花文を主体とする（272Ba）。凹面側の一側縁に水切り用の背の低い横棟をもつ蝶羽用瓦も出現する。瓦当下縁がけずられる例が増加する。永享年間の修理以降の中心飾りは半截菊花文以外に、268B（1436年南大門再建用）の宝珠文と271Cの半截花菱文が主体となる。該期の宝珠文の両脇にはC字形と逆C字形の唐草が伴う。また、唐草文の外側に輪郭線風の線文が伴うのも特徴である。さらに、永享以降圓線も消失する。凸面に瓦座固定用の横棟、凹面の両側縁にT字形の二の平瓦と軒丸瓦を固定するための縱棟を付けるのもこの頃である。中期はすべて額貼付け式段顎である。離れ砂付着位置は前期と同じである。

室町時代後期 中心飾りは268Dbなどの両脇にC字形唐草が伴わない宝珠文と272Dなどの半截菊花文が主体である。後期後半の脇区比（脇区幅×2／瓦当幅）が約0.13と、脇区幅が広くなる。瓦当貼付け式段頭が顎貼付け式段頭になる。四面の布目痕は完全になで消され、前代に凸面に付着した離れ砂は、ほとんど認められない。顎後縁のけずる比率が減少する。なお、後期末開始の慶長年間の修理時の中心飾りは（276Aのように）蓮華文か半截菊花文の退化したものになり、両脇の唐草文も単純化する。脇区比は若干大きくなる（0.13～0.14）。調整が丁寧なので確認は困難だが、平瓦の素材のタカラからの切断手法が糸切り手法からコピキ手法に変化するのもこの頃である。

江戸時代前期 蓮華系・菊花系唐草文（280C）は初期の主要瓦。元禄修理時には三葉葵唐草文（288Aa）や三宝珠唐草文（262B）がある。脇区比が0.14～0.26となり、脇区幅が一層に広くなる。すべて顎貼付け式段頭である。瓦当下縁はほとんどけずられなくなる。

江戸時代中期 菊花系唐草文（278B）を主体に、若干の宝珠唐草文（268J）があり。後半の安永年間に後期に主体となる橋唐草文（284E）が出現する。脇区比が0.35～0.40となり、脇区幅が一層広くなる。瓦当上縁以外のけずりは衰退する。

江戸時代後期 橋唐草文（384H）を主体に、宝珠唐草文（268K）、元禄修理瓦288Aaの範型の切縮め品などがある。脇区比は0.40～0.50。すべて顎貼付け式段頭である。屋根野地板への瓦の固定法が鉄線の先に結んだ釘に代わるので、釘穴が僅の小さい針金穴になる。

法量 瓦の法量の上でも時間的変化が認められる。鎌倉時代の瓦当幅は9寸～1尺、全長は1尺2寸程度である。その後、両者の値は徐々に減少し、江戸時代後期の瓦当幅は7～8寸、全長は8～9寸になる。中・近世を通じて顎の深さは、1～4.5cmの幅にある。鎌倉時代の顎幅は3～5cmで、その後次第に減少し、江戸時代後期には1～2cmとなる。瓦当湾曲比（上弧深／瓦当幅）は、鎌倉時代～室町中期が0.15～0.18、室町中期～江戸前期が0.15、江戸中期が0.13、江戸後期が0.10～0.11となり、時代とともに湾曲が弱まる。

中・近世軒平瓦拓本（1:8）

中・近世軒平瓦の法量

（佐川正敏）

薬師寺出土の二彩陶塔

平城宮跡発掘調査部

近年、平城宮北方の瀬後谷遺跡で、綠釉陶塔破片が大量に出土した。当研究所が薬師寺境内で行なった発掘調査では二彩陶塔の破片が出土している。比較のためここに紹介する。破片は2点あり、1点は高欄、1点は基壇の破片である。

高欄は、1975年に調査した十字廊北方の調査区で、赤褐色土面に掘り込まれた土壤より出土した。綠釉皿、漆器などが共伴したが、新しい遺物も含む。高さ2.4cmの斗東の上に、直径0.6cm、長さ3.4cmの架木がある。架木は、小口面をとどめており、小口面にのみ褐釉が施され、それ以外の面には綠釉がよく残る。

基壇の破片は、1988年に調査した西面回廊の調査で、包含層から出土した。綠釉を主体とし、下面のごく一部に褐釉が施される。コーナー部分の破片で、地覆と束・羽目が残る。幕は剥離するが、復原高約6cmをはかる。

いずれも灰白色の精良な胎土で軟質。胎土・焼成とも一般の三彩・二彩陶器とよく似る。綠釉を主体とした二彩であるが、褐釉はごく一部に付着するのみである。また一部の破片のみの出土であり、三彩の可能性も考慮する必要がある。



高欄は同一個体とする
とやや大きく、別個体の
基壇に取り付く高欄と考
えることもできる。

(杉山 洋)

高欄（上）・基壇（下）実大

平城京左京一条三坊出土のガラス小玉鋳型

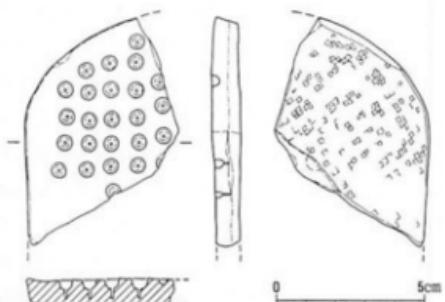
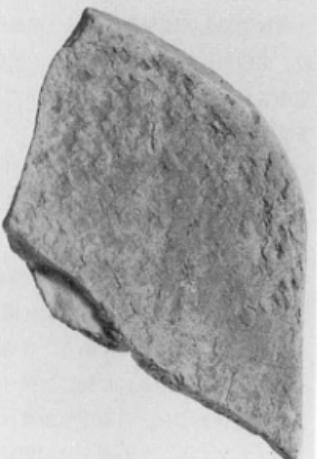
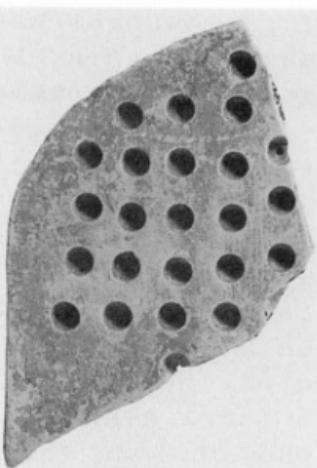
平城宮跡発掘調査部

平城京左京一条三坊十五・十六坪の溝 SD485から、1969年の調査でガラス小玉の鋳型が出土していた。当時は類例もなく、不明土製品として報告書（『平城宮発掘調査報告』VI）の記載からも漏れていたが、飛鳥藤原宮跡発掘調査部による1991年の飛鳥池の調査など、最近の調査の進展によりガラス小玉の鋳型であると判明したので、ここに改めて報告する。

鋳型は、厚さ0.7～0.9cm、残存長7.6cm、残存幅5.2cmを測る。土師質の胎土で、2枚の粘土板を貼り合わせており、断面の一部に剥離面がある。一面を丁寧になで調整で仕上げ、径5mmの半球形のくぼみが25個残る。くぼみの中央には小玉の紐通し穴の心棒を立てる径1mm弱の穴があるが、反対面までは貫通しない。もう一面には格子目叩き状の圧痕があり、その上を軽くなでている。側面は、削りによって面を作る。二次焼成による赤変は見られず、ガラスも付着していない。

左京一条三坊十五・十六坪は、奈良時代当初は二町が一体となった、園地を有する宅地であり、長屋王の作宝宮の候補地と考えられていた地である。SD485は平城宮土器IIの時期の溝で、他に工房関連遺跡の存在を示すような遺物は出土していないが、周辺に小規模な工房が存在していた可能性はある。

山内紀嗣「ガラス玉の鋳型」『天理参考館報』第4号 天理大学付属天理参考館 1991 (玉田芳英)



ガラス小玉鋳型（実測図1:2、写真1:1）

石山寺深密藏聖教の紙背文書

歴史研究室

石山寺（滋賀県大津市）には、一切經、校倉聖教、深密藏聖教、知足庵聖教などの經典、聖教、典籍類が数多く所蔵されている。それらについて、現在調査中の知足庵聖教以外は、「石山寺の研究」（石山寺文化財綜合調査団編）の一切經篇、校倉聖教・古文書篇、深密藏聖教篇上・下により、その書目の目録が公刊されている。ところで石山寺所蔵の聖教、典籍類のなかには紙背文書のあるものも含まれている。伝三昧耶戒私記紙背の越中国官倉納穀交替帳、金剛界入曼陀羅受三昧耶戒行儀紙背の周防国玖珂郡玖珂郷延喜八年戸籍や、校倉聖教の虚空藏念誦次第や一切經「附」の伝法記などの紙背文書が著名であるが、それ以外の聖教にも紙背文書のあるものがかなり存在する。

ところで、一切經、校倉聖教が江戸時代以前においてすでにそれぞれが一つの群として伝存したのに対し、深密藏聖教は、大正13年（1924）の調査において、それまで石山寺山内に存在した子院に分蔵されていた聖教が本坊に集められたが、それを一切經、薰聖教、校倉聖教などと区別するため、大屋徳城氏が深密藏聖教と命名されたものである。当時、各子院から集められた経函は111函あり、それには法輪院、宝性院、密藏院、明王院、圓乗院などの経函が含まれている。したがって深密藏聖教は、概ね函ごとに江戸時代の子院別、内容別の分類を継承しているとはいえ、各子院に別箇に伝わった聖教類の若干の混在もみられる。深密藏聖教の全容の目録は、「石山寺の研究 深密藏聖教篇上」に収録されている。

ここでは、その深密藏聖教の紙背文書のいくつかを紹介することにする。

結縁灌頂大阿闍梨作法口伝（深密藏8函28号）は、折紙2紙に書かれており、「石山寺／密藏院」朱印が両紙に捺されていて、密藏院伝存のものである。片仮名交じり文で、「一、十弟子進退事」以下が簡条書きされている。奥書はないが、鎌倉後期の書写とみられる。2紙ともに紙背文書がある。

1紙目の紙背文書は、竖紙（縦31.3×横49.4cm）に書状が書かれている。差出書きの人名は判然としないが、聖教書写側にある端裏書の「源守法橋」から源守書状とわかる。高畠庄住人右衛門三郎以下の輩の濫犯につき、沙汰人に尋ね、散状にしたがい報告する意を申し述べたものである。高畠庄は未詳である。2紙目（31.3×49.0cm）紙背には、相□書状が紙間に書かれている。内容は、音羽村専当職に関するものであり、永還の申請に任せて、専当職を安堵するように申し出したものである。音羽村は、觀応年間に石山寺領であったことが前田家所蔵文書からしられる。そこには觀応2年（1351）には音羽庄とみえ、さらに同年の4月2日の足利義詮御判御教書では、音羽庄地頭職および若狭國河崎庄、越前國主計保などが勳功の賞として充て行われている。また親元日記別録の文明6年（1474）にも「江州音羽庄」とみえている。結縁灌頂大阿闍梨作法口伝は鎌倉後期書写とみられるが、紙背文書も、年紀はないが、鎌倉後期

のものである。

密印口伝等（深13函1号）一括7点のうち、[1]～[3]に紙背文書がある。[1]～[3]はいずれも折紙に片仮名交じり文で認められ、「詔師説私記之」の奥書も共通で、同筆跡の一連のものである。[1]台蔵（28.5×51.5cm）は、内題に「台蔵」とみえ、紙背文書は天義2年（1145）3月6日に上乗坊の仰せによって、「菓子四種五合以下」の品物を進上したものである。送状に記された品物は、菓子、酒、飯、雑菜、油、酢、味噌、塩などの食品と、その煮炊き用の薪、打松、炭および運搬のための伝馬である。各品物には合点が付されている。[2][3]もまた折紙にそれぞれ阿闍梨位真言と諸印口伝の聖教が書かれており、[2]（28.1×49.6cm）の紙背には、凡末房の進上状があり、[3]（27.9×49.4cm）の紙背は、その裏紙である。[2]の進上状では、餅、小豆餅、□米、平栗、生栗、串柿の食料品と伝馬一匹が進上されている。これも[1]同様、上乗房の仰せによるものであり、進上者は凡末房である。[1][2]ともに何か法会等に必要な品々が要請されたものであろう。[3]の裏紙には、「凡末房□」とのみみえる。平栗は、大嘗祭などに供物として用いられた、栗をついて平にしたものであり、その他の品からみて仏前に供物として捧げられたものであろう。なお興米は未詳である。梗米に通じるのであろうか。

金剛經等抜書（深111函87号）には「石山寺／密藏院」朱印があり、豎紙で中央に円が描かれ、その周囲に金剛經などからの抜書を書く。室町中期書写のものである。紙背文書は折紙の書状で、丸薬など薬とその服用のことがみえる。

小野流口伝（深111函88号）の紙背文書も薬に関するもので、こちらは塗り薬の用法を示している。この書状は豎紙（32.4×54.5cm）に書かれ、端裏に墨引と差出書がある。差出書きは草名で、下の文字は「成」かとみえる。表の聖教は、小野流関係の口伝を豎紙に片仮名交じりに書かれる。金剛經等抜書は室町中期、小野流口伝は院政期書写とされる。

内題に尊勝法香薬（深111函89号）とある聖教は豎紙（30.0×50.2cm）に仮名・返点の墨点を付して書かれる。院政期書写のものである。その紙背には、書状が書かれているが本紙のみで、後欠であり、内容は明らかでない。

金剛界諸尊図様（深112函17号）は、袋縫装（28.9×24.7cm）の冊子本で首中欠損しているが、紙背に建仁2年（1202）9月9日の書状があり、鎌倉初期書写にかかる。紙背の書状は四巻の重書の返上に関するものである。さらに某法断簡（深112函21号）は断簡で1紙のみしか残存しないが、東大寺三論宗点のヲコト点が朱で付されている。紙背文書は治承2年（1178）12月1日の送状で、壇、脇机から御本尊一軀を送進している。

以上、函号の順をおって、紙背文書のあるもののうちで、主たるものを取り上げた。表の聖教も欠損のあるものであり、したがって紙背文書も断簡が少なくない。しかし院政期のものから遺存し、紙背文書として貴重である。表の聖教との関係や、現状では覗読不能な袋縫装のものなどの調査の進行とともに、今後に期待できよう。

（綾村 宏）

二ツ三ツつ、御□候、（以上、上段）

又たくひまち葉

調合仕候て進上

申候、丸葉もまへの

ことくに御用なさるへく候、

かゝる儀御座候て、

やうす御書付にて

可被下候、かけんを

進上可申候、恐惶

謹言、

霜月十五日 寿□（花押）

□以様

人々御中

〔四〕「小野流口伝」紙背文書（深山函88号）

某書状

（切封墨引）

薬献上之、旧ふく

さのものにぬりて、可令

押付候也、日ニ一度

可令付替給候、十ヶ日

許付天可令試候、

恐々謹言、

五月三日

〔草名〕
（成方）

〔六〕「金剛界諸尊図様」紙背文書

〔五〕「尊勝法香葉」紙背文書（深山函89号）

某書状（後欠）

事次候ハ細々令申候也、

先□□辺事ニ落居候歟、

□□にも延引候歟、

少々加檢算存候、第一

件事強も前々も令申事

にて候めれば、去比さにこそあなれ

口は、雖令申一定今月之中可

遂事とも不存候、返誠にも南京

下向之後、心闇に来月下旬□

之間可遂候歟、本支度ニは

南都下向以前俄出家□

人目もおそれぬ事候歟、今一

兩月延引何条事候哉、無

牴候歟と、又何令相計給也、以比趣

□□様可仰聞歟、凡ハ事外の強者

にて候ける、なれハ（草名）令申事定不

□□引候、諸事不叶心候也、為彼も

誠□□無益ハ候」とも愚意ニハ如此令

右奉送如件、

治承二年十一月一日

某書状

四卷返上之、不審事

重書候、能々可有御秘藏

候也、被□愚説之

条殊被自愛候、御記も

ゆかしく候、如何、

御出仕何比可候哉、小□□

不懸□□、恐々謹言、

建二元年九月九日

□

〔七〕「某法断」紙背文書（深山函21号）

壇一面

脇机一前

燈臺一本

閻伽桶一口在行

淨衣一領

閻伽折敷一枚丸

半疊一枚

短冊一枚供料酒

御本尊一軀

(一) 「結縁灌頂大阿闍梨作法口伝」紙背文
(深8面28号)

書

源守書狀

〔源守書狀〕
〔源守法榜〕

進上　皆悉給候□□

伝馬一疋
右進上如件、但仍
上乘房仰也、

三月五日

凡末房

御飯二石

御酒六瓶

高畠庄住人右衛門三郎

男以下輩盜犯事、右府

消息具書等下給候了、

恐々謹言、

怨相尋當庄沙汰入等、

隨散状可申入候て、且

得御意可有御被露候哉、

恐々謹言、

八月卅日　源守

○ 某書狀

音羽村專當職家茂

安堵府御下文事、永退

狀如件候、任申請

可成下之旨可令下知候哉、

可有御披露可被仰下之

旨可申入触賀候、恐々謹言、

九月十四日　相□

〔音〕

「密印口伝等」紙背文書

(深63面1号)

書

(一) 某送狀

進上　皆悉給候□□

右進上如件、但仍

上乘房仰也、

三月五日

凡末房

味曾二合

油壺箇

雜菜十五種

酢壺箇

鹽壺合

薪卅束

打松十把

炭三籠

伝馬六十毫疋

右依上乘坊仰進上如件、

天養二年三月六日

○ 凡末房餅等進上狀

餅二合

小豆餅二合

興米二合

平栗二合

生栗二合

串柿二合

○ 某書狀 (折紙)

御養生なさるへく候、

申入候、御氣養

よきやうに承間、

申入候、然者

幡□申候、寒の先にて御座候間、

なく御□候、又

たちなども、御

きうなど御ゆたん

に御入な□けやう

御つぶりの百尊

まへとも、安心(

(深11面87号)

平城京内における住宅の復原

建造物研究室

平城京内における貴族の邸宅と庶民の住宅について、各々の代表的な遺跡の復原模型の製作をおこなった。模型製作では検出した遺構にくわえ、その周辺部についても建物を想定して復原した。建物配置図には発掘区の範囲を示し、検出した建物と想定した建物を明確にした。

貴族の邸宅（左京三条二坊一・二・七・八坪 長屋王邸宅）の復原 貵族の邸宅として、長屋王の邸宅と推定される大規模な邸宅を復原した。発掘調査は1986から1989にかけておこない、その成果は『長屋王邸宅と木簡』（1991）として報告している。宅地は四町を占める京内では最大級の宅地で、特徴的なことは、宅地内を掘立柱構によっていくつかの区画に分割していることである。内部を区画する掘立柱構のうち、中心部を区画するものは屋根構造を伴ったものとし、柱穴内の礎盤に転用されていた流板の断片を参考にして流板葺とした。そして、出入口には棟門を構えた。いっぽう、中心部以外では柱上に笠木を置く簡単な形式とした。

SB4300の建つ区画は、邸内でもとくに軒瓦の出土量が多くて瓦葺建物の存在が推定されることと、SB4300が四面庇付建物であること、区画内に井戸が存在しないことより、日常的な住居空間とは異質な空間。すなわち政務・儀式をおこなう空間を想定して建物の復原をおこなった。SB4300とその前面の2棟の建物は瓦葺建物とし、SB4300は四面庇付建物であるので入母屋造とした。SB4300は床東跡が検出されているので床張建物とし、遺構では確認されていないが四面に縁を設けた。また、組物は平三斗組とし、邸内で最も格式高い形式とした。

SB4500の建つ区画は邸内で最も中心となる住居施設として復原した。SB4500は桁行7間梁間4間の南北庇付建物である。両庇付建物であるので一般的には屋根は切妻造に復原されるが、梁間が長く側面の立面が間延びするため、超一級貴族の邸宅正殿にふさわしい格を示すために

入母屋造に復原した。床東跡が検出されているので床張りとし、四面に縁を想定した。組物は法隆寺伝法堂前身建物にならって大斗肘木とし、軒の出は、SB4500よりひとまわり大きな内裏正殿の軒の出（雨落溝を確認）である7.7尺より若干短い7尺とした。架構は梁間規模が近い新薬師寺本堂にならい又首構造とした。SB4490は切妻造とし、構造はSB4500にならった。

SB4680を中心とする区画は東隣の区画に準じる住居施設として復原した。したがって、SB4680の西には、東隣の区画と同じように正殿に近接する南北棟を想定した。SB4680はSB4500

貴族の邸宅建物配置図

に準じる建物として、組物は大斗肘木、軒の出は6尺。屋根は切妻造檜皮葺に復原した。

西北の区画には、桁行が長く建物内を8つの部屋に分割している長屋形式の建物SB4800がある。この建物は宿舎もしくは家政機関の建物と推定され、この区画の建物は主として板葺に復原し、比較的上質の雑舎や倉を想定した。SB4960は雑舎としては規模が大きく、この区画の中心部にはSB4960に見合う規模の中心的な建物を想定した。これら解で囲まれた区画の東外側でも建物を検出しているが、いずれの建物とも規模が小さく、後述の庶民の家に近い形式に復原した。発掘調査を行っていない東北部には長屋王家に仕える人々の居住施設や廐・馬場を想定し、主として草葺建物を配した。

庶民の家（右京八条一坊十三・十四坪）の復原 庶民の住宅として、焼却場の建設にともなう発掘調査によって検出された奈良時代後半の小規模宅地を復原した。なお、発掘成果は『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』（1989）として報告している。西一坊大路に面する区画施設については、西一坊大路東側溝から大量の瓦が出土していることから、瓦葺築地解を復原した。十三・十四坪間の坪境小路の南側では、奈良時代の前半に築かれた築地解が存続しており、瓦出土量が少ないとから、上土解とした。坪境小路の北側と十三坪・十四坪内を東西に二分する坪内小路に面した位置では、発掘成果にしたがい掘立柱解を復原した。小路に面した宅地では、門造構が確認されている位置および、掘立柱解の柱間寸法が広くなっている位置に門を復原し、門は門柱と冠木だけの簡略な形式とした。解造構は検出されていないが、建物・井戸の配置より宅地の境界と推定される位置については、自然木を打ち込んだ簡単な柵もしくは柴垣・植込の区画施設を想定した。

それぞれの宅地は以上のような区画施設に囲まれ、
1/16町もしくは1/32町占地とする。宅地内には2棟から
3棟の掘立柱建物と1基の井戸を配する。建物は桁行3
間もしくは4間で、柱間寸法は5.5尺から7尺である。最も整った建物では片庇、床束を有する。主屋に相当する
と推定される建物は板葺とし、付属屋と推定される建物
は板葺もしくは草葺とした。板葺建物の構造は東福川から出土した部材による復原（『平城京東福川 左京九条三坊の発掘調査』1983）を参考とし、屋根構造は垂木・小舞上に板を張るものと、垂木を使用せずに流板葺とする
ものの二種を復原した。草葺建物の架構は現存する草葺
民家の架構形式でも古い形式にあたる、真東を立てて垂
木を葺降ろす形式とした。柱間装置は平安時代から鎌倉
時代の絵図類を参考とし、出入口は板扉とし、窓は突き
上げ窓もしくは、粗い連子窓とした。

（島田敏男）

庶民の家建物配置図

神戸市の歴史的建造物調査

建造物研究室

この調査は、神戸市の依頼により、市内に所在する主として近世以前の民家・寺社の建造物の遺存状況を把握するために行ったものである。神戸市の民家・寺社建築の調査としては、昭和四十六・五十年度の民家緊急調査、昭和五十三・五十四年度の近世社寺建築緊急調査、昭和五十一年度の神戸市古民家残存数分布基本調査がある。しかし前二者は兵庫県内全域を対象としたものであるため、市内の状況について充分に把握し得るほど詳細な調査が行われておらず、特に民家緊急調査に至っては報告書すら刊行されていない。また、後者についても相当数の調査が行われたようであるが、これも報告書が刊行されない今まで、平成元年になってからそのごく概要が少数部発行されたに留まっている。各研究者が個別に行っている調査もあるようだが、市内の全体的状況を把握し得る形で報告はなされていない。従って、文化財未指定の寺社・民家建築がどの程度遺存しているかも明確ではなく、その保存対策も講じられてこなかった。

今回の調査は、当初市内全域を対象とする予定であったが、北区・西区に多数の茅葺民家が遺存することがわかったので、対象地区をこの両区に限り、対象とする建築も茅葺民家とそれに密接に関わりのある寺社に限定し、瓦葺の民家などは除外した。

調査対象となった北区・西区は六甲山の北に位置し、大きく二つの山塊があってその間の谷に沿って集落が営まれている。その集落形態は一様ではなく、西区や北区淡河町のように散村の形態をとる地区と、それ以外の地区のように谷筋に沿って集村となるものがある。

調査方法 西区・北区はあわせて379平方キロに及ぶ広さを持っている。この範囲の茅葺民家及び寺社建築を洩れなく拾い出すために、1/1000または1/2500の地形図と住宅地図を併用し、まず市の担当者が隈無く境内を歩いて茅葺民家及び寺社をプロットし、これに基づいて当研究所の所員にアルバイト学生二三人を加えて二チームを作り、一棟ずつ調査に入った。調査について所有者の承諾を取っているわけではないので（実際多数の家の承諾を取ることは不可能である。）、意図を告げて可能な範囲で写真を撮影し、観察と聞き取りによって平面の概要と建設年代を推定し、その上で規模・屋根形式・屋根葺材料・間取・建築年代・改造の程度・評価・所見を表形式の調査票に記入してゆくという方法をとった。以上の方法で十一回、三十三日、二チームなので延べ五十八日をかけて両区全域の踏査を終えた。

調査結果 両区内に1156棟の茅葺民家と326棟の寺社建築の存在を確認し、その資料を収集した。

まず民家についていえば、政令指定都市神戸市内に茅葺民家がかくも多数現存すると言うことは正に驚嘆に値すると言ふべきであろう。全国的にも茅葺民家が激減してしまっている現在、この茅葺民家群は貴重な文化遺産である。もっともこれらすべてが茅葺のまま残されているわけではなく、多くはトタン板をかぶせ、軒先を切って棟瓦葺の下屋を付けてしまっている。しかし小屋組や古い茅葺屋根はトタン板の下に残されており、茅葺師が神戸市の北の吉川町にい

ることから、なお現在も茅の葺き替えが行われて茅葺屋根が維持されている。

この地域は既に知られているように、摺丹型と呼ばれる独特の妻入民家の分布する地帯であるが、別表に示すように、北区の東半部、長尾・道場・八田・有野には半数前後の妻入民家が集中的に分布するのに対し、これらより西の地区ではほぼ完全に平入民家だけが分布する地帯に変ってしまう。ただ妻入民家も一様な形態を持つのではなく、有野町南部を中心に分布するものは、所謂摺丹型とは異なる範疇に入ると見られる。

これら茅葺民家の建築年代は17世紀に遡ると推定されるものが6棟、18世紀に遡るもののが90棟にも及ぶ一方、昭和に入ってから建築されたものも180棟弱にのぼり、昭和三十年代までは確実に近世以来の伝統的形態の茅葺民家が建築され続けていたことが判明した。近世中期以前の民家が多数残ることは貴重であるが、当初形態のまま残っていることは稀で、小屋組や一部の柱材が古いというのも少なくない。北区山田町には千年家として知られる室町時代に遡る茅葺民家である箱木家（重要文化財）があるが、古い部材を極力残すというこの地区的建築的伝統の中で千年家も遺ってきたものといえよう。

寺社建築では、寺院・神社の数はほぼ同じであるが、共に西区の方が多い。これを面積の比率と対比すると、西区の方の寺社の密度が高いことになる。これは北区には山が多いことにによる。建築年代は148棟が江戸時代に入り、その内23棟は17世紀、2棟は中世に遡ると見られる。神社では農村舞台または能舞台を作うものが目立つ。これも東部と西部に分布が分かれており、農家の妻入りの分布と相俟って興味深いところである。

平成三年度はより詳細な調査を予定している。

(山岸常人)

表 地域別民家形式

石田城五島氏庭園の実測調査と修理

建造物研究室・平城宮跡発掘調査部

石田城は五島列島を支配した五島藩の本拠であり、福江島の東岸、福江市にある。1万2千石の小藩である五島藩は、この地に陣屋を置いていたが幕末にいたり海岸防備のためにこれを拡張し、堀や石垣を備えた城郭とした。北・東・南の三方を海に囲まれた海城であり、五島氏庭園はその二の丸に藩主五島盛成が営んだ隠居所である書院に東面する池泉庭である。書院とともに安政3年(1856)から5年にかけて築かれている。書院・庭園とともに、この屋敷の一郭を囲む堀や門、石垣がよく残り、石田城の中で藩政期の姿をそのままに伝える唯一の場所となっており、県立五島高等学校が建つ本丸を含めて、長崎県の史跡に指定されている。

池は東西45m、南北30mほどの大きな水面を有し、中島が3ヶ所にある。これらの護岸石組が全体に緩んできたため、1989年に福江市がその保存策を含めた調査を当研究所に依頼してきた。現況図もないことから、まず修理前の実測を行なうべく、これを敷地図と漏水状態の写真から約一週間の作業と見積った。実測に際しては池を干す必要があり、我々は池の浚渫後に現地に赴いた(第1回実測調査、1989年12月、高瀬・安田・本中・小野)。ところが、我々が考えていた以上に池が深く、その護岸は石を重ねて積み上げたまさに石積みであり、高さも1.4~2.0m前後もあった(写真)。通常、わが国の園池の護岸は一石でおさえるのを基本とし、重ねることがあってもせいぜい2、3石止まりである。本庭園の場合、少ない所で5石、多いところでは10石以上も重ねており、この石積の間にさらに木枕を打ち込み、基底部の石のすべり出しを止めている。結局、予定の一週間では半分程度しか実測できず、1990年度に残りを実測した(第2回実測調査、1990年11月、高瀬・本中・小野・杉山)。

実測の後、1990年度には護岸石組の修理も行った。水深の深い池を作るために、前述のように石を積み重ねた護岸を築いているのであるが、これらの石の自重が災いし護岸の全体的な沈

下を招いたものと思われる。これを根本的に修理するには一旦石積をすべて解体し、基盤部を補強した上で再度積み上げることが必要である。

一方、護岸の沈下は今に始まったわけではなく、築造当初から徐々に進行してきたものと思われる。護岸の堀に沿って打ち並べられた枕と、その内側に詰め込まれた石は築造当初からのものではなく、ある時点で護岸を補強し、崩壊を防ぐためになさ

護岸石積み(書院座敷から)

れた施設である可能性もある。以上のような護岸の現状であり、予算的にも根本的な修理は対応できない状況にあった。したがって、今回の修理ではこのまま放置できない危険な6ヶ所は解体・積直すこととし、残る大部分の護岸はこれ以上緩まないよう、現状保存措置を加えるにとどめた。具体的には護岸石組裏込め部の目詰まりを防ぎ、排水をよくすることと、周辺から池に流れ込む雨水が護岸の裏側に入らないように、以下の保護策を行った。護岸の沈下により空洞化している部分に裏込め栗石を補充するとともに、沈下した護岸と周囲の地盤との間に生じているすきまは石灰を加えた粘土を詰めて防水し、裏込めに水と共に土砂が流入するのを防いだ。また、護岸の根を押さえている木杭の腐朽部や不足部には新たに木杭を打ち込んだ。

護岸修理と並行して、池の導水の復原と繁茂した植栽の整理を行った。池への導水は屋敷西側の堰水を水路で導き、西岸の滝口から池へ落としていたと伝えられるが、現状では堰水の水位が下がり導水できない。幸い、福江市が堰水の補給のために設けた井戸が近くにあり、ポンプアップされたこの水をパイプで導き、石組された本来の導水路の途中に流し込むことによって復原した。このために石の沈下や抜け落ちのある水路について、不陸修正、不足石の補充を行い、目地をソイルセメントにて防水し復旧した。

来年度（1991）に修復後の石組の実測を行い、今回の一連の修理整備事業の報告書を作成する予定である。(高瀬・本中・小野)

大覺寺・大沢池（旧嵯峨院）の調査(7)

建造物研究室・平城宮跡発掘調査部・埋蔵文化財センター

1984年に開始した発掘調査も、本年度が最終年度となった。いよいよ来年度から造水の復原整備工事に着手するにあたり、名古曾淀東南方の未調査区の成果がどうしても必要となり、このたび約172m²の調査を設けて発掘調査を実施した。また、本年度から大沢池北岸の丸太杭打直し工事を開始することとなったため、これに先行して天神島西岸とその対岸に約3.5m²の調査区を2ヶ所設けて事前調査を実施した。

今回の調査で新たに検出した中世以前に属する主要造構は、園池1、溝6条、井戸状の湧泉1、木製の構1等である。名古曾淀東南方で検出した鎌倉～室町時代の石敷園池は、東西約7.5m、南北約8mの規模を持ち、2時期に分かれる。当初の池SG140Aは、調査区東西隅において部分的に検出したにとどまる。深さ約0.5～0.6mあり、底面は径約5cmの砾で化粧する。この池に対応すると思われる景石が、池の西北岸に3石青灰色粘質土の地山に据わって遺存する。SG140Aの西端中央部からは石組暗渠SD36が、またSG140Aの西南隅からは南にSD134が連続する。SD36は1984年度調査で検出した蛇行石組暗渠に連なり、SG140Aから石組暗渠への接続点に水の浄水を意図したものと思われる木組の構SX135がある。SD36の蓋石の上には土砂の流入防止のためか、劍頭紋の軒平瓦を含む平瓦を流れの方向に沿って敷き詰めている。削平されて残存しないが、暗渠の上には築山が築かれていた可能性がある。また園渠部分に優美な曲線デザインを採用しているのは、SD36が造水のような庭園的な施設として開削されたことをうかがわせるが、目に触れない暗渠部分までわざわざ蛇行させているのは不可解である。暗渠の蛇行の曲率に比して流積がきわめて小さいため、おそらく流水土砂によって早晚つまってしまったであろう。したがって、暗渠の存続期間はきわめて短期間であった可能性がある。また、SD36開削当初は全区間開渠で、後に下流部を暗渠にして築山を造成した可能性も否定できない。SG140Bは、SG140Aが半ば埋まった状況に該当する。SG140Bの南辺を東南から西北の方向

SG140全景（西南から）

SX135・SD36（北から）

に向かってSD143が斜行してSD33に流れ込む。SG140CはSG140Bの外周部に盛土を行って造成している。汀線付近に漏水防止のために黄灰色および青灰色粘土を張り付け、それより外周部を厚さ約10cmの暗灰色砂質土で整地している。池全体に10cm大の玉石をばらまいたように敷き詰め、所々に景石を補充する。水深はきわめて浅い。

天神島の西岸の調査区では、平安時代前期の土器片を多量に含む整地土が現大沢池中に向かって下り、この上面に平安時代の池中堆積土と思われる黒灰色粘質土が堆積している。したがって両調査区に挟まれた区域は、嵯峨院造営時には園池（SG01・旧大沢池）であったことが確実である。85年度調査では、嵯峨院造営当初は天神島が陸続きであったことが推定されており、今調査区の成果とともに、天神島はもともと出島状に北から大沢池へと突出した形状をなし、東西両側が入り江状に入りこんでいたことが想定される。

以上のように本年度調査の結果、中世に名古曾瀧の周辺には石敷の小さな園池が造られていることが判明し、復原整備に際して新たな知見を提供することとなった。とりわけ最終期のSG140Cは拳大の玉石で覆われ水深もきわめて浅く、石敷の部分全体が冠水して圓池を形成するというよりも、瀧の前面に州浜を造って水辺を修景するという特徴を持つ。おそらく、山岳とそこから落ちる瀧、そして平地部の河原のイメージを意図したものであろう。また、SG140と同時期のものとみられる蛇行石組暗渠SD36も注目すべき遺構である。SD36をはさんで、SG140と下流部に位置するSG32の2つの圓池が並存し、SD36の上には築山が築かれていた可能性が高い。水面と山と瀧とが織りなす景觀は、きわめて変化に富んだものであったに違いない。これらの遺構は、出土遺物から判断して13~14世紀に後宇多法皇によって造営された「中御所」に伴うものである。

（本中 真）

飛鳥資料館の特別展示

飛鳥資料館

特別展示「レンズを通した飛鳥」 当館の展示の特色の一つは、展示品の後に大パネルを立て、作品を効果的に引き立たせるところにある。その裏方役を主人公にした企画である。全体を①実大の飛鳥、②立体の飛鳥、③作家の飛鳥の三部構成にした、実大の飛鳥では山田寺回廊の出土状況を床貼りに展示し、その上を入館者が歩いて、足下の写真を見てもらった。立体の飛鳥は、飛鳥の夜明けから、二上山のサンセットまでの番組を作成し、地階講堂を3D(立体映像)上映館とした。博物館施設では最初の3D製作となった。作家の作品は、入江泰吉氏、井上博道氏による飛鳥の風景を展示了。さらに井上直夫所員による労作「光と影の飛鳥」の作品集も加わった。図録に代わって、当館のイメージとなっている「復原・万葉の世界」を絵はがきにした。

特別展示「日本書紀を掘る」 飛鳥の発掘は、日本書紀をよりどころとする古典考古学である。日本書紀とかかわりのある出土品、伝世品をピックアップして、当館の得意とする復原のディスプレーを試みた。石人像の欠失部分を復原し、饗宴場での噴水展示をした。また「阿不幾乃山陵記」をもとに、天武・持統陵の石室内部を再現した。原色と迫力に富み、強烈に視覚に訴えた。山田寺仏頭に金箔を貼り往時の化粧にもどした。これらは、主として館員の工作によるところが多かったが、石人像については、左野勝司氏の製作と寄贈があった。なお、本展は、当館開館15周年記念展として、財飛鳥保存財團と共に催した。

(猪熊兼勝)



動物遺存体の調査(7)

埋蔵文化財センター

本年度に依頼を受けて行った動物遺存体の調査には、滋賀県栗津湖底道路の現地調査および動物遺存体の分析、兵庫県但馬国府推定地出土の動物遺存体の分析などがある。

1. 滋賀県大塚栗津湖底遺跡の調査

御滋賀県文化財保護協会の依頼を受け、栗津湖底道路の発掘調査に参加した。遺跡は縄文早期の包含層と縄文中期初頭の貝塚および植物層が主体であった。遺跡は現湖水面より約2mほどの湖底に広がり、貝塚部はセタシジミを中心とした貝層と、トチ、ドングリ類、クルミなどを主体とする植物層、砂礫層などが互層となって形成されている。この遺跡は琵琶湖の水位の上昇によって水没したため、陸上の遺跡では残りにくい木器や食料となった堅果類などの有機遺物が豊富に残されていた。貝塚の内部および、下層には堅果類を中心とした純植物層が発達し、主体はトチとドングリ類であった。近畿地方でトチのアクリ抜き技術が普及したのは、縄文後期以降であったといわれていたが、この発掘により、中期初頭には高度なトチのアクリ抜き技術が普及していた事を明らかにできた。動物遺存体は、イノシシ、ニホンジカ、ニホンザル、タヌキ、イヌ、ノウサギなどの哺乳類と、スッポン、そして、コイ、ナマズ類、ギギ類などの魚類があった。現在、動植物食の比重と生業の季節性を明かにすることを目標に整理分析中である。(伊庭功ほか、「栗津湖底遺跡の調査」『日本考古学協会第57回総会研究発表要旨』21-24)

2. 但馬国府推定地の調査

兵庫県教育委員会の依頼で、日高町但馬国府推定地出土動物遺存体の分析を行った。平安時代から中世にかけての溝から出土したのは、マダイ、イヌ、ウシ、ウマ、ヒトで、骨はすべて散乱状態であった。人骨以外は、出土部位が偏ることと解体痕などから、皮や肉を取った後に投棄されたことは明白である。人骨も完全なものはない。その関節部近くにはイヌの噛み跡が多く残る。絵巻物や「往生要集」に見られるように、死後、埋葬もされず放置され、犬や鳥にかじられながら、こうした流路に打ち捨てられていた人のいたことも、古代から中世にかけて

の社会の一画面を語っているのだろう。

松井章1992(予定)「但馬国府推定地出土の動物遺存体」『但馬国府推定地発掘調査報告』兵庫県教委(松井章)

写真は大塚栗津湖底遺跡(南東から)

金銅製鞍金具のさび取り技法

埋蔵文化センター

金銅製品の鍍金層には、無数の空隙がある。また、亀裂や傷があるとそこから銅成分が溶出し、やがて鍍全面を被覆してしまう。鍍全面を覆い隠す銅さびを除去するには、二通りの方法が考えられてきたが、いずれにも問題があり、実用化にはいたっていない。ひとつは、精巧な小型グラインダーを使って削り落とす方法である。他のひとつは、化学薬品で銅さびを溶かす方法である。前者の機械的な方法では、鍍金層を傷つけることなく、さびを取るのは容易ではない。後者では、使用した薬品が鍍金層を通り抜けて内部に浸透すると、さびのみならず、製品自体をも溶かしかねない。細い溝に埋まるさびをはじめ、生成状態の異なる各種のさびを細大となく、しかも鍍金層を傷つけずに除去するには、やはり、薬品処理するのが合理的である。このたび、薬品が内部に浸透しないように、吸水性の物質を使って処理する方法を考案した。

アクリル酸とビニールアルコールの共重合体からなる高吸水性物質は、水と接触すると短時間のうちに吸水し膨潤する。しかも、いったん吸収された水は保持されたままで、圧力を加えても離脱しない。これに薬品をしみこませてペースト状にし、さびの上にのせる。薬品は、さびの表面部分でのみ反応し、しかも、遺物内部にしみだすことはない。

①銅さびを溶かすには、醋酸の数パーセント水溶液を使用する。②高吸水性物質に吸水させ、耳たぶ程度の固さのペースト状にし、さびの上にのせる。③10分程度の短い時間放置したあと、すみやかに流水で丁寧に洗い落す。さらに、蒸留水に漬けて洗浄する。この操作は、できる限り短時間のうちに処理するようにする。次に、④無水アルコールに浸して完全脱水する。脱水後、真空乾燥する。

以上の操作を何回となく繰り返すことによって、鍍全面を覆う銅さびをごく薄い層状に、一層ずつ剥ぐようにして除去する。なお、下の写真は、藤ノ木古墳出土の鞍金具（後輪の部分）の錆青さびを取り除く前後を示す。

(沢田・肥塚・村上)

さび取り前

さび取り後

木器集成図録の作成

埋蔵文化財センター

近畿各府県の御協力を得て1985年3月に刊行した「木器集成図録 近畿古代篇」にひきつづき、「同 近畿原始篇」の編集を進めている。1990年度までに、図版(201枚)の製図、収録した木器2480点に関する出土遺構・年代・法量・出典などの一覧表化、収録木器が出土した遺跡の解説編集を完了し、工具・農具などの項目ごとの解説執筆に着手した。体系的な解説を加えようすると、意外と基本的な問題が解決していないことに気付き、新たな事実も判明する。以下、その一例として、近畿地方における縄文—古墳時代の斧柄についての知見を示す。

縄文—古墳時代の斧柄を、装着した斧身に即して分類すると、磨製石斧柄(1)、大型始刀石斧柄(2~4)、柱状片刃石斧柄(7~8)、扁平片刃石斧柄(9)、板状鉄斧柄(5~10)、袋状鉄斧柄(6~11~12)に大別できる。1~6は直柄縱斧で、1は縄文晚期、2は弥生I~中期、3~4~6は弥生II~V期、5は弥生V期~4世紀に属し、直柄頭部の型式変遷がたどれる。1~5は伐採斧で、柄の全長は60cm弱~90cm。これに対し、加工斧である7~8(弥生I~III期)や9~10(弥生I期~4世紀)は全長60cm以下で、とくに7~8は50cm前後~60cm、9~10は50~60cm、40cm前後、30cm以下の3群に分かれ。すなわち、弥生I期~4世紀における膝柄横斧(加工斧)は、柄の長さで大・中・小に機能分化していたのである。

古墳時代に斧身は袋状鉄斧に統一される。その柄は横斧用(11)と縱斧用(12)とがあるが、いずれも膝柄で、全長30cm以下の小型品から、90cm弱の超大型品まである。すなわち、石斧では様々な形態の斧身が各種の柄に装着され、かつ柄の長さでも機能が分化していたのに対し、斧身が袋状鉄斧で統一されると、柄も膝柄一辺倒になり、法量差のみが機能分化を果す。

なお、斧身を欠く扁平片刃石斧柄(9)と板状鉄斧の膝柄(10)とを厳密に区別するのは難しい。しかし、斧身がのる装着面の長さは、時代が降るとともに長大化する(右表)。扁平片刃石斧の身を長くしても折れてしまうが、板状鉄斧にその恐れはなく、事実、長大な板状鉄斧も少なくない。つまり右表にみる装着面の長大化現象は、扁平片刃石斧から板状鉄斧への変遷が、近畿地方の弥生時代を通じて、急激ではなく、次第に進行したことを見ている。(上原真人)

地中レーダーによる遺跡探査

埋蔵文化財センター

地中レーダー探査は遺跡探査に使われる各種方法の内では新しく、応用が始まってからまだ10年ほどである。しかし、他の方法と比べて測定の速度が速く、しかも現場で即時に結果を提示できるという特異な点から、遺跡への応用も広がりつつある。しかし、利用する考古学的側では、これの測定原理や方法あるいは電波についての知識が少ないためか、有効性と限界が正確に理解されていない部分もある。

レーダー探査では電波を地中へ送り込み、それが反射して帰ってくるものを反射の強度に応じて、白黒の濃淡や色の違いとして表現するのが普通である。電波を送信したり受信するにはアンテナを用いる。アンテナは車輪で支える方式が多いが、ソリのような台を作りそれに載せて移動するやり方もある。

アンテナで受信した信号は、制御部へ送られ映像化して見ると同時に記録する。映像表示の主流はテレビ画面のような色モニターであるが、ファックスペーパーによる白黒もある。どちらの方式にしても、現地での映像は測定の参考として作業時に見ることに目的があり、いわゆる画像処理やデータ処理などは室内へ戻ってから、時間をかけておこなうのが普通である。映像の記録にはテープレコーダーを用いる。

レーダー探査では次のような点を知っておく必要がある。まず、アンテナから発射される電波の広がりである。アンテナの進行方向と横方向では広がりの程度が違うが、一般には90度以上という広い角度を持っている。したがって、もし何らかの対象物が地下にあった場合、アンテナがその上に達する手前から、弱いながらも反射を受けことになり表示する。単体の金属パイプなどが、放物線を描いた映像となるのはそのためである。

また、現在使用されているレーダーはパルス波、すなわち電磁エネルギー圧縮した形で発射する方式なので、その波が地層境界や「異物」にあたると波は振動をひきおこす。測定した映像中に並行な帯状のシマ目が表れるのは、この振動がもたらすもので地層が何層にもあるわけではない。レーダー探査で得られるのは疑似的な地層断面なのである。

パルスレーダーでは、一個のアンテナから複数の周波数の電波を出せない。したがって、探査の目的に応じて、適切なアンテナを選ぶことになる。一般的にいえば、高い周波数のものはものを見分ける能力、すなわち分解能が優り細部まで識別可能だが、深い層位まで探査できない。低い周波数は深い層位まで到達できるが分解能は劣る。

実際の測定は以上のような点に注意しながらおこなう。しかし、通常はアンテナを移動させた軌跡における、ある幅を持った地層の疑似的な断面を得るだけである。もし、遺構の平面的な広がりを知りたい場合には、各々の測線における「断面」をもとに平面図をおこす作業が必要となる。発掘現場における実測の要領で、方眼紙などにプロットするのである。このような

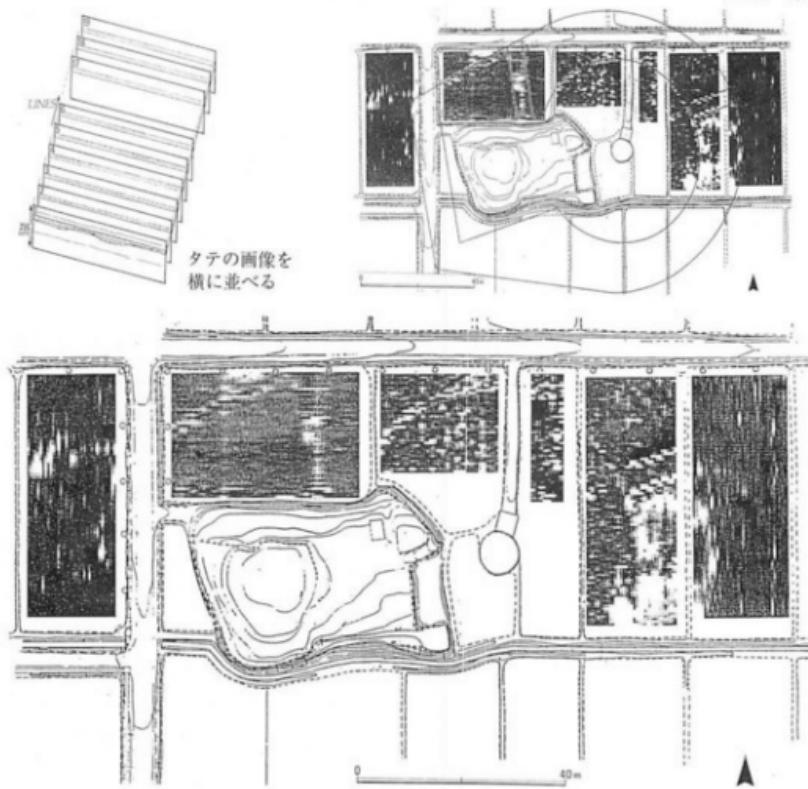
作業を、計算機を利用して作成しようとするのがレーダー「平面図」である。

レーダー平面図では、まず、各測線の断面を計算機の中で横に並べておき、各々の断面における同じ深さ（時間）に対応する反射強度を数値データに直す。その数値を平面におき、反射強度に応じて色をつけたり白黒の濃淡にする。

平面図を作成した一例として、岐阜県大垣市にある長塚古墳を紹介する。ここでは周濠、後円部とともに現在水田となっていて、本来の規模が不明のため探査によって推定する目的であった。周濠の範囲と形態、後円部の規模とやや偏平な平面形が読み取れるほかに、周濠中に2ヶ所ある陸橋が明かである。探査の結果は試掘調査によって確認された。

考古学調査では遺構のタテすなわち土層断面の情報のみならず、平面的広がりや形態のヨコの情報も要求される。レーダー平面の作成はそのような要求に応える可能性を持つものとして、さらに将来研究する必要があるであろう。

(西村 康)



岐阜県大垣市・長塚古墳地中レーダー「平面図」

仏像のデジタルマッピング

埋蔵文化財センター

奈良国立文化財研究所はこれまでに仏像の写真測量図化に取り組み、多くの成果をあげてきた。しかしこれらはいずれもアナログ図化機によるものである。先年、当研究所が導入した解析図化機（WILD AC-1）によって仏像のデジタル図化を試みたので、その結果を報告する。

仏像のアナログ図化と、デジタル図化の違いは、前者が、オペレータのハンドルの動きを製図機に伝え、製図紙の上に直接描画し、成果品はその図が唯一であるのに対し、後者は、オペレータのハンドルの動きを座標値として、属性を付加した上でコンピュータに蓄積することにある。画像としてそのデータを出力するのは、自動製図機でも、グラフィックディスプレイ上でもよい。もちろん繰り返し出力することも可能である。今回、TEKTRONIX のグラフィックカラー画面上に、等高線ごとに色をかえてリアルタイムで1次出力した。オペレータが図化機内の立体模像上の等しい奥行き上を、メスマーカー (measuring mark) でトレースすることは、アナログ図化と同様であるが、直接描画台に出力せずグラフィック画面上に描いてゆく。オペレータは絶えず画面を注視し、不都合な部分（等高線が重なる、あるいは平行投影で実際は見えない部分を描画してしまう）を画面上でデバッグしながら修正描画する。つまり、図化しながら編集作業 (edit) もあわせておこなうこととなる。

今回モデルに選定した仏像は、三重県史編纂室の依頼を受け、平安後期の作とされる三重県多気町にある重要文化財近長谷寺十一面觀音像である。この觀音像は、像高が8mと巨大であり、さらに江戸期に奈良長谷寺の長谷觀音を意識して、宝冠、理珞、錫杖などが補加されている。これを、地元と美術院の全面的な協力を得て取り外し撮影した。取り外し作業は、まず像の回りに足場を組み立て慎重に飾品をはずす。その後、写真測量用に足場を組み直し撮影するという工程を踏む。撮影後は、壊れていた部分を応急修理した上、再度足場を組み直して復旧するという大作業であった。

図化仕様は、センター間隔が2.5mm、データ採取の間隔 (distance interval) が実大仏像上の2mm、基本図化縮尺1/5とした。データ採取の間隔とは、等高線を描画しながら自動的にx、y (z値は等高線なので不变) 座標をコンピュータに記録する間隔である。したがってデータ量は膨大なものとなり、頭部（十一面頭仏を含めて）だけでも20ファイル（1ファイル2メガバイト）、肩、胸、両手両足など合わせて32ファイルとなった。図化に要した日数は、ベテランのオペレータが1人でおおよそ30日である。しかし、先にも述べたようにエジットしながらの図化であり、校正もトレース（清絵）も必要ない。トータルでは時間短縮されたといつてもよい。また、直接スクライプ図化（不透明材を塗布したフィルムベースをカッターで不透明材を削りながらネガ原図を描画する）も可能で、切れのよい線の版下ができる。

さらに、デジタルマッピングの利点は、出力図の縮尺が自由に選べることにある。さきに、

基本縮尺という表現を使ったが、グラフィック画面上では1:1原寸で描画する。これはコンタの重なり具合をチェックしやすくするためであり、瞬時にホットキーで全体図に切り替えることもできる。1:1の図化にも耐える原図（データ群）が仕上がるわけである。あと、好みの縮尺を選んで出力すればよい。小さい縮尺を選んでセンター・ラインが混みすぎる場合は、1本おきに出力するなど自由である。データは、マグネットテープに保管しており、再度図化する場合は、テープよりディスクにデータを戻して作業すればよい。ただ、このくらいのデータ量を自動製図機で図化出力するには、出力時間、20時間をする。

今後、視点をかえた鳥瞰図変換、任意の線上での断面図作成などデータの加工も試みたい。

（木全敬藏、伊東太作、牛嶋茂）

平城宮跡の整備

庶務部・平城宮跡発掘調査部

1990年に実施した宮跡整備は、宮内省西南殿復原、宮内省南殿第1殿屋根葺替、朱雀門基壇復原、第2次朝堂院整備、兵部省地区整備、内裏井戸跡現寸模型補修、整備棟周辺外構整備、宮跡外灯・動力設備取設、水位観測孔設置、構内道路撤去、旧整備棟等撤去などを行った。

宮内省西南殿復原 1989年度から2ヶ年計画で実施した工事で、今年度は扉等の建具、壁、土壁及び外構整備を行い復原を完成了。(A)

宮内省南殿第1殿屋根葺替 南殿第1殿は1973年度に木造・平屋建・檜皮葺で復原整備を行ったものであるが、その後18年を経過し屋根の老朽や損傷が目立つようになり、雨漏りも発生するようになっていた。そこで第1殿の檜皮葺屋根の全面葺替えを行った。(B)

朱雀門基壇復原 6ヶ年工事の2年度目にあたり、基壇の軀体工事を完了するとともに、一部化粧石材の購入を行った。軀体については数年来の調査・研究の結果、基壇全面積をカバーするベタ基礎工法が最適であるとの結論から、二重スラブの間を柱筋を通して梁で連結する方式をとり、梁の交点である柱位置には一辺80cm角の柱形を入れた。柱形の中央には周囲の鉄骨と緊結した直径40cmの鉄管を通し将来初重軸部を鉄骨補強する際にそなえた。主体構造は鉄骨鉄筋コンクリートとし、新たに開発された中性化緩慢を主とする高耐久性コンクリートを用いた。

一方、化粧石材は今まで平城宮で使っていた觀音下石に換えて、同じ凝灰岩ではあるが、やや硬質で磨滅が少なく凍害にも強い滝ヶ原石にした。ただ色調が觀音下石より白っぽいというくらいがある。来年度は残余石材の購入とその積上げ作業を行う予定。(C)

第2次朝堂院整備 第2次朝堂院十二堂地区は、1966年度に奈良県が十二堂の基壇部分に盛土・張芝・朝庭部に平面張芝と玉砂利敷の園路、築地部分に盛土と桜や松植栽などの整備を行い現在に至っている。これらの整備は発掘調査を行わず、土壤状に残っていた建物遺構をもと



平城宮跡整備位置図

にその位置・規模等を推定し、復原表示したものであった。第2次大極殿地区に統いて1984年度から第2次朝堂院地区東半部の発掘調査が北から順次行われ、1989年度までに東第三堂までの調査が終了した。その結果、朝堂地区においても下層の掘立柱建物と上層の基壇建物の二期の朝堂を確認するとともに、新たに朝庭域において三時期にわたる大嘗宮遺構を検出した。

今回の整備はこれらの新しい調査結果

をもとに十二堂院の北半部について再整備を行ったものである。その基本を以下に示す。

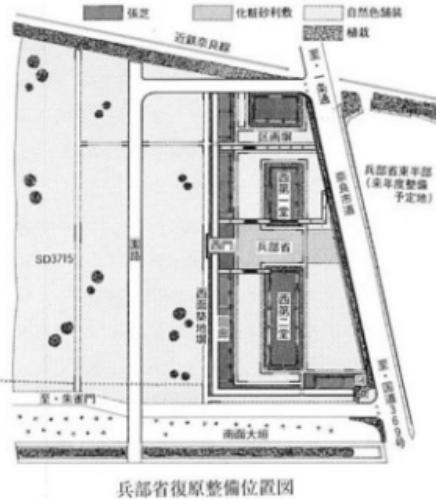
- ① 朝堂は上層の基壇建物のみを表示し、下層の掘立柱建物は表示しない。
- ② 東側の発掘済の朝堂は土盛りを発掘前の状態に戻し芝を張り、その四周に基壇規模を表す凝灰岩縁石を巡らす。西側の朝堂を表示している盛土・張芝は従前どおりとする。
- ③ 朝廷は本来であれば一面バラス敷の硬い広場となるが、芝生を用いた朝堂の柔らかい表示とのバランス、歩き易さ、炎天下の照り返し等を考慮し従前同様な芝生を敷くこととした。
- ④ ただし、朝廷域は東西110m、南北180mもの広さがあり、平坦な芝生広場は即、野球場と化してしまう。かといって、野球がしにくくなるよう点々と灌木を植えるのも広場本来の形から離れるし、かつ、その広がりも実感しにくい。一方、予想だにしなかった大嘗宮の遺構をなんらかの形で広場の中に表現したいという要求もあった。この二つの要求を同時にかなえる手として芝生ブロックを用いて大嘗宮の平面を表す方法を考えた。大嘗宮は第Ⅱ期の遺構を表現することとし、建物の外画線と堀はレンガ色の、建物内部は灰色の芝生ブロックを用いた。

兵部省の復原整備 平城宮跡第175、205、206次調査の成果に基いて、第二次朝堂院西南方の兵部省跡地の復原整備を実施した。兵部省は一辺約74mの正方形の区画を築地堀が囲み、その中を北1/3と南2/3に区分する区画堀が横断する。区画堀の北には礎石建物東西棟が3棟一列に並び、南側には中央の広場を開んで礎石建物の南北棟が東西に2棟づつ並び建つ。現状ではこの区画の北端付近を近鉄線が横断し、中央部西半分の復原整備事業を実施した。以下の4点を復原整備の指針とした。

- 1) 通過する電車、自動車の車窓からの短時間観察でも強い印象を与えるデザイン。
- 2) 市道に分断されているが一つの区画であることを強調するデザイン
- 3) 出土した礎石の再利用。
- 4) 小中学生の通学路の設置(E)

内裏井戸跡現寸模型補修 1976年度に据付けを行っていた内裏井戸跡の原寸模型が、その後の経年により、主要部材であるプラスチック部の劣化が目立ち、破損やクラック及び退色が著しくなってきた。そこでエボキシ樹脂による穴の修理、ひび・目地及びFRP表面の強化等を行い、全面に彩色を施した。(F)

整備棟周辺外構整備 平城宮跡地の日常管理作業の基地となる整備棟の建設を昨年度完成した



兵部省復原整備位置図

のに伴い、今年度はこの基地外周の開墾及び門、トラクター等の車両通行路舗装、排水路整備及び緑化工事を行った。特に緑化については、資料館や宮内見学路からの景観を考慮し、出来るだけ整備棟等の建物類が遮へい出来るよう整備棟南部に植栽を集中させた。なお、フェンス沿いの生垣を除き、中高木は宮内の苗圃より移植を行った。(G)

宮跡南辺部外灯・動力設備取設 平城宮跡南辺部の整備は、南面大垣・二条大路の復原表示を完成し、朱雀門基壇復原や兵部省地区整備に着手したことにより、この地区的外灯等の整備を行うこととし、近鉄線南側地区における電力の引込み及び外灯の設置を行った。

電源は若大義門東側の市道脇より宮内への引込みを行い、今年度に復原整備を行った兵部省西部地区内の苑路沿いを中心に、玉手門から朱雀門に至る仮設道路沿いを含め計8基の水銀灯を設置した。なお、今後の発掘や整備の計画をも考慮し、発掘調査用電源や水銀灯の増設をも容易にするため、管路の設置を行った。

今回設置した水銀灯は、電圧200V出力200Wのもので、投石等により球を破壊されても雨水等による故障の起きにくい改良型のものを採用したが、外観は従来のものと同形のものとした。内裏苑路舗装 第209、210次発掘調査を実施するために撤去した内裏地区内の構内道路跡地について、見学者用苑路として道幅を狭め(2.5m)、脱色アスファルトを用い延長211.6mについて自然色舗装を施した。この苑路下には、従来排水暗渠が通り、そのため苑路高をさげることができず、内裏地区整備レベルの南北間に差を残したままの結果となった。

第1次朝堂院説明板設置 第1次朝堂院南門に第1次大極殿・朝堂院の説明板を設置した。説明板はこの地区の復原鳥瞰図(1,800×900)と説明文(600×900)の2枚をいずれも陶板とし、凝灰岩切石製の台に貼付けを行った。

水位観測孔設置 現在平城宮跡内に36基の水位観測孔を設置しているが、宮跡東南部に観測孔が不足していることと、東院地区で2基が破損し観測不能となっていることから、東南隅部に2基、東院地区に2基の観測孔を設置した。

その他 第1次大極殿竜尾壇確認のための第209、210次発掘調査を実施するに当たり、第1次大極殿院地区および内裏地区にあった構内道路(幅4m、コンクリート版舗装)を撤去した。この地は、現在継続している第1次大極殿整備のための復原調査研究の一環として実施したものであるが、既存の構内道路がこの地区の重要造構である竜尾壇上を通過しており、いずれにしても将来の整備には支障となるため撤去することとした。なお、この構内道路の撤去に先立ち、昨年度に第一次大極殿院および内裏地区南部を東西に貫通する構内道路を造成済みである。

西曲輪復原	曲輪屋根葺替	朱雀門基壇	第2次朝堂院	兵部省西部	内裏戸口補修	整備棟周辺	外灯動力設備	内裏苑路舗装	朝堂院説明板	水位観測孔
198.2 m ²	212.9 m ²	338 m ²	19,530 m ²	5,930 m ²	106 m ²	8,229 m ²	灯8基外	529 m ²	1基	4基
千円	15,924	84,769	36,927	70,390	3,554	29,149	14,214	5,407	721	1,082

海外活動報告

国際会議出席報告

4月5, 6, 7日に英国エクセター大学で行われた The Prehistoric Society（先史学会）総会に文部省国際研究集会派遣研究員として出席し、発表を行った。総会のテーマは“Wetland Revolution in Prehistory”で、筆者は「日本の低湿地遺跡」という題で発表を行った。これまで、日本の大規模発掘が海外に紹介されることがなかったので、琵琶湖の栗津湖底遺跡、河内平野の近畿自動車道関連調査、山形県押出遺跡などの発表は聴衆に驚きを与えたようであった。会議の後、アイルランドの泥炭遺跡の見学会に参加して保存状態に恵まれた新石器時代から鉄器時代にかけての集落遺跡とそこから伸びる木道を実見することができた。筆者の発表の内容は、1992年の“Proceedings of the Prehistoric Society”に所収予定である。 （松井 章）

1990年7月23日から8月12日までソ連アカデミア歴史・言語・哲学研究所（A. P. デレビヤンコ所長）主催の「北・中央・東アジアとアメリカの旧石器時代の編年学国際会議」に出席し、発表した。フランス、ドイツ、アメリカ、カナダ、インド、中国、韓国などの研究者の参加があった。ノボシビルスクで5日間の研究発表が地域別に行われた。石器研究を中心にせざるを得ない日本人にとってドイツの原人の住居跡や北アメリカのマンモスの糞の話は、生活復元のイメージをふくらませる好材料であった。その後の二週間のエクスカーションは、アルタイ山脈北麓、エニセイ川流域、バイカル湖南岸の3コースがあり、私はアルタイのコースに参加了。夏ということもあり、各コース沿いでは研究所の発掘が数多く実施されており、そして現場や遺物が直接観察できる便宜が与えられた。とくにアルタイはソ連旧石器の重点フィールドであり、ゴルノ・アルタイツクの南にあるデニソワ洞穴の付近に調査基地が設けられている。今回のエクスカーションでこの未開放地に外国人が大勢来るとあって、約1年前から数棟のバンガロー、サウナ、そして橋などの建設が進められてきたそうである。とにかく、ソ連考古学始まって以来のイベントであるので、この時は各所で大サービスに浴することができた。オカラニコフ洞穴やデニソワ洞穴などの今から3~4万年前の中前期旧石器時代末の資料（ルヴァロアポイントやムステリアンポイント）を観察しながら実測できた。西アジアやヨーロッパと直接つながるこれらの技術の拡散を理解するためにも、今後アルタイ山脈南麓の中国新疆ウイグル自治区での洞穴遺跡などの多層遺跡の発見と北麓との対比が望まれよう。 （佐川正敏）

1990年6月13日から6月24日まで、文部省国際研究集会派遣研究員として、イギリスの大英博物館主催の国際会議「金属文化財の表面着色と表面加飾」に参加した。古代から製作された金属文化財の表面装飾技法を考古学、歴史、技術史、美学・美術史的観点から総合的に捉え直すことを目的として開催された、たいへんユニークな国際会議であった。世界13ヶ国総勢約250名の参加者があった。私の発表題目は、「日本の伝統的合金」。最新の表面分析手法を用い

て、日本の近世において確立された金属表面着色技法のメカニズムのキャラクタリゼーションを行い、完成度の高い技術水準が非常に簡素な方法によって生み出されたことを紹介した。近代西洋科学の本格的な導入以前に、手作業による経験の積み重ねから生み出された日本の伝統的金属着色技法は、各国から参加した研究者の注目を集めた。特に「赤銅（しゃくどう）」については、古代ギリシャ・ローマ、さらには中世インドやチベットにその類型を求める、「シャクドウ・タイプ」として汎世界的な視野で捉えようとする機運が生まれていることは喜ばしいことであった。国際会議のあと、ロンドン市内のロンドン大学、ヴィクトリア・アルバート博物館、さらにはベルギー王立文化財研究所に立ち寄り、金属文化財の材質研究と保存法について討論をする機会を得た。

（村上 隆）

海外調査研究

アンコール遺跡群の調査 1991年3月に上智大学が主体となって組織した第五次アンコール遺跡研究・国際調査団に加わって、三週間カンボジアに行き、アンコール遺跡群の調査を行った。

第五次アンコール遺跡群調査団は、1. アンコール遺跡群のうちバンテアイ・クデイの保存計画を策定するための調査、2. プノンペン芸術工科大学の学生の現地研修、3. 遺跡の保存のための現況目録作成、を主な目的とした。いずれの作業も、本格的保存・修復のための基礎的な予備調査である。

私はバンテアイクデイでの発掘調査を担当した。発掘調査と言っても調査区は幅2m、長さ15m、調査期間は10日間だから、試掘して様子を探る調査である。発掘区は前柱殿・側柱殿と呼ぶ二つの建物の間で、二つの建物の関係を知ることを目的とした。調査の結果、第二次大戦後、フランス極東学院が行なった修復の際に基壇周辺を掘り下げていること、瓦片が出土しないため付近に瓦葺建物がないこと、などが分かった。本格的で系統的な発掘調査はアンコール遺跡群では少なく、地上に構築物が残っていない遺構が存在している可能性があり、将来本格的な発掘調査の必要性とを痛感した。研究や修復を本格的に行なうには、短期間の滞在では到底対応できず、研究・修復機関を設けて長期間滞在する必要があろう。

発掘調査と並行して、多くの遺跡群を観察した。アンコール遺跡群と言うとアンコールワットが著名だが、同等規模の遺跡が數十はある。この地区がクメール文化の宝庫の觀がある。建築として見ると、考えなければならない問題が未解決のままである。遺跡が多く、研究の進展によってクメール文明の解明に向けて期待がふくらむ。修復が一時途絶えている遺跡、修復が未着手の遺跡があり、修復が施された遺跡でも、修復後の様子が安定している遺跡や再修復を必要とする遺跡など、修復という視点だけから考えても複雑で多様な問題がある。（上野邦一）

貴州トン族の高床住居と集落構成に関する調査と研究 貴州トン族住居調査委員会（主査・田中淡京都大学助教授）では、1988年度以来、住宅総合研究財團の助成をうけて、中国貴州東南地域におけるトン（侗）族の高床住居と集落に関する調査と研究をつづけてきた。88～89年度に実施した第1～2調査では、黔東南苗族侗族自治州を広域的に踏査し、トン族のほかミャオ

族・ブイ族・漢族の住居・鼓樓・風雨橋を50棟実測した。90年度は、この成果をふまえて、対象村落を1ヶ所に限定したトン族集落の集中調査をおこなった。調査地は、都柳江沿岸の從江县蘇洞寨（住居数35・世帯数44・人口218）である。

第3次調査に先立ち、貴州省建築設計院が蘇洞の地形測量を実施し、これによって作成された500分の1地図を調査のベースマップとした。本調査は1990年10月8日～11月3日におこない、建築史・考古学・民族学・言語学・民族美術の研究者が日中あわせて9名参加した（奈文研からは浅川・鳥田・巽が参加）。調査は建築班2班と民族班1班にわけられ、建築班は主要家屋全戸の実測、民族班は全世界の家族構成と血縁及び婚姻関係の把握を最低のノルマとし、さらに村大工からの聞き取り、部材呼称の音声表記、通過儀礼・祭祀・禁忌などに関する聞き取り、スケッチマップ調査などを相互協力のもとに進めた。この調査の成果は、まもなく『住宅建築』（建築思潮研究所）と『住宅総合研究財團年報』に発表される。
（浅川滋男）

特別研究 南アジア仏教遺跡の保存整備に関する基礎的調査研究 インド亜大陸は仏教発祥の地であり、ここからインドシナ半島にかけて多くの仏教遺跡が残る。それらの大半は煉瓦や石で造られた構造物で、長期間露天で風雨にさらされてきたため損耗や破壊が著しく、その保存整備が急務となっている。当研究所では遺跡・遺物の科学的な保存措置に関する調査研究を行うと共に、遺跡の整備修景とを結合させ、平城宮跡を始めとする各地の遺跡および埋蔵文化財の保存に大きな成果をあげている。この実績を南アジアの仏教遺跡に活用することによって、文化財保護の国際協力に寄与することが本研究の目的である。

1989年度から、インド考古局 Archaeological Survey of India と共に、現地の風土気象条件に見合った保存整備状況を調査し、またインド考古局の専門家を日本に招へいして遺跡の保存整備技術について共同研究を行った。インドでの調査は、デリー、マトゥーラ、パトゥナ、マドラス、ポンペイなどにおいて、石造物・石窟寺院を中心に数十箇所の仏教遺跡を調査した。インドから訪日したのは考古局長である M. C. JOSHI 氏以下 B. K. SHARAN 氏、R. D. TRIVEDI 氏の3名である。
（山本忠尚・高瀬要一・上原真人）

城子山遺跡測量調査 「東北アジアにおける文明の源流の考古学的研究」と題する国際学術研究（研究代表者秋山進午氏）の研究分担者として参加し、中国遼寧省に赴いた。主として「紅山文化」に重点をおき、北京、朝陽、凌源、瀋陽を経て北京にいたる20日間の調査であったが、凌源県にある「城子山」というその時代の遺跡の平板地形測量を、1週間かけておこなったのが主たる業務である。北京では、当研究所に長期研修にこられた文物局の方々とも再会することができた。
（伊東太作）

海外出張報告 肥塚、岩永は2月12日から21日まで「文部省科学研究（国際学術研究）：東アジア地域の古文化財（青銅器および土器・陶磁器）の保存科学的研究」の共同研究者として、スマソニア研究機構などを訪問した。

肥塚は「ブロンズ病と青銅腐食のメカニズム」研究班として、A study of the Corrosion on

Bronzes from Yukinoyama Tumulus をテーマに研究成果の発表を行なった。ブロンズ病発生のメカニズムの理論的考察はすでにできているものの、すべてを実証することが難しく今後継続して研究を進めることになった。また、青銅表面に形成する Black Patina 層にも興味がもたれ、人工説か自然発生説について議論がなされた。また、同様に青銅表面に形成する金属間化合物についても、日米間で専門家による討論の必要性が指摘された。

岩永はデータベース構築のための「中国製、朝鮮半島製、日本製青銅器の鋳型製作、鋳造技術、冶金学的問題」研究班として、The Bronze Production in the Yayoi and Kofun Periods of Protohistoric Japan をテーマに研究成果の発表を行ない、弥生・古墳時代の青銅器生産、特に鋳型の材質とその時期的变化に関わる最近の学説を概観した。

ワシントン滞在中は、CAL (Conservation Analytical Laboratory), Walters Art Galleryなどを訪問して、考古科学、保存科学的諸問題について討論する機会を得た。また、帰路ロサンゼルスにより、GCI (Getty Conservation Institute), Getty Museum, Los Angeles County Museum of Art を訪問し、同様に討論した。しかし、滞在期間が実質 6 日間と短期であったために、充分な意見の交換ができなかった。
(肥塚隆保・岩永省三)

アメリカ報告 J. D サリンジャーの小説『ライ麦畑でつかまえて』に、ニューヨークの自然史博物館が登場する。ホールデン・コルフィールド少年の思い出の博物館は、いつ行ってもなにひとつ変わらないところだった。この一節を読んだ時、アメリカの博物館に疎い私は、うす暗い展示室、色あせ、ホコリをかぶった展示品の数々、それ自体がまさに「館蔵品」のごとき博物館を想像したのだった。

このほど、文化庁とアメリカスミソニアン研究機構との共同研究の一環としてアメリカに渡り（2月18日～3月3日）、いくつかの博物館を見て、私の想像がとんだ間違いと気づいた。私が見たのは、ワシントンのスミソニアンの巨大な博物館群、ニューヨークの自然史博物館と、メトロポリタン美術館である。この巨大な博物館群の印象は、ひとことで言えばとても面白いのだ。日本でも、楽しい博物館がふえてきたが、それでも博物館に抱くイメージは、古くさく退屈で、博物館めぐりなど年寄り趣味、というのが常識であろう。アメリカの博物館は、これとは別世界で、「専門家」から大人、子供までを対象にわかりやすく、楽しく、そして学問的に高度の展示を行っている。そのためにいろいろとチエを絞り、観客は次にどんな世界が展開するのか、期待に胸をふくらませて新しいコーナーに進めるのだ。これは、「美術館」の総本山のように思われているメトロポリタン美術館でも例外ではない。こうした展示を行う博物館は、私たちのイメージにある博物館とはかけ離れ、むしろ TV や映画、演劇などに近いと言えよう。博物館と映像芸術や舞台芸術との違い、それは扱う素材の違いにすぎない。つまり、彼の地の博物館人が考える博物館とは、ものを言わない「遺物」「美術品」をもとに、縦横に新しい世界を切り拓く場なのである。
(金子裕之)

公開講演会発表要旨

弥生時代青銅器の役割 弥生社会のなかで青銅器が果たした役割に関する問題点のうち以下について、諸学説を整理紹介し、若干の私見を述べた。①青銅武器形品の実戦での使用の有無。②武器形青銅器の祭器化の原因。③武器形祭器の長大化の原因。④青銅祭器による集団祭祀の時間的变化の本質は強化か形骸化か。⑤その祭祀の終焉、祭器の消滅の原因。⑥青銅祭器はいかなる集団祭祀に用いられたのか。⑦青銅祭器が埋納された理由。⑧青銅祭器の分布圏の意味付け。⑨東日本に大型青銅器が及ばなかった理由。⑩弥生時代青銅器を東アジア各地のものと比較した場合の特質。

(岩永省三)

奈良時代の鏡 平城京出土の唐式鏡 近年、平城京二条大路北側溝から瑞雲双鸞八花鏡が出土した。この鏡を手がかりに、平城京に残された唐式鏡を階層性という視点から3大別し、型式と機能について論じた。大形鏡は、正倉院鏡に代表される1尺鏡で、祭祀性が強く、鑄上がり・仕上げの良好な上質鏡である。類例としては、香取・春日・大山祇3社の海獸葡萄鏡などがある。中形鏡は、二条大路北側溝出土鏡を代表とする。踏み返し鋳造を特徴とし、踏み返しによる縮小化や、范傷の観察によって、鋳造順位や系列を推定できる。小形鏡は、直径10cm以下の鏡で、海獸葡萄鏡の踏み返し鏡が大多数を占める。ひんぱんに踏み返し鋳造を繰り返すことによって、縮小化が著しく、文様も不鮮明となっている。祭祀に多数を一括して使用することを前提としてつくられた鏡である。

(杉山 洋)

飛鳥地域の調査から 1990年度、飛鳥藤原宮跡発掘調査部は、飛鳥地域で山田寺、坂田寺、石神遺跡、山田道などの調査を行なった。特に坂田寺に焦点を絞り、調査の過程を報告した。坂田寺は1972年度以降、6回調査を行い、第1・2次調査では7世紀前半以降の池や溝・井戸、第3次調査では仏堂の一部と須弥壇・鎮壇具、第4次調査では石組溝、第5次調査では仏堂の東方で鎮壇具、そして今年度の調査で、第3次調査でみつかった仏堂に加え、回廊を検出した。建築部材の遺存状態も良好であった。仏堂・回廊は桧皮葺。また仏堂の廃絶時の状況は、10世紀後半以前に東南方からの土砂で壁の根元まで埋まり、次第に立ち腐れの状況となり壁が倒れ、10世紀後半には土砂の上面で仏像・部材などを焼却したらしい。

(深沢芳樹)

二条大路で見つかった木簡—長屋王邸のその後— 長屋王邸の北を走る二条大路の南北両肩に掘られた東西溝から、大量の木簡が出土した。木簡の年紀は天平7、8年のものが多く、同12年の基仁京遷都前後に廃棄されたものと見られる。そして出土地点と記載内容から、長屋王邸跡に置かれた施設から捨てられた一群と、その北の左京二条二坊五坪から廃棄されたものとに大きく二分される。前者は①貢を含め、税の荷札木簡が多い、②宮内省被管官司関係木簡を含む等の特徴から、天皇・宮内省等と関係深い施設と見られる。一方後者は、①兵部卿宅充ての文書木簡がある、②資人に関わる木簡が多い等の特徴を持ち、兵部卿藤原麻呂の邸宅と判断される。また前者中に見える意保御田は、倭屯田の後身の令制官田である可能性がある。

(館野和己)

調査研究彙報

秋田県の近代化遺産総合調査(1) 幕末～戦前の産業・土木・交通に関する遺産の総合調査が、90年度から2年度継続ではじまつた。初年度は、奈文研の指導のもとに、県下各地の調査員が第1～2次調査をおこなつた。第1次調査は関係遺構を網羅的にひろいだす分布調査であり、総数は全県で約1,300件にのほる。第2次調査では、そのうちとくに重要と思われる約3分の1を対象にして、沿革や現状についてやや詳しく調査した。この成果は、「秋田県近代化遺産一覧」(秋田県教育委員会、平成3年3月)としてまとめられた。

(宮本・浅川)

長崎県福江市石田城庭園の実測調査及び修理指導 石田城内にある旧藩主五島氏庭園(面積約6,000m²)の実測調査を昨年度に引き続き行ない、さらに池の護岸石積み崩壊個所などの修理指導を行なつた。実測図縮尺1/40。1990年11月、12月。

(高瀬、本中、杉山、小野)

善法院庭園の実測調査 滋賀県大津市園城寺内の善法院庭園(面積約4,000m²)の実測調査。国指定名勝の善法院庭園は1941年の土砂崩れにより埋没していたが、1988年度から大津市教育委員会によって発掘調査が行なわれ再びその全貌をあらわした。実測図縮尺1/50。1990年9月、12月)

(高瀬、本中、小野)

居初氏庭園の実測調査 滋賀県大津市の居初氏庭園(面積1,000m²)は琵琶湖の眺望を最大限に生かした庭園。邸内の茶室・天然图画亭の修理にともない、庭園の実測調査を行なつた。実測図縮尺1/50。1990年11月。

(高瀬、本中、小野)

仁和寺典籍文書調査 霊宝館第1函から、従来の調査データ補足確認のための調査を行つた。第1函まで完了。御経蔵第150函についても補足調査を行つた。なお仁和寺の書跡目録は現在パソコン入力を継続中である。91年3月。

(綾村・館野・森・渡邊)

薬師寺典籍文書調査 東大史料編纂所との共同調査。第16、20、23、26函の整理分類・調書作成と第16函の写真撮影を行つた。各函には多量な近世文書が収められており、各函未了である。90年7月。

(綾村・森)

醍醐寺文書調査 醍醐寺文書の写真撮影を継続中であるが、今年度は第14・15函につき実施した。90年8月。

(綾村・佃・渡邊)

文化庁所蔵品調査 文化庁所蔵の「日本書紀第十残巻(紙背性墨集)」の写真撮影を文化庁分室にて行った。91年3月。

(綾村・佃・渡邊)

その他の文書調査 石山寺の依頼により深密藏聖教調査に参加90年8、12月(綾村・橋本)。大覚寺調査 嵐峨美短大的依頼により聖教調査に参加91年3月(綾村・橋本・森)。

平城宮朱雀門の復原に関する研究 90年3月に引き続き9月12日に第5回研究会を実施した。今年度は基壇の軸体を施工する年であり、その実施案を提示し委員の先生方の了承を得た。また、再発掘の結果当初案を訂正せざるを得なくなつた南辺築地大垣と朱雀門との取付き部について、築地反り三尺案と四尺案を図示し討議を重ねた結果三尺案がよからうとの感触を得た。(細見・内田)

特別研究第一次大極殿地区復原整備のための基礎調査 調査2年次。計画地の現況地形のデジタルマッピングを完成するとともに、C.G.による第一次大極殿・朝堂院地区の第Ⅰ期および第Ⅱ期殿舎復原景観図を作成した。以上の基礎資料を蓄積する一方、当研究所の指導委員会の先生方からなる本基礎調査の検討委員会を発足させ、第1回の会議を開催した。また、本調査が平城宮跡の将来に大きく関わることから、研究所員全員による「21世紀の平城宮跡を考える会」を開き、自由に研究所および平城宮跡の近・遠未来像について話し合った。(高瀬・本中・小野)

特別研究発掘庭園資料収集とその成果の刊行 昨年度に引き続き、全国の発掘庭園資料の収集を行なうとともに、それらの資料をもとに、データベース化に向けワークシートの作成を行なった。また、一部のものについてはデータ入力をを行なった。 (牛川・高瀬・本中・小野)

結城庵寺の発掘調査 茨城県結城庵寺第3次調査の指導。今年度は伽藍配置と寺域を確認するためA~D区を設けた。A区では寺域を画する大溝の西南隅とその南側で8世紀前半の竪穴住居址を、B区では東面回廊を、C区では寺域北限の大溝と僧房と推定される掘立柱建物2棟とその北側で平安時代後期の竪穴住居址を、D区では寺域東限の大溝と推定される溝とその東側で8世紀前半の竪穴住居址1棟を検出した。その結果、寺域の範囲は南北約250m、東西約180m、回廊の規模は東西幅約75m、南北幅は推定で約65mとなり、伽藍配置は法起寺式ないしは觀世音寺式と推定されるに至った。1990年7月~12月。 (大脇・川越・立木・岩永・花谷)

日韓における考古遺物の材質的検討と保存法の開発研究 わが国出土の考古遺物の多くは、その系譜を大陸、及び韓半島に求めることができる。とりわけ、韓半島からは、直接もたらされたり、あるいは強い影響を受けてわが国で製作されたものが多い。その源流ともいえる韓国の出土品について、化学分析を通して、その密接な関係を明らかにする。なお、両国の気候・風土もよく似ており、したがって、遺物の劣化、風化状態も共通するところがある。そのため、これらの遺物に関する化学的保存処理法も同様に検討することとした。今年度は、海底出土船体などの大型木製品をはじめ、漆製品、金属製品について分析調査し、あわせて化学的処理法の検討をおこなった。 (沢田・工楽・肥塚・村上)

滋賀県大津市栗津湖底遺跡の測量 勤滋賀県文化財保護協会の依頼を受け、栗津湖底遺跡調査の為の基準点設置作業を行った。遺跡周辺に分布する、国土地理院の三角点、大津市の基準点を用いて、遺跡を囲む堰堤上と調査区内に基準点を増設した。それらの座標を用い、ヘリから撮った調査区の斜写真を垂直写真に変換することを試みた。 (木全・松井)

「長屋王 光と影」展の開催 平城京長屋王邸跡の調査(1987~1990)については、「平城京長屋王邸と木簡」(吉川弘文館1991)に成果の一部を報告した。これを受け、このたび日本経済新聞社、奈良そごう美術館と共に表記の展覧会を奈良そごう美術館(91年2月20日~3月17日)、広島県立歴史博物館(3月23日~4月21日)、横浜そごう美術館(4月25日~5月6日)の3箇所で行った。斬新で楽しい展示は高い評価を受けたが、観客数は約6万人とやや少な目。B5版88頁の図録も合せて発行。 (金子)

奈良国立文化財研究所要綱

I 事業概要

1 研究普及事業

公開講演会

- (1) 1990年5月19日 第66回公開講演会
「弥生時代青銅器の役割」 岩永省三
「奈良時代の鏡—平城京出土の唐式鏡—」 杉山洋
- (2) 1990年11月17日 第67回公開講演会
「飛鳥地域の調査から」 深澤芳樹
「二条大路で見つかった木簡—長屋王邸のその後—」 館野和己
- (3) 1990年7月7日 藤原宮跡第61次 立木修
- (4) 1990年8月4日 平城宮跡第218次 (薬師寺北面回廊・講堂跡) 烏田敏男
- (5) 1990年9月29日 平城宮跡第217次西 (第一次大極殿地区) 館野和己
- (6) 1990年11月10日 山田寺跡第8次山岸常人
- (7) 1990年11月17日 平城宮跡第217次東 (第一次大極殿地区) 森本晋
- (8) 1990年12月1日 石神遺跡第9次安田龍太郎
- (9) 1991年2月2日 平城宮跡第216次 (壬生門北) 寺崎保広
玉田芳英
- 特別公開講演会
1990年10月6日
「新たに発見された都部の北朝壁画墓」
「最近における中国考古学の発掘成果」
中国社会科学院考古研究所副所長 徐光冀
+ 助理研究員 朱延平
00 1991年3月2日 平城宮跡第219・221次 (西隆寺) 松本修自
小野健吉
- (10) 1991年3月16日 平城宮跡第220次 (式部省跡) 寺崎保広

現地説明会

- (1) 1990年6月30日 平城宮跡第214次 (兵部省北東隅) 渡邊晃広
- (2) 1990年7月3日 坂田寺第6次 (見学会) 岩永省三

平城宮跡資料館・遺構展示館

見学者数

区分	資料館	遺構展示館	計
1990年	66,853	76,088	142,941
累計	1,100,165	1,425,178	2,525,343

資料館は1970年度、遺構展示館は1963年度以降の累計

2 1990年文部省科学研究費補助金による研究

種別	研究課題	研究代表者	交付額
総合研究(A)	原始古代の環境復原に関する新方法の開発	佐原真	2,000千円
総合研究(B)	発掘調査における新システムの開発に関する研究	鈴木嘉吉	2,100
一般研究(A)	データベースの開発による近世社寺建築研究の総括	松本修自	1,900
タ	寝殿造の総合的研究	宮本長二郎	15,000
一般研究(B)	石器製作経過復原と製作追試実験研究	松沢亜生	8,000
一般研究(C)	平城宮・京出土須恵器の分類と産地同定	巽淳一郎	700
タ	石像文化財における経年変化の定量的解析に関する研究	内田昭人	500
タ	古代地方官衙における曹司の研究—国衙・群衙を中心として—	山中敏史	1,300

奨励研究(A)	本簡による年代の決定に関する研究	寺崎保広	800
	近畿地方における縄文時代遺跡の比較研究	玉田芳英	800
	群馬における民族考古学—東アジアにおける系譜と意味—	浅川滋男	900
	コンピュータグラフィクスにおける古庭園の復原的研究	本中真	1,200
試験研究(B)	地名データベースの作成と利用法の確立	木全敬藏	700
	コンピュータグラフィクスによる埋蔵文化財情報の管理システムの開発	工楽善通	5,200
	航空写真情報データベース構築におけるデータ入力法の開発研究	伊東太作	1,200
計	15件		42,300

3 飛鳥資料館の運営

展示

第一展示室 常設展示

第二展示室

春期特別展示「レンズを通した飛鳥」

1990.4.4~5.27 54日間

秋期特別展示「日本書紀を掘る」

1990.10.3~11.23 52日間

特別陳列「山田寺出土遺物陳列」

1991.1.15~2.11 25日間

区分	個人観覧	団体観覧	有料	無料	合計
一般	42,042	10,002			
高・大生	9,330	16,936			
小・中生	10,948	45,138	134,396	12,976	147,372
計	62,320	72,076			

陳列品購入

山田寺仏頭（複製品）

特別講演会

1990年10月13日

「日本書紀を掘る」 猪熊 豊勝

1990年10月17日

「日本書紀における蘇我氏の立場」 平野 邦雄

1991年2月5日

「山田寺の調査と出土遺物」 大脇 潔

山岸 常人

普及

インフィメーションルームにおいて観覧者の質問に応じている。

また、特別展示の刊行物として「復原の飛鳥」（絵葉書8枚）及び「日本書紀を掘る」（A4版70頁）を刊行した。

入館者数(1990.4.1~1991.3.31 開館日数314日)

4 埋蔵文化財センターの研修・指導

研修 埋蔵文化財の保護に資することを目的として主に地方公共団体の埋蔵文化財保護行政担当者を対象に次の研修を実施した。

- (1) 平成2年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修
(保存科学基礎課程)
1990年4月17日~4月27日 (参加者18名)
- (2) 平成2年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修
(保存科学応用課程)
1990年5月8日~5月22日 (参加者5名)
- (3) 平成2年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修
(遺跡探査課程)
1990年5月29日~6月8日 (参加者11名)
- (4) 平成2年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修
(中近世窯器調査課程)
1990年6月15日~6月26日 (参加者32名)
- (5) 平成2年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修
(文化財写真課程)
1990年7月3日~7月18日 (参加者20名)

- (6) 平成2年度埋蔵文化財発掘技術者一般研修
(一般課程)
1990年7月24日～8月29日（参加者32名）
- (7) 平成2年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修
(遺跡測量課程)
1990年9月5日～10月4日（参加者14名）
- (8) 平成2年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修
(環境考古課程)
1990年10月11日～10月31日（参加者29名）
- (9) 平成2年度埋蔵文化財発掘技術者特別研修
(埋蔵文化財基礎課程)
- 1990年11月6日～11月14日（参加者40名）
- (10) 平成2年度埋蔵文化財発掘技術者特別研修
(水田遺跡調査課程)
1990年11月20日～11月30日（参加者36名）
- (11) 平成2年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修
(石器調査課程)
1990年12月6日～12月18日（参加者20名）
- (12) 平成2年度埋蔵文化財発掘技術者特別研修
(写真測量外注管理課程)
1991年1月22日～1月25日（参加者42名）

研修員一覧表

氏名	所属	受入れ期間	受入れ部局	研究・研修内容
伊藤 幸司	附大阪市文化財協会調査課	1990.4.1～1991.3.31	埋蔵文化財センター	保存科学研修
梅村 型一	東北歴史資料館技師	1990.5.23～1990.7.6 1990.10.8～1990.10.31	同 上	同 上
吉澤 良	三重県埋蔵文化財センター調査第1課主事	1990.7.1～1990.9.30	平城宮跡発掘調査部	発掘調査研修
斎藤 直樹	三重県埋蔵文化財センター調査第2課主事	同 上	藤原宮跡発掘調査部	同 上
バメラ・バンデイバー	アメリカ・スミソニア研究機構保存科学研究員	1990.6.27～1990.7.19	埋蔵文化財センター	縄文土器研究
ワニー・ラハルディ・ヒビディ	国立インドネシア大学文学部講師	1990.9.17～1990.10.31	同 上	考古学研究
徐光冀	中国社会科学院考古研究所副所長	1990.9.25～1990.10.14	同 上	同 上
朱延平	中国社会科学院考古研究所助理研究员	同 上	同 上	同 上
朴仁俊	韓国国立中央博物館保存科学研究室 学芸研究士	1990.11.20～1990.12.25	同 上	保存科学研究
安秉燦	韓国国立中央博物館学芸研究士	1990.11.26～1990.12.5	同 上	同 上
趙由典	韓国国立文化財研究所遺跡研究調査室長	1990.12.3～1990.12.12	同 上	同 上
申昌秀	韓国慶州文化財研究所学芸研究官	同 上	同 上	同 上
トム・チャイス	アメリカ・フリーアーティスト美術館 保存科学研究室長	1991.1.12～1991.1.18	同 上	同 上
金弘柱	韓国国立済州博物館学芸研究室長	1991.1.21～1991.1.30	同 上	同 上
金東賢	韓国国立文化財研究所保存科学研究室長	1991.2.4～1991.2.10	同 上	同 上
リチャード・ニューマン	アメリカ・ボストン美術館研究員	1991.2.15～1991.4.14	同 上	同 上
ジョン・マイケル・ビーター・マローニー	イギリス・ロンドン博物館長	1991.2.17～1991.3.7	同 上	都市遺跡の保存活用の研究
李相洙	韓国国立中央博物館保存科学実験室 長	1991.2.18～1991.2.27	同 上	保存科学研究
B.K. シャラン	インド考古局パトナ地方支局長	1991.2.18～1991.3.14	同 上	仏教遺跡研究
R.D. トリヴェディ	インド考古局副所長	同 上	同 上	同 上

ビーター・ブリード	ネブラスカ大学人類学部教授	1991.2.25~1991.3.16	同 上	保存科学研究
張 廣 浩	韓国国立文化財研究所長	1991.3.5~1991.3.12	建造物研究室	建築史研究
チエブナット・プラサフエット	タイ・シルバーコーン大学考古学部講師	1991.3.5~1991.3.21	埋蔵文化財センター	保存科学研究
セセブ・エカ・バルマナ	国立インドネシア大学文学部助手	1991.3.9~1991.3.22	同 上	同 上
ファドジャー・イ・ブヌ・アッワフィル	国立インドネシア科学研究所助手	1991.3.9~1991.3.22	埋蔵文化財センター	保存科学研究
レボーフカヤ・ガリーナ	ソ連科学アカデミー・ベリヤ支部歴史・言語・哲学研究所研究員	1991.2.28~1991.4.10	同 上	同 上
ショマコバ・エレーナ	同 上	同 上	同 上	同 上
金 昌 俊	韓国文化財管理局官園管理課長	1991.3.18~1991.3.27	同 上	建築史学及び保存科学研究
文 煥 哲	韓国文化財研究所保存学科研究室研究員	1991.3.18~1991.3.27	同 上	同 上
李 鍾 宜	韓国湖城美術館副館長	1991.3.26~1991.3.30	同 上	考古学及び保存科学研究
李 午 嘉	韓国湖城美術館保存科学研究室長	同 上	同 上	同 上

発掘調査・保存・整備・探査等指導

(北海道) 陽開丸、手宮洞窟、(岩手県) 盛岡城跡、湯舟沢Ⅱ遺跡、志波城跡、毛越寺庭園、国見山廃寺跡、(宮城県) 多賀城跡、日の出山瓦窯跡群、(秋田県) 秋田城、大湯環状列石、払田棚路、(山形県) 西沼田遺跡、(福島県) 慧日寺跡、薬師堂石仏、大戸古窯跡群、根岸遺跡、(茨城県) 三村山清冷院極楽寺跡及び尼寺入庵寺跡、(栃木県) 足利学校跡、(群馬県) 梁崎八幡遺跡、宇通道跡、(東京都) 品川台場(第3及び第6台場)、(神奈川県) 三段台考古館住居跡、旧太田家住宅、(富山县) 小杉丸山遺跡、(石川県) 能登国分寺、須曾蝦夷古墳、マンダラ古墳、(福井県) 義浩館(旧御泉屋本舗) 庭園、行軒古墳、(長野県) 箕輪遺跡、松原条里遺跡、上田城跡、真田氏館跡、(岐阜県) 美濃須衛古窯跡群内天狗谷古窓、加納城跡、垣内遺跡、塙原遺跡、元屋敷陶器窯跡、長塙古墳、高塙山古墳、(静岡県) 横須賀城跡、滝峯才四郎谷遺跡、片山廃寺、久野城跡、(愛知県) 赤塙山古墳、東畠廃寺跡、青塙古墳、(三重県) 伊賀國府推定地、重要文化財木造十一面觀音立像、繩生廃寺跡、北畠氏館址庭園、鈴鹿閣閑所、(滋賀県) 宮山二号墳、木村古墳群、寂照寺宝篋印塔、園城寺善法院庭園、西羅1号墳、衣川廃寺跡、穴太廃寺跡、国分大塙古墳、安土城跡、栗津湖底遺跡貝塚、(京都府) 鹿苑寺庭園、遠所

遺跡群、京都大学北部構内遺跡、山形古墳、黒田古墳、恭仁京跡、八木鶴遺跡、興戸遺跡、大覚寺大沢池、平等院庭園、蛭子山・作山古墳、賀茂御祖神社、(大阪府) 雜波宮跡、峯ヶ塚古墳、池上曾根遺跡、新池埴輪製作遺跡、御獅子塚古墳、狹山ダム景観、(兵庫県) 神子ヶ谷古墳群、猿山城跡、船庄莊園遺跡、大間遺跡、姫路城、大部莊莊園、西安田長野遺跡、カメ焼谷古墳群、小山古墳、播磨国分寺跡、美乃利遺跡、宅原遺跡、砂入遺跡、袴狭遺跡、落池遺跡、中道子山城跡、小丸九遺跡、(和歌山県) 須恵器窯跡、(鳥取県) 伯耆国序跡、羽衣石城、鳥取城跡、馬場遺跡、梶山古墳、上淀廃寺跡、(島根県) 石造五百羅漢座像群、花仙山周辺地城出土旧石器、(岡山県) 備中高松城、備中松山城跡、美作国府跡、(広島県) 三ツ城古墳、広島城跡、中世城館跡、草戸千軒町遺跡、沼田市遺跡、(山口県) 萩城跡、周防国府跡、大内氏遺跡、長登鍋山跡、朝田墳墓群、綾羅木郷遺跡、三田尻塙田記念公園、(香川県) 弘福寺領讃岐国山田郡田園、有岡古墳群(王墓山古墳)、讃岐国分寺跡、十一面觀音立像、川上・丸井古墳、(愛媛県) 来往庵寺、江口遺跡、(福岡県) 王塙古墳、鴻臚館跡、板付遺跡、(佐賀県) 吉野ヶ里遺跡、名護屋城跡、陣跡、肥前国府跡、馬郡・竹原道路群、基野城跡、大里町遺跡、茶山経塚、(長崎県) 煙ノ原窯跡、壱岐国分寺跡、(熊本県) 清

水原遺跡、(大分県)普光寺磨崖仏、免ヶ平古墳。
大分元町石仏、庄ノ原遺跡、(宮崎県)垣下遺跡、
東二原地下式横穴群、蓮ヶ池横穴群、国衙・郡衙・古寺跡、下村窯跡、陣内遺跡、(沖縄県)平屋敷古島遺跡、首里城跡、涌田古窯跡、糸数城跡

埋蔵文化財ニュース刊行

- 第69号 開発事業別発掘届出等件数—10年間の推移 1978年と1988年
第70号 漆製品出土遺跡分布図—西日本編—
第71号 遺跡探査法

5 その他

委員会等

第16回飛鳥資料館運営協議会

- 1990年5月14日 於 飛鳥資料館
平城・飛鳥藤原宮跡調査整備指導委員会
1990年6月15・16日 於 平城宮跡資料館講堂

外国出張

- 工楽普通、沢田正昭、伊東太作 日韓における考古遺物の材質的検討と保存法の開発研究のため、大韓民国へ出張
1990年6月5日～1990年6月14日
村上 隆 大英博物館国際会議並びに金橋文化財の保存と材質に関する研究調査のため、連合王国、ベルギー國へ出張
1990年6月13日～1990年6月24日
沢田正昭、肥塚隆保 シベリア・パジリク王墓の発掘調査及び発達調査に伴う出土品の保存技術協力のため、ソビエト共和国へ出張
1990年7月27日～1990年8月14日
山本忠尚 シベリア・パジリク王墓の発掘調査のため、ソビエト共和国へ出張
1990年7月27日～1990年8月17日
伊東太作 中国遼寧省凌源三官甸子「城子山」遺跡測量調査のため、中華人民共和国へ出張
1990年10月10日～1990年10月31日
光谷拓実 年輪形成にかかる各種環境要因の抽出方法と古気象の復原方法に関する研究のため、ドイツ國へ出張
1990年11月1日～1991年8月31日
肥塚隆保、村上 隆 日韓における考古遺物の材質的検討と保存法の開発研究のため、大韓民国

へ出張

1990年12月5日～1990年12月12日

町田 章 居延漢簡の実態調査のため、中華民国
へ出張

1990年12月23日～1990年12月29日

田中 球 日本・インドネシアにおける民族文化の伝統と変容—一口頭伝承の構造と機能—の研究のため、インドネシア國へ出張

1991年1月17日～1991年1月28日

山本忠尚 インド仏教遺跡の保存整備に関する基礎的調査研究のため、インド國へ出張

1991年1月22日～1991年2月4日

高瀬要一、上原真人 インド仏教遺跡の保存整備に関する基礎的調査研究のため、インド國へ出張

1991年1月22日～1991年2月6日

町田 章 明石市主催「中国江蘇省南京博物院・無錫市博物館名宝展」にかかる展示物の選定のため、中華人民共和国へ出張

1991年2月1日～1991年2月7日

肥塚隆保、岩永省三 東アジア地域の古文化財（青銅器及び土器・陶磁器）の保存科学的研究の調査のため、アメリカ合衆國へ出張

1991年2月11日～1991年2月22日

工楽普通、沢田正昭 日韓における考古遺物の材質的検討と保存法の開発研究のため、大韓民国へ出張

1991年2月27日～1991年3月8日

上野邦一 アンコール遺跡の保存修復に関する科学的・技術的調査及び研究のため、カンボジア國へ出張

1991年3月9日～1991年3月30日

協力事業等

文化庁では1971年度から特別史跡藤原宮跡の国有化を進めており、1972年度から当研究所が文化庁から支出委任を受けて買収事務を担当しているが、1990年度の状況は下記のとおりである。

区分	面積	金額
1990年度	4,594.38	321,303,172
国有地合計	330,915.89	6,832,821,383

II 図書及び資料
図書 123,138冊 (1991.3.31)

区分	種別	購入	寄贈	計
1990年度	和漢書	2,761	5,593	8,354
	洋書	318	92	410
累計	和漢書	49,104	66,826	115,930
	洋書	5,800	1,408	7,208

写真 434,007点 (1990年度末)

III 研究成果刊行物

1 1990年度刊行物

名 称	
学報	第48冊 年輪に歴史を読む—日本における古年輪学の成立—
	第49冊 研究論集Ⅳ
	第50冊 平城宮発掘調査報告Ⅲ
図録	第23冊 日本書紀を掘る
報告書等	1990年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報
	飛鳥・藤原宮発掘調査概報21
	平城宮発掘調査出土木簡概報22
	平城宮発掘調査出土木簡概報23

2 前年度までの刊行物

奈良国立文化財研究所学報

年度	名 称
1954	第1冊 仏師運慶の研究
	第2冊 修学院離宮の復原的研究
1955	第3冊 文化史論叢
1956	第4冊 奈良時代僧房の研究
1957	第5冊 飛鳥寺発掘調査報告
1958	第6冊 中世庭園文化史
	第7冊 興福寺食堂発掘調査報告
1959	第8冊 文化史論叢Ⅱ
	第9冊 川原寺発掘調査報告
1960	第10冊 平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告
1961	第11冊 院の御所と御堂—院家建築の研究—
1962	第12冊 巧匠安阿弥陀仏快慶
	第13冊 寂殿造系庭園の立地的考察
	第14冊 唐招提寺藏「レース」と「金龜舍利塔」に関する研究
	第15冊 平城宮発掘調査報告Ⅱ 官衙地域の調査

1963	第16冊 平城宮発掘調査報告Ⅲ 内裏地域の調査
1965	第17冊 平城宮発掘調査報告Ⅳ 官衙地域の調査
	第18冊 小堀遠州の作事
1967	第19冊 藤原氏の氏寺とその院家
1969	第20冊 名物製の成立
1971	第21冊 研究論集Ⅰ
1973	第22冊 研究論集Ⅱ
1974	第23冊 平城宮発掘調査報告Ⅵ 平城京左京一条三坊の調査
	第24冊 高山一町並調査報告—
1975	第25冊 平城京左京三条二坊
	第26冊 平城宮発掘調査報告Ⅶ
	第27冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ
	第28冊 研究論集Ⅲ
	第29冊 木曾奈良井一町並調査報告—
1976	第30冊 五条一町並調査の記録—
1977	第31冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ
	第32冊 研究論集Ⅳ
	第33冊 イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告
	第34冊 平城宮発掘調査報告Ⅸ
1978	第35冊 研究論集Ⅴ
	第36冊 平城宮整備調査報告Ⅰ
	第37冊 飞鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅹ
	第38冊 研究論集Ⅵ
1980	第39冊 平城宮発掘調査報告 X
1981	第40冊 平城宮発掘調査報告 XI
1984	第41冊 研究論集Ⅶ
	第42冊 平城宮発掘調査報告 XII
	第43冊 日本における近世民家（農家）の系統的発展
1985	第44冊 平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告
1986	第45冊 薬師寺発掘調査報告
1988	第46冊 平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書
1988	第47冊 研究論集Ⅸ

奈良国立文化財研究所史料

年度	名 称
1954	第1冊 南無阿弥陀仏作善集（複製）
1955	第2冊 西大寺觀音傳記集成
1963	第3冊 仁和寺史料 寺誌編 1
1964	第4冊 俊乗坊重源史料集成
1966	第5冊 平城宮木簡 1 図版
1967	第6冊 仁和寺史料 寺誌編 2

1969	第5冊 平城宮木簡1 解説(別冊)	1979	第6冊 飛鳥時代の古墳—高松塚とその周辺—
1970	第7冊 唐招提寺史料1	1980	第7冊 日本古代の鶴尾
1974	第8冊 平城宮木簡2 國版・解説	1981	第8冊 山田寺展
	第9冊 日本美術院彫刻等修理記録I	1982	第9冊 高松塚拾年
1975	第10冊 日本美術院彫刻等修理記録II	1983	第10冊 渡来人の寺—松隈寺と坂田寺—
1976	第11冊 日本美術院彫刻等修理記録III	第11冊 飛鳥の水時計	
1977	第12冊 藤原宮木簡1 國版・解説	第12冊 小建築の世界—埴輪から瓦塔まで—	
	第13冊 日本美術院彫刻等修理記録IV	1984	第13冊 藤原宮—半世紀にわたる調査と研究—
1978	第14冊 日本美術院彫刻等修理記録V	1985	第14冊 日本と韓国の塑像
	第15冊 東大寺文書目録第1巻	第15冊 飛鳥寺	
1979	第16冊 日本美術院彫刻等修理記録VI	1986	第16冊 飛鳥の石造物
	第17冊 平城宮木簡3 國版・解説	1987	第17冊 萬葉乃衣食住
	第18冊 藤原宮木簡2 國版・解説	第18冊 壬申の乱	
1980	第19冊 東大寺文書目録第2巻	1988	第19冊 古墳を科学する
	第20冊 日本美術院彫刻等修理記録VII	第20冊 聖德太子の世界	
1981	第21冊 東大寺文書目録第3巻	1989	第21冊 仏舍利理納
	第22冊 七大道巡礼私記	第22冊 法隆寺金堂壁画飛天	
	第23冊 東大寺文書目録第4巻		
1982	第24冊 東大寺文書目録第5巻		
	平城宮出土墨書き器集成 I		
1983	第26冊 東大寺文書目録第6巻		
1984	第27冊 木器集成図録—近畿古代編—		
1985	第28冊 平城宮木簡4 國版・解説		
	第29冊 興福寺典籍文書目録第1巻		
1988	第30冊 山内清男考古資料1 真福寺貝塚資料他		
	第31冊 平城宮出土墨書き器集成 II		
1989	第32冊 山内清男考古資料2		

奈良国立文化財研究所基準資料

年度	名 称
1973	第1冊 瓦編1 解説
1974	第2冊 瓦編2 解説
1975	第3冊 瓦編3
1976	第4冊 瓦編4
	第5冊 瓦編5
1978	第6冊 瓦編6
1979	第7冊 瓦編7
1980	第8冊 瓦編8
1983	第9冊 瓦編9

飛鳥資料館図録

年度	名 称
1976	第1冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏
	第2冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏 銘文篇
1977	第3冊 日本古代の墓誌
1978	第4冊 日本古代の墓誌 銘文篇
	第5冊 古代の誕生仏

N 定 員

区分	指定職	行政職(→)	行政職(□)	研究職	計
1990年度	1	22	3	60	86
1991年度	1	22	2	61	86

V 予 算 (1990年度)

人 件 費	615,427千円
運 営 費	893,167
事 業 管 理	7,740
一 般 会 計	57,086
特 別 研 究	40,257
発 挖 調 査	491,038
宮 跡 整 備 管 理	67,151
飛 島 資 料 館 運 営	47,700
理 藏 文 化 財 センター 運 営	48,209
新 庁 倉 維 持 管 理 等 経 費	27,643
飛 島 藤 原 宮 跡 発 挖 調 査 部 施 設 新 営 に 伴 う 経 費	106,343
施 設 費	357,681
施 設 整 備 費	18,840
平 城 宮 跡 等 整 備 費	324,553
各 所 修 築 費	14,288
計	1,866,275

VI 施設

土 地

奈良国立文化財研究所所管	47,890m ²	平城宮跡朱雀門基壇復原平成2年度工事	84,769
本庁舎	8,860m ²	平城宮跡内裏地区苑路舗装等工事	10,712
飛鳥藤原宮跡発掘調査部	20,515m ²	平城宮跡外灯・動力設備取設工事	14,214
飛鳥資料館	17,092m ²	(2) 官房營繕費	
郡山宿舎(○)	80m ²	奈文研大型遺物処理棟建築工事(平成2年度分)	18,540
飛鳥資料館宿舎	1,343m ²	飛鳥資料館身障整備工事	11,330
文化庁所管(関係分)	1,417,996m ²	(3) その他(各所修繕・序費)	
平城宮跡地区	1,082,254m ²	本庁舎吸式冷温水ユニット設備整備工事	2,039
藤原宮跡地区	330,701m ²	研修寄宿棟管理人室等改修工事	9,316
飛鳥福圓宮殿跡地区	5,041m ²	飛鳥藤原宮跡発掘調査部保存科学実験室取設工事	
			11,103

建 物

28,352m²

1. 庁舎 27,761m²

区分	本庁舎	平城	藤原	飛鳥資料館		藤原宮跡	計
				m ²	m ²		
事務室	568	122	197	90	977		
研究・整理室	1,419	1,368	1,205	77	4,069		
資料・図書室	1,021		383	36	1,440		
会議室	338		129	42	509		
講堂		384	210	89	683		
展示室		845	254	648	1,747		
写真室	79	256	149	64	548		
造構展示棟		1,408			1,408		
車庫	84	968	352	94	1,498		
倉庫・収蔵庫	123	4,728	2,041	480	7,372		
研修棟	1,416				1,416		
その他の	1,673	1,818	1,506	1,061	36	6,094	
計	6,721	11,897	6,426	2,681	36	27,761	

2. 宿舎等	591m ²
重要文化財旧米谷家住宅	213m ²
郡山宿舎(○)	153m ²
飛鳥資料館宿舎	225m ²

主要工事

(1) 平城宮跡地等整備費	千円
平城宮跡整備棟周辺外溝整備工事	29,561
平城宮跡宮内省西南殿復原その2工事	24,411
平城宮跡旧整備棟他とりこわし工事	3,903
平城宮跡宮内省南殿第一殿屋根葺替工事	15,923
平城宮跡第2次朝堂院整備工事	117,317
平城宮跡内裏井戸跡原寸模型補修工事	3,554

平城宮跡朱雀門基壇復原平成2年度工事	84,769
平城宮跡内裏地区苑路舗装等工事	10,712
平城宮跡外灯・動力設備取設工事	14,214
(2) 官房營繕費	
奈文研大型遺物処理棟建築工事(平成2年度分)	18,540
飛鳥資料館身障整備工事	11,330
(3) その他(各所修繕・序費)	
本庁舎吸式冷温水ユニット設備整備工事	2,039
研修寄宿棟管理人室等改修工事	9,316
飛鳥藤原宮跡発掘調査部保存科学実験室取設工事	
	11,103

VII 人事移動 (1990.4.1~1991.3.31)

4月1日 奈良国立文化財研究所長(再任)	
鈴木嘉吉	
庶務部長に配置換	小菅康男
庶務部会計課長に昇任	松岡進
庶務部会計課課長補佐に昇任	小野祐治
庶務部会計課専門職員(施設係長)に昇任	阪本勇
飛鳥藤原宮跡発掘調査部考古第二調査室長に昇任	大脇潔
歴史研究室長に配置換	綾村宏
平城宮跡発掘調査部考古第二調査室に配置換	杉山洋
飛鳥資料館主任研究官に配置換	千田剛道
平城宮跡発掘調査部主任研究官に転任	山崎信二
文部技官(平城宮跡発掘調査部主任研究官)に採用	館野和己
研究補佐員(飛鳥藤原宮跡発掘調査部)に採用	相原嘉之
研究補佐員(飛鳥藤原宮跡発掘調査部)に採用	佐伯博光
京都大学化学研究所事務部長に転任	廣瀬了平
愛知教育大学経理部主計課長に転任	小川照夫
京都大学大型計算機センター事務長補佐に転任	川合教博
大阪大学医学部付属病院管理課施設掛	

長に転任 井元 正澄
 文化庁文化財保護部記念物課文化財調査官に転任 井上 和人
 東京学芸大学（第三部）教授に転任 木下 正史

5月1日 平城宮跡発掘調査部考古第三調査室長
 に昇任 山崎 信二
 平城宮跡発掘調査部考古第二調査室長
 に配置換 毛利光俊彦
 文化庁文化財保護部美術工芸課主任文化財調査官に転任 田辺 征夫

7月1日 平城宮跡発掘調査部主任研究官に昇任
 佐川 正敏
 平城宮跡発掘調査部主任研究官に昇任
 本中 真
 平城宮跡発掘調査部主任研究官に昇任
 寺崎 保広
 飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官に昇任
 深澤 芳樹
 飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官に昇任
 橋本 義則
 埋蔵文化財センター研究指導部主任研究官に昇任 松井 章
 事務補佐員（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）に採用 直嶋和子

10月1日 飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官に配置換 肥塚 隆保
 辞職 南 時夫

10月17日 辞職 山下 洋子

11月1日 庶務部庶務課に転任 桑原 隆佳
 奈良工業高等専門学校会計課に転任 石田 義則
 辞職 西嶋 富美

1月1日 埋蔵文化財センター研究指導部遺物處理研究室に配置換 村上 隆
 平城宮跡発掘調査部考古第一調査室に併任（文化庁建造物課） 中村 慎一

1月10日 事務補佐員（庶務部会計課）に採用 永井 和代

1月15日 辞職 橋元 敬子

3月31日 辞職 森田 光治

VII 組織規程

文部省組織令（抜粋）

昭和59年6月28日 政令第227号

第2章 文化庁

第3節 施設等機関

（施設等機関）

第108条 文化庁長官の所轄の下に、文化庁に国立国語研究所を置く。

2 前項に定めるものほか、文化庁に次の施設等機関を置く。

（中略）

国立文化財研究所

（国立文化財研究所）

第114条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。

3 国立文化財研究所及びその支所の名称、位置及び内部組織は、文部省令で定める。

文部省設置法施行規則（抜粋）

昭和28年1月13日 文部省令第2号

第5章 文化庁の施設等機関

第4節 国立文化財研究所

第1款 名称及び位置

（名称及び位置）

第116条の9 国立文化財研究所の名称及び位置は、次の表に掲げるとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東京都台東区
奈良国立文化財研究所	奈良県奈良市

第2款 奈良国立文化財研究所

（所長）

第123条 奈良国立文化財研究所に、所長を置く。

2 所長は、所務を掌理する。

（内部組織）

第124条 奈良国立文化財研究所に、庶務部、建造物研究室及び歴史研究室並びに平城宮跡発掘調査部及び飛鳥藤原宮跡発掘調査部を置く。

2 前項に定めるものほか、奈良国立文化財研究所に、飛鳥資料館及び埋蔵文化財センターを置く。

(庶務部の分課及び事務)

第125条 庶務部に、次の二課を置く。

- 一 庶務課
 - 二 会計課
- 2 庶務課においては、次の事務をつかさどる。
 - 一 職員の人事に関する事務を処理すること。
 - 二 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。

三 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。

四 この研究所の所掌事務に関し、連絡調整すること。

五 この研究所の所掌に係る遺構及び遺物の保全のための警備に関すること。

六 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属しない事務を処理すること。

3 会計課においては、次の事務をつかさどる。
 - 一 予算に関する事務を処理すること。
 - 二 経費及び収入の決算その他の会計に関する事務を処理すること。

三 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。

四 庁舎及び設備の維持、管理に関する事務を処理すること。

五 庁内の取締りに関すること。

第126条 削除

(建造物研究室等の事務)

第127条 建造物研究室においては、建造物及び伝統的建造物群に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

2 歴史研究室においては、考古及び史跡並びに歴史資料に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(平城宮跡発掘調査部の六室及び事務)

第128条 平城宮跡発掘調査部に、考古第一調査室、考古第二調査室、考古第三調査室、遺構調査室、計測修景調査室及び史料調査室を置く。

2 前項の各室においては、平城宮跡に関し、次項から第6項までに定める事務を処理するほか、その発掘を行う。

3 考古第一調査室、考古第二調査室及び考古第三調査室においては、別に定めるところにより分担して、遺物（木簡を除く。）の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

4 遺構調査室においては、遺構の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

5 計測修景調査室においては、遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

6 史料調査室においては、木簡の保存整理及び調査研究、史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部の四室及び事務)

第129条 飛鳥藤原宮跡発掘調査部に、考古第一調査室、考古第二調査室、遺構調査室及び史料調査室を置く。

2 前項の各室においては、藤原宮跡及び飛鳥地域における宮跡その他の遺跡に関し、次項から第5項までに定める事務を処理するほか、その発掘を行う。

3 考古第一調査室及び考古第二調査室においては、別に定めるところにより分担して、遺物（木簡を除く。）の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

4 遺構調査室においては、遺構の保存整理及び調査研究、遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

5 史料調査室においては、木簡の保存整理及び調査研究、史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

(飛鳥資料館)

第130条 飛鳥資料館においては、飛鳥地域の歴史的意義及び文化財に関し、国民の理解を深めるため、この地域に関する考古資料、歴史資料その他の資料を収集し、保管して公衆の観覧に供し、あわせてこれらに関する調査研究及び事業を行う。

(飛鳥資料館の館長)

第131条 飛鳥資料館に、館長を置く。

2 館長は、館務を掌理する。

(飛鳥資料館の二室及び事務)

第132条 飛鳥資料館に、庶務室及び学芸室を置く。

2 庶務室においては、飛鳥資料館の庶務、会計等に関する事務を処理する。

3 学芸室においては、次の事務をつかさどる。

- 一 飛鳥地域に関する考古資料、歴史資料、建

- 造物、絵画、彫刻、典籍、古文書その他の資料の収集、保管、展示、模写、模造、写真の作成、調査研究及び解説を行うこと。
- 二 飛鳥地域に関する図書、写真その他の資料の収集、整理、保管、展示、閲覧及び調査研究を行うこと。
- 三 飛鳥資料館の事業に関する出版物の編集及び刊行並びに普及宣伝を行うこと。
(埋蔵文化財センター)
- 第133条 埋蔵文化財センターにおいては、次の事務をつかさどる。
- 一 埋蔵文化財に関し、調査研究及びその結果の公表を行うこと。
- 二 埋蔵文化財の調査及び保存整理に関し、地方公共団体の埋蔵文化財調査関係職員その他の関係者に対して、専門的、技術的な研修を行うこと。
- 三 埋蔵文化財の調査及び保存整理に関し、地方公共団体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ、専門的、技術的な指導及び助言を行うこと。
- 四 埋蔵文化財に関する情報資料の作成、収集、整理、保管及び調査研究を行い、並びに地方公共団体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ、その利用に供すること。
(埋蔵文化財センターの長)

- 第134条 埋蔵文化財センターに長を置く。
- 2 前項の長は、埋蔵文化財センターの事務を掌理する。
(埋蔵文化財センターの内部組織)
- 第135条 埋蔵文化財センターに、教務室、研究指導部及び情報資料室を置く。
(教務室の事務)
- 第136条 教務室においては、研修の実施に関する事務を処理するほか、埋蔵文化財センターの庶務に関する事務をつかさどる。
(研究指導部の六室及び事務)
- 第137条 研究指導部に、考古計画研究室、集落遺跡研究室、発掘技術研究室、遺物処理研究室、測量研究室及び保存工学研究室を置く。
- 2 考古計画研究室においては、第133条第1号から第3号までに掲げる事務(他の室の所掌に属するものを除く。)をつかさどる。
- 3 集落遺跡研究室においては、集落遺跡に關し、

- 第133条第1号から第3号までに掲げる事務(発掘技術研究室、遺物処理研究室、測量研究室及び保存工学研究室の所掌に属するものを除く。)をつかさどる。
- 4 発掘技術研究室においては、遺跡の発掘技術に関し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。
- 5 遺物処理研究室においては、遺物の処理に関し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。
- 6 測量研究室においては、埋蔵文化財の測量に関し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。
- 7 保存工学研究室においては、遺跡の保存整備に関し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。
(情報資料室の事務)
- 第138条 情報資料室においては、第133条第4号に掲げる事務をつかさどる。
(客員研究員)
- 第139条 奈良国立文化財研究所に客員研究員を置くことができる。
- 2 客員研究員は、所長の命を受け、奈良国立文化財研究所において行う調査研究に参画する。
- 3 客員研究員は、非常勤とする。

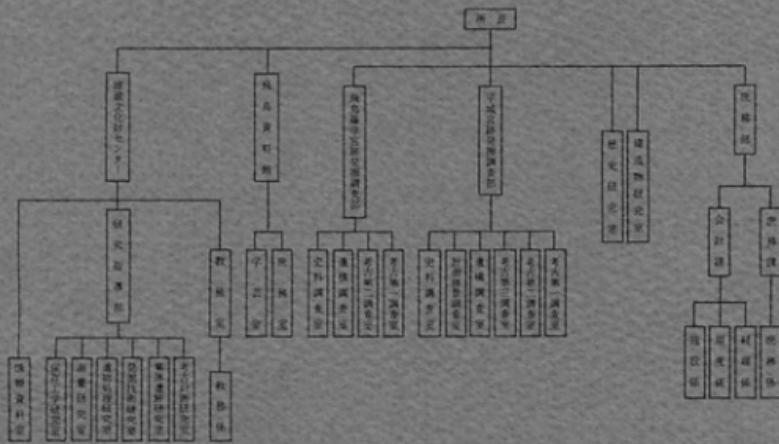
改正 昭和43年6月15日 文部省令第20号
昭和45年4月17日 文部省令第11号
昭和48年4月12日 文部省令第6号
昭和49年4月11日 文部省令第10号
昭和50年4月2日 文部省令第13号
昭和51年5月10日 文部省令第16号
昭和52年4月18日 文部省令第10号
昭和53年4月5日 文部省令第19号
昭和53年9月9日 文部省令第33号
昭和55年4月5日 文部省令第14号
昭和55年6月25日 文部省令第23号
昭和58年10月1日 文部省令第25号
昭和59年6月30日 文部省令第37号
昭和63年4月8日 文部省令第12号

職員 (1991年7月1日現在)

所属	氏名	官職	担当
	鈴木 嘉吉	文部技官所長	
	小菅 康男	文部事務官部長	
施 設 課	中川 真和	文部事務官課長	
	石塚 幸男	文部事務官課長補佐	
	西田 鶴三	文部事務官専門職員長	平城事務
	美濃越 道	文部事務官庶務係長	庶務人事物備蓄
	桑原 雅仁	文部事務官警務員	警務
	岡田 博児	文部事務官警務員	警務
	港 慎子	事務補佐員	事務補佐員
	大西 和子	事務補佐員	事務補佐員
	福本 良子	事務補佐員	事務補佐員
	新宮 恵子	事務補佐員	事務補佐員
機 械 課	賀 月子	事務補佐員	事務補佐員
	本中 宣代	事務補佐員	事務補佐員
	中川かよ子	事務補佐員	事務補佐員
	中垣 睦美	事務補佐員	事務補佐員
	講上 新子	事務補佐員	事務補佐員
	石川千恵子	研究補佐員	研究補佐員
	松岡 進	文部事務官課長	
	津田富士夫	文部事務官課長補佐	
	小野 治祐	文部事務官課長補佐	
	渡辺 康史	文部技官専門職員長	整備管理
計 算 課	阪本 勇	文部技官専門職員長	施設
	櫻井 雅樹	文部事務官専門職員長	原人事務
	新湯 淳史	文部事務官経理係長	
	林 正一郎	文部事務官経理主任	
	宍戸 雅子	事務補佐員	経理
	河村 京子	事務補佐員	理
	森本はぎ子	事務補佐員	理
	小林 雅文	文部事務官用度係長	理
	松本 正典	文部事務官用度係長	度
	飯田 信男	文部技官	度
建 造 物 研 究 室	小坂由紀子	事務補佐員	自動車運転
	細井 雅子	事務補佐員	用度
	阪本 勇	文部技官施設係長(兼任)	度
	小園 秀彦	文部技官	施設
	永井 和代	事務補佐員	施設
	米田 淳子	事務補佐員	施設
	細見 啓三	文部技官室長	施設
	山岸 常人	文部技官(併任)	施設
	浅川 渥男	文部技官(併任)	施設
	鳥田 敏男	文部技官(併任)	施設
歴 史 研 究 室	小野 善吉	文部技官(併任)	施設
	田中 淳	調査員(非常勤)	施設
	城村 宏	文部技官室長	施設
	小池 伸彦	文部技官(併任)	施設
	森 公章	文部技官(併任)	施設
	花谷 浩	文部技官(併任)	施設
	橋本 義則	文部技官(併任)	施設
	松井 春峰	文部技官(併任)	施設
	福地 次郎	調査員(非常勤)	施設
	岩本 次郎	調査員(非常勤)	施設
考古 第一 調査 室	町田 章	文部技官部長	施設
	金子 稔之	文部技官室長	施設
	小池 伸彦	文部技官	施設
	森本 晋	文部技官	施設
	中村 徳一	文部技官	施設
	毛利光俊彦	文部技官室長	施設
	玉田 英芳	文部技官(併任)	施設
	黒川 淳一郎	文部技官(併任)	施設
	杉山 洋	文部技官	施設
	山崎 信二	文部技官室長	施設
考古 第二 調査 室	小澤 裕毅	文部技官	施設
	岸田 直文	文部技官(併任)	施設
	佐藤 正敏	文部技官(併任)	施設
	上野 邦一	文部技官室長	施設
	浅川 信男	文部技官	施設
	鳥田 敏男	文部技官	施設
	松本 修作	文部技官(併任)	施設
	高瀬 要一	文部技官室長	施設
	小野 善吉	文部技官(併任)	施設
	中村 真	文部技官(併任)	施設
考古 第三 調査 室	町田 章	文部技官室長(事務取扱)	施設
	森 公章	文部技官	施設
	渡邊 要一	文部技官(併任)	施設
	寺崎 信雄	文部技官(併任)	施設
	黒川 淳一郎	文部技官主任	施設
	松本 修作	文部技官主任	施設
	堀野 和己	文部技官主任	施設
	寺崎 信雄	文部技官(併任)	施設
	佐藤 正敏	文部技官主任	施設
	杉山 洋	文部技官主任	施設
考古 第四 調査 室	黒川 淳一郎	文部技官主任	施設
	松本 修作	文部技官主任	施設
	堀野 和己	文部技官主任	施設
	本中 真	文部技官主任	施設
	寺崎 信雄	文部技官主任	施設
	佐藤 正敏	文部技官主任	施設
	西田 浩三	文部事務官主任	施設
	岡田 博无	文部事務官主任	施設
	柳原 直夫	文部技官専門職員長	施設
	井上 直夫	文部技官専門職員長	施設
考古 第五 調査 室	牛川 喜幸	文部技官部長	施設
	黒崎 直	文部技官室長	施設
	花谷 浩	文部技官	施設
	深澤 芳樹	文部技官(併任)	施設
	井上 直夫	文部技官(併任)	施設
	大脇 誠	文部技官室長	施設
	西口 寿生	文部技官(併任)	施設
	肥塚 伸保	文部技官(併任)	施設
	岩永 伸三	文部技官(併任)	施設
	牛島 茂	文部技官専門職員長	施設
考古 第六 調査 室	牛川 喜幸	文部技官部長	施設
	黒崎 直	文部技官室長	施設
	花谷 浩	文部技官	施設
	深澤 芳樹	文部技官(併任)	施設
	井上 直夫	文部技官(併任)	施設
	大脇 誠	文部技官室長	施設
	西口 寿生	文部技官(併任)	施設
	肥塚 伸保	文部技官(併任)	施設
	岩永 伸三	文部技官(併任)	施設
	牛島 茂	文部技官専門職員長	施設

所屬	氏名	官職	担当
飛 鳥 原 原 宮 跡 發 掘 調 査 部 飛 鳥 資 料 館	山本 忠尚	文部技官室 長	考 古
	山岸 常人	文部技官 (併任)	建 築
	川越 俊一	文部技官室 長	古 古
	安田龍太郎	文部技官 (併任)	古 史
	立木 修	文部技官 (併任)	古 史
	橋本 義則	文部技官 (併任)	古 史
	安田龍太郎	文部技官主任研究官	古 古
	西口 寿生	文部技官主任研究官	古 古
	肥塚 俊保	文部技官主任研究官	存 科
	山岸 常人	文部技官主任研究官	學 琴 古 古
調 査 部	立木 修	文部技官主任研究官	史 古
	深澤 芳樹	文部技官主任研究官	史 古
	橋本 義則	文部技官主任研究官	史 古
	岩永 三省	文部技官主任研究官	務 務
	櫻井 雅揚	文部事務官事務統括 (併任)	務 務
	吉岡佐和子	事務補佐員	事 事
	植垣 桂正	技能補佐員	自動車運転
飛 鳥 資 料 館	平山 重利	技能補佐員	守 守
	宮川 伴子	研究補佐員	資料整理
	相原 露之	研究補佐員	古 古
	佐伯 博光	研究補佐員	古 古
	村田 楠一	研究補佐員	古 古
	伊藤 武	研究補佐員	古 古
	鈴木 嘉吉	文部技官館長 (事務取扱)	
	柿本 治	文部事務官室 長	
飛 鳥 資 料 館	中西 建夫	文部事務官庶務主任	守 備 務
	乾 春雄	技能補佐員	警 術
	藤本 清	警務補佐員	事 務
	福井 敏子	業務補佐員	古 古
	猪熊 亜勝	文部技官室 長	古 古
	岩本 圭輔	文部技官主任研究官	古 古
	千田 利道	文部技官主任研究官	古 古
	大谷 照子	事務補佐員	務 務
	藤沢 一夫	調査員 (非常勤)	古 古

所屬	氏名	官職	担当
埋 藏 文 化 財 指 導 部 タ	田中 球	文部技官センター長	務 務
	白井 国明	文部事務官室 長	事 写
	新井 伸一	文部事務官	事 写
	岩永 恵子	事務補佐員	事 写
	牛嶋 茂	文部技官 (併任)	事 写
	佐原 真	文部技官部 長	古 古
	松沢 亜生	文部技官室 長	古 古
	中山 敏史	文部技官 (併任)	古 古
	工業 上原	文部技官室 長	古 古
	西村 康	文部技官室 長	古 古
調 査 部	松井 章	文部技官 (併任)	古 古
	沢田 正昭	文部技官室 長	保存科学
	村上 隆	文部技官	保存科学
	木全 敬蔵	文部技官室 長	測量
	谷谷 拓実	文部技官 (併任)	測量
	松井 章	文部技官 (併任)	庭園
	佐原 真	文部技官室長 (事務取扱)	古 古
情 報 室	内田 晴人	文部技官 (併任)	建築
	中山 敏史	文部技官主任研究官	古 古
	光谷 拓実	文部技官主任研究官	古 古
	上原 真人	文部技官主任研究官	古 古
情 報 室	内田 晴人	文部技官主任研究官	古 古
	松井 章	文部技官主任研究官	古 古
	伊東 太作	文部技官室 長	測量
	移田 拓良	調査員 (非常勤)	埋文情報



ANNUAL BULLETIN OF THE NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE

1991

Table of Contents

	Page
Preface	1
Excavations in the Asuka area	2
Excavations of the Fujiwara Palace and Capital sites	11
Wooden tablets excavated at the Yamada-dera temple	18
Temporary conservation treatment of stone structural materials at the site of discovery	20
Conservation Science Laboratory in the Division of the Asuka and Fujiwara Palace Sites Excavations	21
Excavations of the Nara (Heijo) Palace and Capital sites	22
Reconstruction of the Nara Period (eighth century) Lacquer ware	40
Investigation into roof tiles of the Horyu-ji temple, Nara Prefecture (Part 2)	42
Mineature pagoda of two-color glazed ceramic discovered at the Yakushi-ji temple	44
Mold for glass beads discovered in the Third Ward on the First Street, Eastern Sector of the Nara Capital	45
Document written on paper, accompanying sacred sutras in the Shinmitsuzo group at the Ishiyama-dera temple, Shiga Prefecture	46
Reconstruction of residential structures in the Nara Capital	50
Investigations into historic architectures in Kobe City	52
Mapping of the garden in front of the Ninomaru Palace and its restoration in the Ishida Castle, Nagasaki Prefecture	54
Excavations at the Daikaku-ji temple and the Osawa Pond (formerly the Saga Palace), Kyoto City (Part 7)	56
Special exhibitions at the Asuka Historical Museum	58
Investigations into zoological remains at archaeological sites (Part 7)	59
Rust removal techniques for gilded bronze metal fittings of a saddle	60
Preparation of an illustrated catalogue of wooden artifacts	61
Site surveying by underground radar	62
Digital mapping of Buddha figures	64
Restoration project of the Nara (Heijo) Palace site	66
Reports of foreign research trips	69
Outlines of the Institute's public lectures	73
Miscellaneous research news	74
Other activities of the Institute; the Institute organization	76

Published by
Nara National Cultural Properties Research Institute
Nara, 1991